



ポスト・コロニアル状況における先住民社会の変容の研究  
—オーストラリアとカナダの比較の視点から—

(課題番号 12610310)

平成12年度～平成15年度 科学研究費補助金  
(基盤研究(C)(2))

研究成果報告書

平成16年(2004年)3月

研究代表者 クホク 窪田 サチコ 幸子



広島大学・総合科学部・助教授)

ポスト・コロニアル状況における先住民社会の変容の研究

—オーストラリアとカナダの比較の視点から—

(課題番号 12610310)

平成12年度～平成15年度 科学研究費補助金

(基盤研究 (C) (2))

研究成果報告書



平成16年(2004年)3月

研究代表者 窪田 幸子

(広島大学・総合科学部・助教授)

## 目次

はじめに	-----	i
【研究組織】	-----	v
【研究経費】	-----	v
【研究発表】	-----	v
アボリジニ社会の現在と女性	-----	1
ヨルングの記憶とミッションの半世紀	-----	20
ポストコロニアル状況にみるキリスト教	-----	41
ジェンダー関係とミッションの影響	-----	54
Christian ideals and gender	-----	85

## はじめに

### 1 本研究の目的とその意味

19世紀から20世紀にかけて、西欧社会は、政治、経済的な圧倒的な力の差のもとに、非西洋社会を支配し、抑圧し、搾取してきた。こうして、非西欧社会の多くは植民地化を経験した。そして、被植民社会では、第二次大戦後になって独立した現在も、植民地経験による影響を様々な形で継続して経験しているのである。こうした状況をポストコロニアルとよび、現在、文化人類学を始め、人文科学、社会科学分野の研究の重要な視点となっている。しかし、この研究で取り上げる二つの民族、アボリジニとイヌイットは、単純に非西洋社会として植民を受けたのではなく、支配側の西洋社会が国民国家として彼らを内包してしまい、その国民国家の枠組みの中で植民地化を経験した集団である。それゆえ、彼らの経験は独自であり、現在の状況も独自である。筆者は、1985年以来オーストラリアのアボリジニ社会の研究を行ってきた。ここでは1930年代のキリスト教のミッションによる入植から西欧社会とアボリジニ社会の接触の結果、貨幣経済化が進み、技術が導入され、狩猟採集を中心とした生業の姿は大きく変化した。しかし、その一方で、土地権をはじめとする先住民の権利主張の動きが明確化し、それにともない儀礼や芸術などの自民族の伝統への回帰の動きも先鋭化している。こうした問題について、筆者はこれまで特にジェンダーの視点で考察してきた。しかし、現状は、さらにポストコロニアルという視点からとらえることで、より明確にその全体像に迫ることを可能にすることに気づいた。2年前から、カナダのイヌイット社会の文化変化をジェンダーの視点から考察する研究に着手した。この二つの社会は、西欧社会の入植の時期、入植側の国民国家が共通していた点など、歴史的経験に共通性がみられる。また、いずれもが狩猟採集民族であり、移動を基礎とする政治的社会組織が比較的単純な社会であったことも共通している。しかし、現在見られる社会の諸相は単純ではなく、ここでもジェンダーの視点にポストコロニアルの視点を加えることで、実態により迫ることができると考えられる。この研究では、オーストラリアとカナダというそれぞれの国民国家の中で、先住民であるアボリジニとイヌ

イトが経験した(1) 生業の変化、(2) 貨幣経済化、(3) キリスト教ミッションの経験に焦点をおき、植民地体験の諸相の具体的内容をあきらかにしようとする研究である。

「国際先住民年」(1993年)、「国際先住民の10年」(1993-2003年)における国連の問題提起を契機に、先住民と国民国家の関係のあり方が国際的に注目されている。こうした時代の趨勢の中で、国民国家における先住民の現状とその地位と権利、先住民の対応を解明する研究がもとめられている。また一方、植民地経験の問題は、文化人類学における歴史的視点の必要性の認識と共に、多くの注目をあつめている。この研究は、こうした流れの中にありながら、なおかつ大英帝国が、植民地化し英連邦の一員としてつくった、国民国家なかでの植民地経験を取りあげるものである。こうした視点はこれまでには、はっきりと提示されたことは少なかったといえるだろう。しかも、カナダとオーストラリアは、それぞれが多文化主義という政策を打ち出しており、歴史経験のみならず、国家政策や移民、先住民政策にも様々な共通する点が見られる。こうした二つの国家の中での先住民が経験した、植民地経験の比較は、これまでのポストコロニアルな状況についての研究に、あらたな知見をつけ加えることを目的としている。また、筆者のこれまでの一貫した視点は、現在の先住民社会の動きを、ジェンダーの視点からとらえ直すというものであった。この研究では、こうした視点にさらにポストコロニアルという歴史の深さをくわえる研究視座からの研究である。

本研究は、共同研究からの協力と刺激を得ながら、おこなわれてきた。カナダ、オーストラリアそれぞれの地域の研究者との研究を巡る議論は刺激的であり、植民地経験、ジェンダー、比較という視座を加えたこの研究を発展させることが可能になった。それは、あらたな共同研究の可能性につながるようなものであったと考えている。また、オーストラリア、カナダをはじめとする海外においても、ポストコロニアル状況にある先住民という視点からの文化人類学的研究や、先住民の権利意識の興隆、歴史的視座からの研究、ミッションの影響、生業の変化、などのテーマについては活発に行なってきた。本研究は、それらの研究の流れの中にあると同時に、両者の比較というあらたな視点を持ちこみ、両者を比較し、さらに、ジェンダーとポストコロニアルの視点を提示するという研究である。

## 2 研究の経緯

本研究では、ポストコロニアル状況への視点として、1) ミッションの遺産、2) 社会福祉の影響と生業変化、3) 先住民としての権利主張の伸張、という3つの柱をたてた。これらの歴史的背景を明らかにするため、研究初年度である12年度には植民地においてどのような経験があったのかについての歴史的資料を調査し、収集することを中心とした。植民地経験を記録した旅行記や書簡、日誌などから、植民地経験についての調査をおこなった。

翌平成13年度には、カナダのイヌイト社会において補充調査を行った。平成11年度に調査におとずれたケベック州、イヌクジュアック村において、ポストコロニアル状況に焦点を絞り、女性の植民地経験とその認識について聞き取り調査を行うと共に、モントリオールのマクギル大学において関連資料を収集した。その一方で、マイクロフィルム、文献などからの歴史的資料の整理、収集は継続しておこなった。

平成14年度は、オーストラリアのアボリジニ社会において補充調査を行うとともに、国立アボリジニ・トレス海峡民研究所において歴史資料を収集した。調査は、これまでの調査地との比較のため異なる宗派のミッションが入植した地域である西アーネムランドを調査した。文献などからの歴史的資料の整理、収集は継続した。

最終年度の平成15年度には、前3年間の成果をふまえ、カナダとオーストラリアの地域性を析出し、通文化比較によって、ポストコロニアル状況における1) ミッションの遺産、2) 社会福祉の影響と生業変化、3) 先住民としての権利主張の伸張について、ジェンダーというテーマを念頭におきながら、包括的分析を可能にするような視座を提示するための総括をおこなった。

以上のように、本研究では、19世紀から20世紀にかけて非西欧社会で起きた植民地化の結果としてポストコロニアルな状況にあるアボリジニとイヌイトの社会に注目した。この二つはいずれも入植側が国民国家を形成し、先住民である彼らは、その枠組みに内包されることになった社会である。いずれの社会でもみられる現在の先住民の権利主張の動

きの背景には彼等の歴史的経験があるだろう。このような現在の具体的諸相を明確に把握する目的で、ポストコロニアルの視点から両社会を検討してきた。一方でカナダの植民地時代の資料を検討整理し、現地調査によるイヌイット社会の生業変化、価値観の変化、権利主張の動きについての資料を歴史的背景のなかで検討した。また、オーストラリアについても近年の生業と社会変化、価値観の変化、権利主張の伸張の動きについて現地調査をおこなうとともにその歴史的情報と重ねて検討した。その結果、いずれの社会においても植民地時代の入植者との関係のありようが、現在の彼らの生活に大きな影響を与えていることが明確になった。とくにジェンダーの視点からの検討からは、それぞれの先住民社会におけるジェンダー概念と入植者の社会におけるジェンダー概念との間には動態的な相補性があることが指摘できた。そしてさらに、この両者の歴史的経験を細かく比較してみると、入植の時期、入植者側がいずれの英国系を主としていたこと、先住民社会との関係のとり方などに類似した点が見られるものの、同時に、その入植の実像と彼等の経験には、多様な差があることが明らかになった。そしてそのような経験の差が、現在の先住民の権利伸張運動や、主流社会との対応や交渉といった日常的な場での独自の実践につながっていた。ポストコロニアルの視点からの本研究によってそれぞれの国民国家で、その中に内包された先住民が経験した植民地体験の具体的諸相を明らかにすることができた。なお、この研究成果に基づき、2004年度6月に開催予定の日本文化人類学会研究大会において研究発表をおこなう予定である。

## 【研究組織】

研究代表者 窪田幸子 広島大学・総合科学部・助教授

## 【研究経費】

交付決定額(配分類) (金額単位:千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成12年度	1,000	0	1,000
平成13年度	1,100	0	1,100
平成14年度	1,000	0	1,000
平成15年度	500	0	500
総計	3,600	0	3,600

## 【研究発表】

窪田幸子 2000年「オーストラリア・アボリジニとキリスト教ミッションの半世紀—北東アーネムランド、ヨロンゴの記憶」吉岡正徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究』国立民族学博物館研究報告別冊21号、Pp. 87-108、国立民族学博物館。

窪田幸子 2000年「自然・神話・人間—オーストラリア北部アボリジニの世界」松井健編『自然観の人類学』Pp. 97-130、溶樹書林。

窪田幸子 2002年「ミッションの遺産—ポストコロニアル状況に見るキリスト教」杉本良男編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容7 宗教と文明化』Pp. 122-142、ドメス出版。

小山修三・窪田幸子編著 2002年『多文化国家の先住民—オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社。

窪田幸子 2002年「ジェンダーとミッション—オーストラリアにおける植民地経験」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』Pp. 239-264、関西学院大学出版会。

Kubota, Sachiko 2003年 'Legacies of the Mission: Christian Ideals and Gender' Hayami, Y. A. Tanabe & Y. Tokita-Tanabe eds. "Gender and Modernity—Perspectives from Asia and the Pacific" Kyoto Area Studies in Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University VOL 4, Pp 17-40, Kyoto University Press & Trans Pacific Press.

窪田幸子 2004年「アボリジニの二〇世紀—神話と土地とその語り」端信行編『民族の二〇世紀』ドメス出版、204—226頁。

# アボリジニ社会の現在と女性

## 1 アーネムランドの歴史

### 1) 現代のアボリジニ女性の経験

オーストラリアのノーザン・テリトリーの再北部の海岸地域には、約一五万平方キロメートルの広さのアーネムランドと呼ばれる地域がある。ここは一九三一年に保護区 (Aboriginal Reserve) に指定され、その後一九七七年にアボリジニの土地 (Aboriginal Land) とされた、外部者は許可なく立ち入ることができない地域である。ユーカリ種が卓越した疎林、岩場、沼地が混在する平原が続き、大きな川が蛇行する。熱帯気候で年間を通じて日中気温は三〇度を下まわることはない。季節は雨季と乾季にわかれ、一一月頃から二月頃まで続く雨季には、増水によって道路が寸断される事態も頻発し、車での移動は困難になる。ノーザン・テリトリーには、約四五〇〇〇人のアボリジニが暮らしており、これは、オーストラリアの全先住民人口の一五パーセントをしめる。

この章では、このアーネムランドの北東海岸部にすむヨルング (Yolungu) の人々の現在とその経験に焦点をあてる。ここ約五〇年のあいだに彼らが経験してきた変化は大きなもので、もちろんその経験も個人によって多様である。本論では、個別の生き様に、それも、ある女性のの人生に注目し、ミクロな視点からアボリジニの経験を描くことを試みる。

ミクロな視点から社会や文化を理解するという視点については、これまでも長い議論がある。人類学は全体的にとって長く構造や体系を重視してき、個人はむしろ回避される傾向があったといえる。しかし、80年代以降個人、セルフ、サブジェクトなどに注目する研究が見直されてきている。こうした中で、比較的早くから、個人に注目して調査を行ってきたのがライフヒストリー法である。その方法論的な問題はあるものの、社会研究の中で、個人と全体を繋ぐ回路として、個に注目すること社会の理解に深みを与えるような、文化記述の可能性を生むと期待されている。

ここで取り上げるジョアンという女性は、他のヨルングと同様に多様な変化を経験し、その影響を受けてきた。彼女は現在ではその将来を期待

されるような有能な存在となってきた。ところが期待される存在として注目を集めるようになると、女性である彼女は伝統の枠組みの中で様々な困難にぶつかっている。このような個別の、しかも女性の経験に具体的に寄り添うことで、その実態を具体的に描き、動態的な社会の姿を明らかにすることを試みる。

章の構成としてはまず、第一節と、第二節で導入としてアーネムランドの歴史とヨルングの町の現状を概説する。そして第三節で、ジョアンという女性と彼女の家族の経験と現在と述べる。本来は個別の具体的な語りや叙述、資料等によって、個を語る手法をとるべきであるが、ここではこの本の性格上、また紙幅の制限上、ジョアンの語りに筆者の大まかなコメントを加えつつ、彼女の人生における実践を浮かび上がらせる手法をとる。筆者は1985年に調査に入り、その時にすでにジョアンの家族に知り合っている。そして翌年の本調査でジョアンの家族に娘として受け入れられ、ジョアンとは擬制的姉妹関係にある。家族の中で年齢的にももっとも近く、英語も堪能な彼女は、筆者のアドバイザーであり主要なインフォーマントの一人であった。このジョアンの個人史についての記述は、このような長い期間のインタビューを基礎とした叙述である。

ヨルングとして、女性として、オーストラリアの北の果ての東アーネムランドで二〇世紀の後半に生きてきた経験とはどのようなものだったのか、そして、女性たちからみた現状からは、一体どんな未来がみえてくるのかを考えてみることにする。

## 2) アーネムランドのキリスト教ミッション

アーネムランドのこの地域は、オーストラリアの他地域とは、入植の歴史的経験が異なっている。一七八八年にはじまるオーストラリアへの入植により、シドニー地域を初めとする南部では、アボリジニの人びとはその土地を奪われ、生活基盤をなくし、暴力的な攻撃と新たにもたらされた疫病によって、多くのアボリジニの地域社会は崩壊していった。一般的に言って南部での入植はこうしたイメージで語られる。しかし、オーストラリアの北部における本格的な入植は一九世紀終わりになってからのものであり、その主体はキリスト教ミッションであったのである。つまり、南部で経験されたような暴力的な侵入や社会崩壊は北部では一般的には経験され

ることがなかったといつてよい。二〇世紀のはじめになって、キリスト教ミッションによる布教活動が北部へと伸張していく。このころ南部ではアボリジニは接触の結果、混血し、人口を減らし、その多くが都市の下層民として暮らしていた。こうした都市のアボリジニは救いようのない人びととみられていた一方で、北部にはまだ手つかずの純粋な文化を持ったアボリジニがおり、彼らを白人社会の悪影響から守り、保護し、文明化しようとしたのが、キリスト教ミッションであったのである。彼らは、基本的にアボリジニを保護しようという目的を持っていた[窪田 二〇〇〇]。

ミッションの白人との接触が始まる以前、この地域ではセレベス島からのマカッサルとよばれるインドネシア人の季節的移動漁民や、白蝶貝をとりてきた日本人漁民との接触があった。特に一七世紀から継続して、季節的にオーストラリア北海岸地域を訪れ、ナマコを採取し、貿易をおこなっていたインドネシアのマカッサルによる影響は比較的大きく、この地域の言語には今も多くインドネシア語からの借入語が残っている。しかし、それらの接触をのぞいてはこの地域は長く孤立しており、南部でおきたような白人の入植の経験としての暴力的な接触はほとんど経験されることがなかったのである。

アーネムランドは保護隔離主義の政策の中で、純粋なアボリジニを守ろうと、一九三一年に保護区に指定される。そしてこの章の舞台である、北東アーネムランドのヨルング地域には、キリスト教プロテスタントのメソジスト派ミッション(Methodist Overseas Mission)によって一九三一年、三五年、四二年にそれぞれ、ミリングンビ(Milinginbi)、イルカラ(Yirrkala)、そしてガリウィンク(Galiwin'ku)の各セツルメントが、布教活動の拠点として建設されていった。それまで数家族規模の居住単位で、遊動的な狩猟採集の生活を送っていたヨルングたちは、ミッションの提供する食事をはじめとする物質とセツルメントの利便性に引き付けられ、しだいにこうしたミッションの拠点に集住するようになる。特にヨルング地域は、その集住がスムーズだったといわれ[Keen 1994]、それぞれのセツルメントでは、ヨルングの保護を目的とし、教育、布教、医療が実践されていったのである。ヨルングの経済的に自立した生活をめざして、産業の振興が模索され、技術指導もおこなわれた。このように、この地域の入植の歴史はキリスト教ミッションを中心とした平和的なものであった、という

意味で独自であり、そのことが現在のヨルングの人びとに与えた影響は大きい。その後、アボリジニ政策が同化政策を経て、一九七〇年代になって自立自営政策にかかわるとともに、ミッションは経営から手を引いていった。現在ではアボリジニ自身による自治によって、それぞれのセツルメントはその規模を拡大して町として運営され、数一〇〇から一〇〇〇人を越えるアボリジニが定住している。

## 2 エルコ島、ガリウインクの町

### 1) ガリウインクのインフラ整備

筆者は一九八五年からエルコ島の町、ガリウインクを中心とする地域で継続して調査をおこなってきた。ガリウインクは、ミッションが建設した小さなセツルメントを基礎として発展してきたが、二〇〇〇年現在、一〇〇軒をこえる住居と学校、町役場、病院などの公共建築物が並び、一〇〇〇人をこえる人口を擁する町になり、政治的な組織も整えられた。アボリジニ以外にも、町の経営を援助する白人も五〇人ほど住んでいる。町は、こうした白人たちの助けをえながら、一九七〇年代からはアボリジニ自身による自治によって運営されている。この変化は、一九六七年の国民投票によってアボリジニがオーストラリアのセンサス統計に加えられるようになり、国民としての権利を得、アボリジニ政策が自立自営へと変わってきたことによる。

こうした流れの中で町では様々な設備投資がおこなわれてきた。現在のガリウインクには、基本的な町の機能は全てそろっているといてよい。町役場、銀行、郵便局、幼稚園、小中学校、病院、自動車修理工場、ガソリン店、飛行場、上水タンク、下水処理池、発電所、スーパーマーケット、クラフトショップなどがそろっている。これらの設備はいずれも一九八五年に筆者が最初に調査にここを訪れたときにはすでにあつたものだが、それ以降に建物が新しいものに建て替えられたり、改装されたりして近代的で立派な施設になった。町のメイン・ストリートは簡易舗装され、飛行場は拡張され、チェックインカウンターを備えた建物が建てられた。成人教育施設、女性センター、子供のデイケアセンター、そしてファーストフード店数軒も新築された。住宅の供給不足を補うための建築で答えた。実は

この頃彼女には、ダーウィンで出会ったアボリジニのボーイフレンドがいた。その人のことについては、一九八五年に初めて筆者が彼女にであってからずっと話を聞いていた。彼がこちらにやってきましたり、彼の住むお隣のミリングンビに出かけていったりして二人の関係は続いていたが、親族関係上正しい相手ではないため、どうしても父は認めてくれようとせず、ずっとジョアンは悩んでいたのである。その挙げ句の決断がこの親がすすめる結婚だった。

しかし、この結婚は長続きしなかった。当時のジョアンは学歴もあり、利発で、才能にあふれ、マーケットへは月二回、舟(barge)で様々な物資が運ばれるが、新聞、パン、卵、郵便は飛行機で毎日運ばれるようになった。一九八六年には新しく大きなスーパーマーケットがつくられ、その後バーコードのキャッシャーも導入された。一九八七年には通信衛星によってテレビが受信できるようになり、一九八八年には電話が通じた。それまでの無線電話からすると画期的な変化である。コンピューターも各機関に備えられるようになり、少数ではあるがEメールを使いこなすアボリジニも出てきた。ガリウィングにいて手にすることのできる情報はこうして飛躍的に増えた。この一五年間で都市と町との距離は急速に縮まってきたといえる。このように外部社会との接触機会も増加し、町が発展していくなかで、貨幣経済はかれらの生活において、ごく日常的なものとなっている。かれらの現金収入源は、町の各機関での雇用労働による賃金、美術工芸品の製作販売による。しかし、雇用機会は十分ではなく、圧倒的多数が社会福祉補助金や年金を得ている。彼らは、手にした現金によってスーパーで買い物をし、車やボート、テレビを購入し、飛行機で近隣の町へ出かけてゆく生活をおくっている。

## 2) 伝統へのこだわりと日常生活

このように我々と大きくかわらない近代的設備を利用するような生活の一方で、彼らの生活には伝統的部分も色濃く残る。日常言語はヨルング語であり、生活の基本は父系出自集団、クランである。クランは、神話、聖地、土地の所有単位であり、彼らのアイデンティティのよりどころである。どのクランのメンバーであるかによって、踊りや歌、描く絵、神話、住む場所、婚姻相手など生活のすべてが決まってくる。神話を基礎とする伝統

的な儀礼は、重要視され、ヨルングの人びとの生活の主要な関心事であり続けている[Morphy 1991]。この地域のアボリジニを一躍有名にした複雑な親族規則も修正されつつ維持されている。車やモーターボート、散弾銃やライフルを用いての狩猟活動は日常的な活動であり続け、女性の採集活動も活発におこなわれている。つまり、ヨルングの人びとは現在、新しい技術や物資、そして価値観や知識を積極的に受け入れている一方で、いわゆる伝統的なクランを基礎とする生活へのこだわりもちつづけているといつてよい[窪田 1999]。

ガリウィンクに暮らす人びとの日常生活は、ゆっくりしている。八時半には、学校や職場にいるはずの人びとだが、その時間にはまだ寝ている者も多い。ようやく起き出した人びとは簡単な朝食をすませて、職場や学校へ出かけてゆく。仕事のない人びとは、さらにゆっくりと起き出し、家のそばにシートを広げて座り、お茶を飲んだり、おしゃべりをしたり、カードをしたりしてゆったりと一日を過ごす。特別に町に用事がないときや、季節や潮が適当なとき、気がむけば朝から狩猟や採集に出かけることもある。スーパーマーケットは週末以外の十時から一時と三時から五時まで開店するので、お金があるときには買い物にも出かける。十二時をすぎると午前中の仕事や学校を終えた家族が帰ってくる。そして昼食をすませ、一時過ぎに再び職場と学校にそれぞれ戻っていく。二週間に一度、賃金、社会福祉金と失業保険の支給日がある。支給日には午前九時過ぎには人びとが町役場に集まり、それぞれの小切手をうけとる。この日は、スーパーマーケットは大変ににぎわうのである。

こうして多くの人々が現在では町に居住しているが、ガリウィンクの町を中心としてブッシュにはアウトステーション(Outstation)と呼ばれる小規模の村が点在する。これらは一九七〇年代から伝統回帰運動として建設されるようになった、数家族単位の村である[Coombs 1978]。ガリウィンクの周辺には総計二十ほどのこのような村が点在する。村の集団構成や規模、クランの領域に建設されることが多いことなどは、これらの村がミッションに集住する以前のかつての生活単位に近いものであることを示している。しかしかつてとは異なり、村を移動することはなく、定住の村であり、住居、水道、電気などの近代的設備が整い、車や飛行機、電話によって町との密な情報網でむすばれているなど、状況は大きく異なる。ヨルングの人

びとは、町やこうした村の間を気軽に行き来しながら暮らしているのである。こうしたアウトステーションをふくめたガリウィンク管区全体の総人口は約一五〇〇人といわれている。

このように、現在のアーネムランドのヨルングの人びとの日常世界は、現代的な生活要素と伝統的な生活要素の双方が混在している。現代的な生活要素がヨルングの人びとの生活に大量に流入し始めたのは一九七〇年代以降であり、ほんの短い期間に急激な変化がかれらの生活の諸側面で起きたということができる。

### 3 ジョアンの生い立ち

#### 1) ジョアンの子供期

一九六一年生まれのジョアンは、現在四〇歳。これからのガリウィンクの重要人物になっていくであろうと期待されている女性である。彼女の生い立ちと現在の生活を、彼女の語りを交えて、みてゆくことにしよう。彼女のこれまでの具体的な経験や困難、そして現在の彼女の思いを手がかりに、アーネムランドに暮らす人びとの、そして女性たちの、オーストラリア主流社会とヨルング社会の現実のはざまを生きる実像に近づきたいと思う。

ジョアンは、一九六一年一月にアルフレッドとメアリー夫妻の初めての子供としてガリウィンクの診療所で生まれた。当時は、診療所には白人の看護婦が二人いただけで、医者はいなかったし、その他の設備も今とくらべると限られたものではあったが、ガリウィンク・ミッションがもっともうまく運営されていた時代である。アルフレッドは、ガリウィンクでもっとも人口の多いAクランの主要な家系の長男であり、メアリーは、隣接地域の有力クランであるBクランの主流家系の長女であった。BクランはAクランに妻をあたえるべきクランで、この二人のあいだの婚姻は、婚姻規則上正しいものであったが、同時に、ミッションの影響を受けた夫婦間年齢の近い、一夫一婦婚であった。両親それぞれの父親は、ミッションの建設に尽力した町の有力者であり、キリスト教に協力的で、町で尊敬を集めていた人物であった。つまりジョアンは、母方からしても父方からしても、町の有力者の家系にうまれたことになり、おまけにこの世代の一

番最初の子供でもあったため、ミッション中の注目をあびて育ったという。

当時、アルフレッドは機械工として働き、母であるメアリーは学校で補助教員をしていた。母の妹たち二人（ジョアンにとってはいずれも「母」にあたる）も補助教員をしていた。幼いジョアンは、毎日学校で、母たちと、そしてミッションの白人たちに可愛がられて育った。

当時、ジョアンたち一家が住んでいた家は、小さなマッチ箱のような家だった、と彼女は語る。「トイレは別棟で、水道も外だったと思うわ。部屋は一つだけで、みんなでそこに寝ていたのを覚えている。小さかった私は、その方が嬉しかったけどね。今とくらべるとほんとに屋根があるだけの小屋のようで、電気もない、何もない家だったわね。樹皮の小屋を使っている家族もあったわよ。朝おきると、母がかならずシャワーをあびるようにとうるさくいったのをよく覚えている。寒い時にはそれがいやでね。それからこの縮れ髪を母がブラッシングするの。ブラッシングは大嫌いだった。痛くってね。今とくらべると、大人たちはよく働いていたし、子どもにも厳しかったわね。日曜日には必ず教会にいったわ。日曜日用のきれいな服に着替えて。当時は、ほとんどの人が教会にいつていた。白人たちもみんなね。」

「私は、当時キリスト教に熱心だった両親のおかげで婚約者はいなかった。結婚すべきとされる相手はもちろんいたけれど。十歳ぐらいになると、友だちの中には、自分に婚約相手がいることにとても悩んでいる人もいた。かわいそうだったわ。私の友だちの中には小学校をおわるとすぐ、夫の家にいった人もいたわ。」この地域の婚約は、女の子が生まれる前に決められている。伝統的には夫となる人がずっと年上で、一夫多妻ですでに数人の妻をもっている人と結婚することになるケースが多かった[Shapiro 1981]ため、ミッションの時代には、一夫一婦の年の近い男女の間での結婚が奨励されていたのである。

## 2) 学校教育と進路

幼い頃から利発であったジョアンは、学校が大好きだった。学齢期になると、その才能はますますはつきりとあらわれるようになっていった。当時の小学校<sup>三</sup>では、英語のみでの教育だった[McKenzie 1976]。ジョアンは英語が得意で、算数、理科も得意科目だった。白人の先生たちも彼女の才

能をみとめ、三年生になる頃には、高校、大学と進んで、医者か教員になるようにとさかんにすすめられたという。

彼女が、中学に進む一九七〇年代半ばには、ガリウイंकはずいぶん変わりはじめていた。国民投票によって、アボリジニは市民権をえ、ミッションが町の経営から手を引き、ヨルングの大人たちは社会福祉金や補助金などそれまでにない高額の現金を直接手にするようになった。町の機関のそれぞれでは、経営をアボリジニにまかせることが試みられたが、その多くが失敗に終わる。ミッションの時代に運営されていた産業のほとんどは破たんし、ミッションナリーの支えを失い、人びとの生活は混乱した。その一方で、町への設備投資は活発になってゆき、ガリウイंकの生活はどんどんと便利になっていった時代であった。

「私は、中学をおえると、ヘルスワーカー（準看護婦）になることにした。まず、ダーウインの高校に進み、そのあとアリス・スプリングスにあるヘルスワーカー養成のための専門学校にいった。どちらもアボリジニのための学校で、全寮制だった。特にアリスでは、アーネムランド以外の地域から来たアボリジニが一緒に、言葉も通じず、私はホームシックにかかったわ。ガリウイंकから一緒にダーウインの学校に進んだのは、四人。みんな女の子。男の子は中学に進むころに学校に行かなくなってしまうから。」

ヨルングの地域では、男の子は早くて六歳、おそくとも一二歳ごろまでには成人儀礼として割礼をうける。この儀礼を終えると、男の子は大人の入り口にさしかかったとみなされ、男性のみの儀礼に参加できるようになる。儀礼を終えた男の子は、女性たちの空間からはなれてゆくようになり、女性の言いつけにも従わなくなる。また、男女間の特定の親族関係にある者の間に適用される禁忌も厳しくなる。女性に従う事への不快感もあるという。学校では、指導をするのは白人の女性であり、教室内には禁忌の関係にある異性の学生がいることも多い。また儀礼に参加する機会が増える男の子は、しばしば学校を休むことになる。多様で複雑な理由によって結局学校をやめてしまう男子は多く、結果として専門職についているのは圧倒的に女性が多い。

ジョアンは、他の同世代の女性たちとくらべても英語がうまく、しっかりしている。さらに彼女は、アリスからガリウイंकに戻ってからも、通

信教育での英語の勉強をつづけていた。「アリスでの経験はつらかったけれど、とてもいい勉強になったと思う。立場の違う人びとがいることも知ったし、白人の社会についても多くを学んだ。英語がきちんとできなくては認められないこともはっきりと分かったもの」とジョアンは当時を振り返る。

### 3) 仕事とポリティックス

ジョアンは、一九八二年にガリウィングに戻り、ヘルスワーカーとして町の診療所で働きはじめた。当時はまだ医者はおらず、白人の看護婦資格をもつものが三人常駐していた。ジョアンたちヨルングのヘルスワーカーは七人いたが、いずれもまだ看護婦資格はなく、通信教育と定期研修を続けていた。ヘルスワーカーは重要な仕事だとジョアンはいう。

「ヨルングの中には、まだ白人のシステムになれておらず、理解できない人も多し、医療が分かっていない人もおおい。私たちの仕事は、白人の医療を正しい形でヨルングの人びとに伝え、利用しやすくしてあげることにある。ヨルングの衛生、栄養、健康状態は決してよくはなく、私たちができる仕事は、山積み。そのためにも、私は勉強を続けているの。」

さきにも述べたように、現在、ジョアンをはじめとしてヘルスワーカーは一人をのぞいて女性であり、学校で教員として働くのも女性である。彼女らは非常に明確な目的意識を持ち、活躍している。しかし、彼女らを取りまく状況は、複雑である。なぜなら、キャリアを積み、ヨルング社会の中で活躍することは、しばしば伝統の枠組みで親族組織が要求する女性としての立場や、若い者としての立場の範囲を逸脱することにもなるからである。

「私は、今でも多くの人から、特に白人たちから医者になる勉強をするようにといわれている。一時は自分でもその可能性について考えもした。でも、それはとても大変なこと。私は、今では診療所の準責任者で、いろいろな重要な決定をしなくてはならず、町の人びとに対して、それを伝えて分かってもらわなくてはならない立場にある。人びとがこの診療所に要求してくる様々なことに対応し、できないことを伝え、わかってもらうように説明するのも私。年長の特に男たちに、この診療所を代表して応対しなくてはいけない事態がたびたび起こる。そのプレッシャーは非常に大き

い。私が責任ある立場につけばつくほど、嫉妬もあるし、特に年長の男性たちに対抗するような立場になると必ず、「ブンゴワしている(威張っている)」と非難されることになる。ましてや医者になった場合を考えると、人々の死と関わることも増えるわけで、その重圧はさらに大きくなるでしょう。それを思うとね・・・。」

女性として、キャリアをつむ彼女らであるが、ヨルング社会の地域政治の中では男性が中心であり、その顔を潰すことはクラン間の争いにも繋がりがねない。それはなんとしてもさけるべきことである。昨年、ジョアンは町議会のメンバーに選出された。町議会にはいつも一人か二人の女性が入るのが普通で、それ自体はそれほどめずらしいことではない。しかしジョアンの場合はさらに複雑な事情があった。彼女の父のアルフレッドは、今ではガリウインクのクランの長老であり、中心人物の一人である。彼が、同時に議会の副議長に選ばれたのである。同じ議会に父と娘が並ぶのは、おそらくガリウインクでは初めてのことだろうとおもわれる。このことがうむ問題の複雑さは、私たちの想像をはるかに超える。客観的に見て、オーストラリアの主流社会の政治経済的事情に通じているのはジョアンの方であるし、事務能力、英語能力共に圧倒的に彼女の方がアルフレッドより上である。しかし、議会での発言はなにをおいても父を優先しなくてはならないし、彼の判断に反対することは、ジョアンにとって不可能に近い。そんな中で、町の運営に彼女が主体的にかかわることは、まるで曲芸のようなバランス感覚を必要とする。彼女にとって責任あるキャリアを積むことは単なる個人的なことではなく、クランの成員として、しかも女性としておこなわなくてはならない。それは決して、容易なことではないのである。

#### 4) 婚姻の規則と家族

ジョアンには婚約者はいなかったが、ヨルング社会で親族関係上正しい婚姻相手とされる彼女から見て「母方の祖父の姉妹の娘の息子」にあたる、彼女よりも五歳年上の男性と、一九八八年に二八歳で結婚した。この年令はヨルングの伝統的な結婚年令からすると異常に遅い。この地域では結婚式はなく、男性の家で一緒に暮らすようになると結婚したとみなされる。ある日、ジョアンの父方の叔母にあたる女性の家で、掃除をしている彼女

をみかけた。何をしているのかといぶかしむ私に、「父と母を喜ばせるために結婚したの」と、浮かない顔で答えた。実はこの頃彼女には、ダーウィンで出会ったアボリジニのボーイフレンドがいた。その人のことについては、一九八五年に初めて筆者が彼女にであってからずっと話を聞いていた。彼がこちらにやってきましたり、彼の住むお隣のミリングンビに出かけていたりして二人の関係は続いていたが、親族関係上正しい相手ではないため、どうしても父は認めてくれようとせず、ずっとジョアンは悩んでいたのである。その挙げ句の決断がこの親がすすめる結婚だった。

しかし、この結婚は長続きしなかった。当時のジョアンは学歴もあり、利発で、才能にあふれ、自信に満ちた潑らつとした若い女性だった。それに対して、夫のジムは、中学で学校を離れて以来、きちんとした職もなかった。結婚して半年もした頃、再び彼女は、父母の家に戻っており、「もう、これ以上、あなたを幸せにするために暮らすのは嫌だ、とハッキリいって出てきちゃった」と、いたずらっぽく語っていた。本当のところは、ジョアンが軽くいうほど離婚は一般的なことではなく、主要な家系の彼女であるから大きなスキャンダルにならずにすんだということは、あとから他の女性に聞かされたのであったが。

一九九一年になって、さらに彼女の家族に大きな変化がおきた。それは、両親の変化からはじまった。それまで一夫一婦の夫婦だったのだが、父のアルフレッドが二人目の妻を迎えたのである。ヨルング社会はもともと一夫多妻制で、妻を複数持つことは珍しいことではなかった。アルフレッドの父には六人、メアリーの父には一人の妻がいた。しかし、ミッションの影響下で、一夫多妻は望ましくない、という意識が共有されるようになった。特に女性は複婚を好まない。アルフレッド自身も八八年頃に筆者に向かい、一夫一婦が正しい夫婦の形で、自分がいかにそれを大切に守っているか、をとくとくと語っていたのである[窪田 一九九七b]。おまけにアルフレッドの今回の結婚は、恋愛結婚だったことが、さらに事情を混乱させた。伝統的な一夫多妻は、親族間で結ばれた婚約に基づいておこなわれるもので、そこには義務関係が大きく影をおとしている。つまり、それは個人の好みとは関係のない、「仕方のない」結婚である。ミッションの時代に、すでに複数の妻を持っていた男が、一夫一婦を守ると宣言し、妻たちを返し、それ以外の迎えるはずであった妻たちも拒否したという出来事が

あった。これは、逆にクランの義務を軽視したことを意味し、クラン間での戦いに繋がって、緊張を生んだという事例がこのことを示している [Shepherdson 1981]。

アルフレッドはダーウィンに仕事でいていた時に、ミリングンビ出身でダーウィンで暮らしていたリジーに出会い、子供ができた彼女をガリウインクに連れ帰った。アルフレッドとリジーは親族関係上でも結婚してよい関係なので、その点ではクランからは何の文句もでなかった。しかし、それまでとても仲のよい夫婦であっただけに、メアリーには大きなショックであったようだ。しかし、メアリーはなんとか状況を受け入れようとしていたように見受けられた。ところが、おさまらないのはリジーの方だった。彼女は以前に白人男性と暮らしていたこともある女性で、アルフレッドとも恋愛をし、一緒に住むようになったわけである。その彼女にとって、ガリウインクでの生活で、なにかとメアリーを頼りにするアルフレッドは腹立たしい。嫉妬し、たびたび怒りを爆発させる。リジーの子供たちがメアリーの方になついていることも、彼女にとっては気に入らない。こうしてアルフレッド一家では、何かともめごとが頻発することになった。このアルフレッド一家のトラブルは、伝統的な婚姻と恋愛結婚の概念が複雑に入り組み、混乱したことによって生じたのであることが分かる。

さて、当時、ジョアンは離婚後数年がたち、診療所で働く日常を取り戻していた。しかし、彼女は毎日のように家で続く喧嘩にほとんど嫌気がさしたのだという。以前から親に反対されていたボーイフレンドのこともあって、一九九一年のある日彼女は、近隣の都市であるダーウィンに出奔してしまった。この年、調査に訪れた筆者は、ジョアンがダーウィンにいることを聞かされ、車で彼女をさがしあつた。ジョアンは、この都会で新しいボーイフレンドのリチャードと、グラスピープルとよばれる野宿をして暮らす生活をしていて、社会福祉のお金を受け取りながら、ビールをのみ、きままに浜辺や公園で眠る。時には酒に飲んだくれ、喧嘩に巻き込まれることもある。カジノにでかけ、たまには大きくもうけたり、大きく損をしたりする。外から見ると浮浪者のようにさえ見える生活である。しかし、必要があれば、シェルターも政府施設も救世軍もあり、病院のシステムも頼りになる。生活にはべつに困らない、とジョアンは語り、私の予想とは異なり、ダーウィンでの野宿暮らしを楽しんでさえいるようだった。

「私はお酒に強くて、お酒で問題を起こすことはなく、ダーウィンの警官にもそれは認められているの」と明るく話していた。こうして足かけ三年間、ジョアンはダーウィンで暮らしていた。

一九九四年になって、ジョアンはガリウインクに戻った。そして二年後、リチャードがガリウインクにやってき、ジョアンは彼の親戚の家で一緒に暮らしはじめた。ジョアンは、ボーイフレンドの家族と特にうまくいっているふうではなく、彼女も夜、眠りにだけその家に戻るような状態であった。ボーイフレンドとの関係も、彼女の両親は認めたわけではなく、ただ黙認しているだけであると語っていた。この二人は、子供ができず、またボーイフレンドのリチャードが酒をやめられないことも理由のひとつとなって、一九九九年には別れてしまった。ジョアンは再び母メアリーの家にもどった。

「男は、もういい。わたしは、もうお酒も飲まないし、あなたとは生き方が違うとハッキリ彼にいった。だいたい、ダーウィンでお酒ばかり飲んでいて、白人たちがアボリジニをいやがるのも当たり前よね。それがよく分かったわ。ボーイフレンドとはこれまでに殴り合いの喧嘩をなんどもして、前歯をなくしたし、傷も体中にたくさん。もうたくさん。これからは仕事を一生懸命することにきめたの」と決意を語っていたのである。

アルフレッドの結婚騒動によってジョアンは、ダーウィンに出奔したことになるが、彼女の妹のリサもやはり一九九三年に、もう一つの都市であるゴープに家出してしまっていた。そこで、東隣の町であるイルカラ出身のアボリジニの男と恋仲になり、彼女はこれまでに二人の子供を彼との間にもうけている。そのたびに子供をつれてガリウインクに戻るが、子供が少し大きくなると、子供をおいて、ゴープに戻ってしまう、という生活を繰り返してきている。ボーイフレンドにはイルカラに妻がいることもあり、親族関係上も正しくない関係の相手でもあるため、親はやはり反対している。彼女自身もイルカラで暮らすことにはいやだという。生まれた二人の子供については、夫側の親族は、イルカラで育てたいらしいが、アルフレッドとメアリーは頑としてわたそうとせず、ガリウインクの家族が可愛がって育てている[窪田 一九九七a]。

ジョアンは、四〇歳になった今でも、家族のしがらみから離れられてはいない。それは、彼女だけではなく、妹のリサもそうだし、アルフレッド

もメアリーも、そして第二夫人のリジーもそうである。誰も決してこの家族関係から離れてしまおうとはしない。このことは、かれらにとって、親族関係が現在もいかに重要で、無視できないことであることを示している。

#### 5) 儀礼と土地

ジョアの日常は、非常に忙しく、その動きは、ゆったりとしたヨルング社会のそれよりも、我々の日常生活の煩雑で多忙なものに近い。ダーウィンや、その他の都市への出張を繰り返し、電話、ファックス、そしてEメールで常に他の都市との連絡をとっている。しかし、その一方で、彼女は自分に期待されているクランに対する義務に敏感で、できる限りクランや親族で期待される役割をこなそうと常に心を砕いている。例えば、彼女の儀礼での真剣さは目を見張るばかりである。それは一つには、ジョアが有力家系の彼女の世代での一番年長であることが大きい。ヨルング社会では、男女だけでなく、年長、であることが重要である。アルフレッドの長女として、また、メアリーの長女として、それぞれのクランで、女性であっても主要な儀礼には出席し必要な役割を果たすことが期待される存在なのだ。

このことは、再び、ポリティックスと関わる。ヨルングの社会では、近年になってクランごとの土地権主張のかけひきが、顕在化してきている<sup>四</sup>。このような時には、ジョアのような、外部のオーストラリア主流社会に対応できる、英語の達者な人物は活躍が望まれる存在である。しかし、そのことは、再び、ジョアへの注目を集めることになる。女性である彼女がヨルング社会で突出して目立つことには、抵抗も大きい。ジョアが、葬儀を初めとする儀礼での真剣さは、彼女自身がこのような自分への批判的な視線をよく認識していることを示している。自分の立場をわきまえた「正しい」行動をすることで、決して通常女性が期待される範囲から突出するつもりがないことを、クランの人々に理解してもらおうと心を砕いているのである。

今では友人も多く、すっかりなじんでいるもっとも近い都会であるダーウィンに、ジョアは様々な機会を捕らえて出かけてゆく。そしてそのまま数週間戻らないこともある。そんな彼女をみて人びとは「また酒を飲んで、カジノで遊んでいる」と非難する。しかし、ダーウィンで彼女をさが

して話をすると、その思いは全く異なることが分かる。

「ストレス発散に3日間は飲んでいただけけど、昨日からはもうお酒はやめてるわよ。今は、入院している義理の息子がいるから、その世話を理由にしばらくダーウィンにいるつもり。ガリウインクのみんなが帰ってこいといっているのは分かっている。でも、来る前に長く戻らないなんて言えるわけがないでしょう。私も頭を冷やした方がいいの。病院での仕事と、町議会での役割と、親族内での立場。たまには、ビールものまなくちゃね。」

このように、彼女は自分のおかれているストレスの多い生活から、ダーウィンという都会と、ガリウインクとの適度な距離を利用して、意図的に短期的な休息をとっている事が分かる。その証拠に彼女は決してヨルング社会から離れてしまおうとしているのではない。クラン間でおこなわれる複雑な権利主張の争いや、政治経済がらみの町の運営、どんどんと入ってくる新しいプロジェクトや企画などを目の当たりにし、その判断を迫られる立場にあって、ヨルング社会がどのように受け入れ、どの方向に進んでいくのがいいのか。彼女が判断を迫られることは多様である。しかも、物事を自分自身が中心になって推進していこうとするのではなく、たとえそれを試みても不可能という、ヨルング社会のバランスのなかで、女性である彼女がその期待される役割を具体化していくという困難を、ジョアンは生きているのである。

#### 4 未来の鍵を握る女性たち

現在のオーストラリア主流社会において、ヨルングを初めとするアーネムランドに暮らすアボリジニは、大きな注目を集めている。彼らは混血しておらず、独自の言語を維持し、ヨルングの精神世界を象徴する神話と儀礼を維持している。それらは、自然と人間とが連続し、一体化した世界観に基づいている。彼らの社会の特徴といわれる複雑な親族組織も、現在に生きている。オーストラリア社会が、オーストラリアのアイデンティティを模索する中で、このようなアボリジニの「伝統的」イメージが象徴として求められる場面が増加している。それにもっともよく適合するような典型的なアボリジニ・イメージを代表しているのが、アーネムランドの純血のアボリジニ、ということになる。

特に、一九九三年の先住権原法<sup>5</sup>以来、アボリジニの人びとの土地との精神的な結びつきは、注目を集めている。それというのも、アボリジニの人びとの土地に対するつながりは、象徴的な意味だけではなく、現実の社会経済に影響を与えるものだからである。先住民であるアボリジニの人びとは、その文化的独自性を主張することによって、経済的な利益をえる。彼らの存在やその土地権の主張は、具体的な政治性を伴っている。このような社会的状況によって、主流オーストラリア社会との関係は、ますます重要になってきている。そして一方で、このことはクラン間関係の複雑さも生んでいる。オーストラリア主流社会に対しては、ジョアンのような政治的にも対応できるような存在が求められる状況が生まれてきていると見てよい。しかし、複雑さを増しているクラン間関係を背景に、女性であるジョアンは決して突出することはできないのである。

一見隔たって見える、オーストラリア主流社会と辺境に位置するアーネムランドのヨルング社会は、このように具体的な政治経済的側面において相互に影響を与えあっている。そうした相互関係の中であってヨルング社会で経験されてきた変化と、それに対応するジョアンをはじめとする人びとの姿からは、ヨルング社会の直面してきた困難と経験、そして現在を知ることができた。ヨルング社会は、20世紀の後半、オーストラリア主流社会との関係の中で大きな変化を経験し、対応を余儀なくされてきた。その中で力を付けてきたヨルングの人々の1人がジョアンであった。伝統と新たな価値感の間で、力を得てキャリアを積んできたジョアンのような女性たちは、同時に伝統の枠組みとのバランスをとる必要に駆られる。オーストラリア主流社会との対応においては、ジョアンのような存在が大きな期待を寄せられる。しかし、女性である彼女は伝統をないがしろにすることなく、自己を定位し、白人主導ではない自らの社会の未来を模索している。苦しみながら、時に道はずれながらも、思慮深い女性たちの姿がそこからは見えてくる。

窪田幸子 一九九七 a 「親族の基本構造を生きる—「ムルンギン」の現在」  
青木ほか編『岩波

講座文化人類学第四巻 個からする社会展望』一五九—一九六頁、  
岩波書店。

窪田幸子 一九九七b「恋愛結婚と一夫多妻」『月刊みんぱく』三月号：一五-一七、千里文化

財団。

窪田幸子 一九九九『社会変容と女性-ジェンダーの文化人類学』（八木祐子と共編著）、ナカニ

シヤ出版。

窪田幸子 二〇〇〇「オーストラリア・アボリジニとキリスト教ミッションの半世紀-北東ア

ーネムランド・ヨルングの記憶」吉岡・林編『国立民族学博物館研究報告』二一号：

八七-一〇七。

窪田幸子 二〇〇二(印刷中)「神話と土地とクランをめぐるマイクロヒストリー」田中雅一・松

田素二編『マイクロ人類学』世界思想社

Coombs, H. C. 1978 "Kulinma' Listening to Aboriginal Australian", Australian National University Press, Canberra.

Keen, I. 1994 "Knowledge and Secrecy in an Aboriginal Religion", Oxford University Press, New York.

McKenzie, M. 1976 "Mission to Arnhem land", Rigby, Sydney.

Morphy, H. 1991 "Ancestral Connections", The University of Chicago Press, Chicago.

Shapiro, W. 1981 "Miwuyt Marriage", Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia.

Shepherdson, E. 1981 "Half a Century in Arnhem Land", Pan Print, South Australia.

---

#### 注

ー ガリウィンクには十二のクランに属する人びとが一緒に暮らしている。そのうちAクランの人口は全体の二十七パーセントをしめる。またAクラ

---

ンは、ガリウィングが建設されている土地に権利をもつクランとの関係も深いため、さらに有力なクランなのである。Bクランは、Aクランについて人口が多く、約十二パーセントをしめる。

ニ ヨルング地域の婚姻規則は、男性から見て「母の母の男兄弟の娘の娘M MBDD」と結婚することを規定する母方交叉イトコ婚である。それに加えてクラン間関係として、妻を与えるべきクラン、妻を受け取るべきクランという一般交換の関係も規定されている。

三 学校教育は、ミッション経営の主眼の一つで、当時の主任ミッションナリーであったシェパードソンの妻が学校を始めた。当時は、同化主義の政策によって、英語教育が重視された。現在は、ガリウィングの学校は基本的には他の学校と同じカリキュラムで運営され、中学校教育までここで受けることができる。他と異なるのは、英語とヨルング語の二言語教育がおこなわれている点である。

四 一九九三年の先住権原法をうけ、ガリウィングでは海の権利についてのクランごとの主張が強まっている。ダーウィンの土地委員会からのヒヤリング調査がおこなわれ、海域権の申請の可能性が模索されている。こうした中で、各クランごとの土地権に関わる主張が強まり、時にもめ事がおこる場面も見られるようになっている [窪田 二〇〇一]。

五 一九九二年に連邦最高裁で出された通称「マボ判決」を経て、翌年に出された法律。これによって、アボリジニの人びとの先住権申請を受け付け、審議することが可能になった。

## ヨルングの記憶とミッションの半世紀

### 1. はじめに

オーストラリアへの入植の歴史のなかでの先住民との関係は、固定したイメージで語られるものとなっているといえるだろう。つまり、約200年前に始まったイギリス系移民による入植がすすむにつれて、先住民であるアボリジニは迫害をうけ、人口を減らし、彼らの伝統文化は剥奪されていたという歴史観である。それは1988年のオーストラリア200年祭で、シドニーの町でアボリジニたちが大規模な抗議の追悼デモをおこない、200年は先住民にとって侵略の歴史であったという主張をおこなったことや、2001年のオーストラリア連邦成立100年記念を目前として、これまでの先住民に対する不当な扱いを清算し、主流社会側と先住民との和解を図ろうとする政府の動きなどにも如実に現れている(1)。

しかし、オーストラリアにおける入植のあり方や、迫害の程度、それに対するアボリジニの対応は、決して一様に語りうるものではない。例えば、筆者の調査するオーストラリア北部に位置するアーネムランドにおいては、オーストラリアの他地域と大きく異なり、本格的な植民は遅く、かつ暴力的な接触はほとんど経験されなかった。遠隔地であったこの地域への入植が細々と始まるのは、1800年代の半ばのことであり、しかもキリスト教・ミッション(2)が主体の入植であったためである。

現在のオーストラリアでは、ミッションと言えば同化主義の手先だった人々と批判的に扱われる場面が多い。一例をあげれば、戦前から戦後にかけて、混血のアボリジニの子どもをアボリジニの家族から取り上げ、ミッションの施設や白人(3)の家庭で育てるという施策がとられていたのだが、これが現在「盗まれた世代(stolen generation)」問題として、政府の公式謝罪が求められている。委員会による実態調査が行われ、和解が模索されているが[Commonwealth of Australia 1997]、大きな社会問題のひとつとして注目を浴び、メディアでもしばしば特集される。その中で当時のミッションの活動が批判されているのである。

ところが調査地であるアーネムランド北東部のヨルング(Yolngu; 人間の意)を自称とする人々の地域では、入植の歴史的経緯が異なるだけでなく、

入植についての認識、記憶も他地域とはおおきくずれがある。調査地の特に40代以上の人々は、現在でもミッションの時代をよく覚えており、とてもよい時代として語る。彼らの中には当時の伝道師たちの名前や家族構成を細かく覚えている者も多く、特に長くこの地に滞在した伝道師たちのことは、敬愛を込めて語る。たとえば現在は引退して南部で暮らしているが、50年近くの時間をアーネムランドで過ごしたハロルド・シェパードソン(Harld Sheperdson)のことは、現在も愛称のシェピーという名前で日常の話題にのぼる場面が多く、10年ほど前に彼の妻が死去したこと、彼の健康状態、現在の彼の生活状況などは、エルコのアボリジニの人々の共通の知識となっている。南部に訪れる機会があった者が彼を訪れることもしばしばあり、4年前には、町の新空港のオープニングのセレモニーに彼が招待され、人々は彼との握手のために長い列をつくったほどである。また、ミッションの時代の生活の細々としたことを思い出話として語る時に、それが正しいことであった、という事を示すために「バーパ(父)・シェピーが、こういっていたから」という言い回しによくである。このように、ミッションの人々についても、当時の生活についても、彼らは一様に郷愁と呼べるような感情を持っているように思われる。ミッションの人々はヨルングのために働いてくれた、いい人たちだった、という言い方がされ、それに比べて、現在町にいる白人は自分たちのことばかりを考えて行動している、自分たちと交わることを好まない身勝手な人々として非難する。

人類学的な調査においてその社会を一方向的に特定した像に固定してしまうような記述に対する批判[クリフォード&マーカス 1996、Clifford 1988]のなかで、歴史人類学的手法の必要性が指摘されるようになって久しい。すでに固定化された歴史イメージを脱却するために、伝道師や入植者の残した記述や記録、そして人類学者の民族誌などから、多様な日常実践を記述し、解釈することが求められている。このことはトーマスの主張する植民地主義への歴史的アプローチに重なるものであり[Thomas 1992]、それによって、アボリジニの人々の主体的なかかわりの姿とともに、現在へのダイナミックな道筋を照射することができるであろう。筆者はこうした問題意識をもとに、以下の二つの目的を持ってこの論文を構成している。第一には、「オーストラリアへの入植」とひとくくりにして語られてきたイメージと異なるアーネムランドの人々の経験した歴史、より限定的にはエルコ

島を中心とする調査地の人々の経験した歴史の独自性を示すことである。第二には、調査地域の入植の過程とそれに対する先住民の対応を細かに見ることで、入植者側の植民にかかわる思想と実践の多様なあり方と、被入植者側の対応の間の相互関係を知ることである。調査地のアボリジニにとってミッションはどのような存在であり、この半世紀の歴史を彼らはどのように語り、取り込み、現在があるのだろうか。彼らがとらえる歴史を考えることからポストコロニアル状況を生きる彼らの生の一側面に迫りたい。

## 2. 北部オーストラリアの開拓とミッション

### 1) 19世紀の北部オーストラリア

はじめに調査地のあるアーネムランドおよび北部地域の歴史を、ハリス [Harris 1990] を手がかりにしつつ、ミッションとのかかわりを中心に概観してみることにする。アーネムランドは遠隔地であり、白人が最初にこの地域を訪れるのは19世紀になってからのことである。1814年にフリンダース (M. Flinders) という探検家が北部を航海し、その記録を残している。最初の白人の居住はそのあと1824年のことで、メルビル島をはじめとして北部海岸の3カ所に相次いでキャンプが築かれている。開拓の足がかりとしての拠点の建設ではあったが、いずれも維持が困難で数年で閉鎖されている。唯一、ダーウィンの東のエッシントン湾 (Port Essington) に1838年に建設されたキャンプが1849年まで11年間続き、カソリックの牧師が1846年に一人はいる、アボリジニと比較的良好な関係をつくったと記録されている。

本格的な北部におけるミッションの活動は、1863年頃から始まるイエズス会によるものである。試行錯誤のあと、かれらが実際に現在のダーウィンの町の東部にキャンプを設立し始めるのは1882年のことであった。このキャンプはのちにセント・ジョセフと命名されるが、この地域の主要部族のララキア (Larrakia) 族のアボリジニたちが徐々にこのキャンプに定住をはじめ、農業を手伝うようになり、1885年には学校教育も始まった。

このセント・ジョセフ・ミッションでは、自給自足をめざして模索が繰り返され、他地域への拡大の試みもされた。しかしアボリジニたちの定着性の低さの問題や、他部族との緊張関係の問題、経済的な問題などがあって、紆余曲折ののち1899年に閉鎖される。このイエズス会ミッションの活動の

特徴として注目されるのは、活動が平和的であり、押しつけがあまりない点である。まず数人の伝道師が共同して、居住地を整備し、農園をつくり、そこにアボリジニが集中する。伝道師はそのアボリジニの部族の言語の学習に力を入れ、学校教育を行い、ともに暮らしながら自立できるコミュニティの成立をはかるというものである。つまり、明白に強圧的にみえるような文化的侵略は、北部に関しては最初からほとんど見られなかったことが指摘できるのである。

もちろん、その一方でミッション以外の強制や暴力を伴うような入植が皆無だったわけではない。1870年代後半、北部のダーウィンまで、牛を移動させてゆくルートとして、水場の確保が困難であった、これまでの大陸の真ん中を垂直に北上するルートの他に、新たにカーペンタリア湾から西へ向かい、北部の中心地、ダーウィンへというルートが開発された。その中で、この道沿いに位置するアーネムランドの東南部のローパーリバー地域に、牧場としての潜在的可能性があることが発見され、キャサリンをベースとしてこの地域の牧場リースが始まった（地図参照）。この牧場は1890年代にいったん経済的理由によって放棄されるのだが、このとき同時に牧場運営の障害として、家畜を殺してしまうなどのローパーリバー地域のアボリジニの攻撃性が指摘されていた。1899年に、この地域のリース権はロンドンに本社をおく食肉輸入会社に移り、アボリジニの抵抗に対して、彼らを根絶するという強硬手段が会社の方針として決定される。こうして実際に、多くのアボリジニが殺害され、ローパー地域のアボリジニは誰でもがこの時期、家族の中に殺されたものがある経験を持つといわれるほどであった。こうした経緯のなかで、アボリジニの保護と地域の平和的安定をめざして、1908年にローパーリバーのミッションが設立された。このように、局地的には白人による暴力を経験し、制圧された後にミッションを受け入れるという南部のアボリジニと類似した経験をもったアボリジニたちもあったが、アーネムランド全体から見ると、これはむしろ例外的なケースであったという事ができる。

## 2) 20世紀のミッションの展開-第二次世界大戦まで

20世紀にはいつて、アボリジニ像が変化していくなか、各教会では、北部へのミッション展開に関心を強めていった。当時アボリジニは、死にゆく

民族と考えられており、南部のアボリジニはもう救いようのない、崩壊した民族であると理解されていた。その一方で、北部には、野蛮で、自然状態の、攻撃的なアボリジニがいるというイメージが、オーストラリア全体にひろくゆき渡っていた[Dewar 1992]。それゆえ彼らはまだ文明に毒されておらず、救うことが可能な「本当の」アボリジニであるということになる。このような了解に基づき、それぞれの教会がミッション活動を繰り広げて行った。1912年にはメルボルンで、プロテスタントのミッション間で、アーネムランドを中心とする北部海岸地域をどのミッションが受け持つかの話し合いがもたれ、地域割りが行われた。このときの話し合いに基づいて、筆者の調査地域である東アーネムランドにはメソジスト派のミッション(Methodist Overseas Mission)が入植することになってゆく[Harris 1990]。

20世紀にはいつてから1930年代頃までのオーストラリアでは、全体的にいつて進化論的見方が優勢であったということが出来る。つまり、アボリジニを野蛮で下等な民族であるとし、文明化は難しいが、白人とアボリジニとの混血の子どもであればそれだけまだ可能性があるという考え方である。こうした考え方にのっつて、ハーフ・カーストと呼ばれる混血の子供を、純血の母親から引き離し、寄宿舎で教育することと、アボリジニを居留区において管理監督することの二つに、ミッションの活動は主に注がれていたといつても過言ではない。しかし戦争の直前になると海外からアボリジニの扱い方についての批判がではじめたことなどにより、政府のアボリジニへの対応は変化の兆しを見せるようになっていた。

1928年には当時のクイーンズランド州のアボリジニの主任保護管であったブリークリー(J. W. Bleakley)が連邦政府からノーザンテリトリーのミッションについてのレポートを求められ、各地のミッションを訪れている。かれは1929年に提出したレポートのなかでアーネムランド地域を保護区とすること、すなわち、アーネムランドという部族地域に居住している、いわゆる「伝統的な」アボリジニを慈善的に監督する場所として保護区が必要であると主張した。そして、その監督に一番適しているのはミッションで、政府の援助のもとにおこなわれるべきであるとも述べている[Dewar 1992]。

1937年の連邦及び州アボリジニ専門官会議(Conference of Commonwealth

and States Aboriginal Authorities) では、アボリジニをひとまとめにするのではなく、彼らを「分類」して考えるべきである、と議論された。その内容からも、アボリジニのための保護区は必要なもの、という了解がこのころには広く了解されるようになっていたことが伺える。この会議での「分類」というのは、第一が、町に住んでいる崩壊したアボリジニ、第二が牧場に住む半文明化されたアボリジニ、そして最後に部族地域の文明化されていないアボリジニという三分法であった。第一のグループについては、大人の再教育は不可能だが、子供は白人のレベルにまで教育をほどこされるべきであるとされ、第二のグループに慈善的な指導をし、少なくとも部族的儀礼に参加するなどの環境を保証するべきであり、そして第三のグループのアボリジニには、これまでの居留地とは異なる広い範囲の、他の侵害を許さないような保護区(Inviolable reserves)を与えるべきである、というものであった。これは現在からみれば不当に偏見に満ちた議論ではあるが、少なくとも、アボリジニのための保護区をつくるという意識は広がりをもってきていたことがわかる。

純血のアボリジニは文明化された環境には適応できない人々であり、彼らの生存は、完全な隔離によってのみ可能である、とする生物学者などの専門家の意見は影響力が強く、世論をうごかした。ニュージーランドをはじめとする外国からの圧力もあり、こうした背景の中で1920年の中央砂漠の保護区をはじめとして、4つの大きな保護区がつくられ、その一つであるアーネムランドは、1931年にほぼ現在と同様の広さが保護区に指定される。当時のアボリジニに対する福祉の考え方は、同化主義と隔離主義のふたつがあった。双方とも保護区の必要を主張しているものの、同化主義の方はブリークレイ(J. W. Bleakley)に代表されるように、一定の地域の中で同化できる時間的猶予を与え、外からの影響を排除し、そのなかで同化するための教育をおこなう、というものであり、隔離主義の方は、人類学者のトムソン(D. Thomson)などに見られる考え方で、白人の都市にいるアボリジニを追い出し、本来彼らがいた場所に押し戻そうとするものであった[Dewar 1992]。

いずれにしても、こうした保護区の設立に象徴されているのは、亡滅してゆく民族としてではなく、将来のある民族として、アボリジニへの対応が検討され始めていた点である。また、政府の中には、人類学者のアドバイ

スを求めてアボリジニの状況を変えようとする政治家も出はじめる(4)。シドニー大学の文化人類学の教授であったエルキン(A. P. Elkin)は、1930年代に政府からアボリジニの専門家として意見を求められ、アボリジニは白人と対等な人間であり、彼らが白人と平等に暮らせる未来が可能である、という考え方を示していた。こうした視点がアボリジニ政策の中に取り上げられようとする動きも現れつつあったのである。

### 3) 第二次世界大戦(1939-1945)の影響

アボリジニに対する政策の変化の兆しは、いったん戦争によって全て停止することとなる。1939年イギリスが参戦、この戦争において日本はオーストラリアのもっとも直接的な敵であった。北部地域は日本軍の爆撃を受け、多くの死傷者をだした。ミッションの女性と子供はその多くが南部に避難する。ミッションはいずれも一時的にその機能を縮小することになった。それにも関わらず、この戦争はアーネムランドのアボリジニの白人文化の需要を促進することに多大な影響を与えたのだった。

北部沿岸には日本軍にそなえて多くの軍事キャンプが設立された。北部の、それまでミッションに住んでいなかったアボリジニも、その多くがこうした軍事キャンプとの関係をもった。軍に雇われたアボリジニも多く、そうでなくとも食品や日用品などを求めてアボリジニたちが軍事キャンプにやってきた。

軍に雇われた者にとっては、それは初めての雇用経験となった。それまでのように、小麦粉と紅茶ではなく現金を受け取ったのである。しかも白人の軍人とある意味での対等な関係で扱われるという初めての経験をするようになった。それまで、限られた人数のしかもミッションの白人しか知らなかったアボリジニたちが、「俗な」「ふつうの」白人たちと接触することにもなった。また、軍にはミッションとは比較にならないほどの物資と技術力があつた。食事は潤沢に与えられ、様々な日用品や物資を買うこともできた。同時にトラクターや戦闘機などの先進の器機や進んだ技術をアボリジニは目の当たりにすることになったのである。つまり、アボリジニの人々は、ミッションにはありえなかったほどの圧倒的に豊かな白人の物質文化に触れることになった。

1945年に終戦を迎えたとき、多くの人々はブッシュでのかつての生活に戻

ることを好まず、そのまま、軍が放棄したキャンプ跡に住みついたり、ミッションの町に居住するようになった。また、戦争中にダーウィンへ移動していったアボリジニも多く、戦争終了後も彼らの多くはアーネムランドに戻ろうとしなかった。これを問題とみた政府は、中央アーネムランドに新たにアボリジニのための取引所をつくる[Altman 1985]。アボリジニが必要とする食料や物資を、ワニの皮などと交換できる場所をブッシュのなかにつくり、彼らをダーウィンから押し戻そうとしたのである。これが後のマニングリダの町になるのだが、このことは、いかに多くのアボリジニが戦争を契機として西洋文明に惹きつけられ、そこから離れがたくなったのかを示している。

#### 4) 戦後のミッション

戦後になって様々な変化が起きるが、アボリジニにとってもっとも大きな意味を持ったのは、アボリジニについての責任母体が連邦政府にうつったことであるといわれる[Harris 1990:784]。なぜならば、そのことによってさまざまな対アボリジニ政策の実質的な変化が可能になり、その迅速な適用も容易になったといえるからである。

1940年代からの諸外国からのアボリジニの扱い方についての批判もまた、アボリジニの状況の変革に大きな意味を持った。戦後になって国連をはじめとする諸外国からのアボリジニへの対応への批判はしばしば政府を困惑させた。政府はその結果としてアボリジニの同化政策をとるようになってゆく[窪田 1993]。

アーネムランドのミッション活動においてプロテスタント系の二つの大きな勢力であったCMS ミッション (Church Missionary Society、以下 CMS) とメソジスト派ミッションは、戦後になると、その関係を深めてゆく。アドバイザーとしてシドニー大学人類学教授のエルキン教授らが双方に関わったことに象徴されるように、両ミッションの方針には共通点が多々見られるようになってゆくのである。

このころのミッションの多くは、アボリジニの生存、保護のための場所であり、西洋社会をより抵抗なく受け入れさせるための場所であり、適応により時間を与えるための場所と位置づけられた。各ミッションでは伝道師が現地のアボリジニの言語を習得することを奨励し、部族的な生活は排斥

されるべきではなく、むしろ彼らの部族組織と習慣を基礎として、神の王国を建設することを奨励する態度をとった。

次に示すのは、1944年にだされた CMS の全体方針 (General Policy and Methods) である。その当時のメソジストの全体方針との大きな差は認められない。

- 1 ミッションの基本目標はアボリジニとハーフカーストに神の知識を与えることである。
- 2 ミッションは改宗者を教会の正式メンバーに導き、その特権を享受できるようにすることをめざす。
- 3 直接的な伝導が常に中心のかつ基本的である。
- 4 子供と大人の双方への教育を可能な限りおこなう。それは福音を届けるための補助として、また個人のパーソナリティーの開発と成長のための両方の意味でおこなわれる。
- 5 医療行為はミッションの基礎的かつ重要な使命である。医療は必要なときに、必要なところで、肌の色の違いに関わりなくおこなう。
- 6 農業と技術の訓練は、教育の重要な一部である。アボリジニを自活できる状況にするため、自尊心を育てるため、コモンウェルスの有用なメンバーとするため、そして神の国の一員とするためにおこなわれる。

以上の他に、あらゆる行動において以下の点を留意することが指示されている。アボリジニをミッションに依存することで卑下させないように、むしろ彼ら自身の生活と発展に責任を持つように奨励すること。コミュニティの女性の地位を上昇させることをめざすこと。そして、自分たち自身の中での社会的宗教的活動をおこなうように奨励すること、の三点である。このように、この時期のミッションの方針は、それ以前に比べてアボリジニ文化に親和性が高いものであることがわかる。同化主義ではあるものの、人類学者のアドバイス、つまり文化相対主義的価値観が非常に強く反映されていることが読みとれる。戦前までのミッションでの一夫多妻の廃止、伝統儀礼の禁止、子どもを寄宿舎へ入れる、などにみられるような西洋白人社会の価値観を強力に押し進めるような方策はほとんど見られない。これが戦後のオーストラリア・ミッションの特色といえるだろう。

### 3. メソジスト派ミッションのアーネムランドでの展開

### 1) メソジストの北部ミッション方針

メソジスト派のミッションは、1916年までアボリジニの人々間での布教活動を行っていなかった。すでにふれたように、他の教会と同様にメソジスト派においても北部地域の「まだ手つかずのアボリジニの地域」のアボリジニに対するミッションへの興味は大きかった。プロテスタントの教会間での地域割りの結果、メソジスト派には、アーネムランドの北部海岸地域の中央部が割り当てられた。初めてのミッションであっただけに、それまでの他の宗派のミッション活動の結果も十分に見ることができたためか、メソジスト派は、ミッションの果たすべき役割を決定する連邦政府から、布教の前提となる条件をとりつけるために、あらかじめ確固とした言質を得ることに注意深く対応したといわれる[Dewar 1992]。メソジストは連邦政府に対して以下の4つの要求を出している。それは、1) アボリジニのリザーブを隔離すること、2) ミッションの目的のために連邦政府はある程度の土地を無償リースすること、3) ミッションに関係しておこなわれる教育目的の活動や工業活動に適切な補助金の額を与えること、4) 原住民の福祉を第一とすること、という4点であった。これらの態度から、メソジスト派は求められた役割を果たすことで、政府に利益を与えるという、自らの位置づけをはじめから明確にしていたという事がわかる。

こうして、1915年にワトソン (Rev. Watson) がメソジスト派最初のミッションの場所を選定するためにアーネムランドへおくられ、ゴルバーン島 (Goulburn Island) が選択された。1916年にここにミッションが設立される。1921年の段階で、伝道師のための住居が数軒と、寄宿舍が建設されており、約120人のアボリジニがこのミッションで定住的に暮らし、寄宿舍には40人の混血を含めた子どもが居住していたという[McKenzie 1976]。ゴルバーン島は、アーネムランドでも西方に位置し、中心地であるダーウィンに近いこともあって、この地のアボリジニたちは、混血の子どもたちの存在からもわかるように、すでに白人との接触を経験したものが多かった。ワトソンは、「まだ文明に毒されていない、墮落していない (unspoiled and uncontaminated)」アボリジニがたくさんいる地域にミッションの活動を拡大したいという思いを常に強くもっていた。1916年の末に、彼はゴルバーン島からさらに東のヨルングの地域であるミリングンビの近くで、300人のヨルングの男性が儀礼のために集まっているところに出会った。この

ヨルングの人々にとってはワトソンが初めて出会った白人であった。ワトソンはここを2つめのミッションの基地としたいと強く思い、ミッションの本部に働きかけを始める。1921年、ワトソンは、ジェニソン(Rev. Jenison)とともにミリングンビへ向かい、ミッション建設の試みが開始されることになる。ところが、ミッションから管理長官(superintendent)に指名され、ワトソンとともにミリングンビに向かったジェニソンは、ミリングンビよりもその対岸にあるエルコ島を気に入り、そこにミッションを建設したいと考えた。そして彼は本部との交渉の結果、200平方マイルのリースを得て、翌1922年にミッションを開始した。しかし、この地域での石油の試掘がはじまったことから、翌年、結局ミリングンビに戻って、ミッションを建設する、という経過をたどった[McKenzie 1976]。しかし、エルコ・ミッションの歴史はここで終わりを見なかった。第二次世界大戦が始まると、このミリングンビに空軍の基地が建設された。1942年には日本軍がこの地を爆撃する。こうした状況の中、ミッションは人々と製材所などの機材を避難させる目的で、再びエルコに移されるのである。このとき、多くのアボリジニが伝道師たちと一緒にボートに乗ってエルコに移動し、新たなエルコ・ミッションの建設に尽力したという。戦後ミリングンビのミッションは再開されるが、エルコもそのまま継続する事になる。

## 2) ミッション・セツルメントの発展

1942年、筆者の調査地であるエルコ島のガリウインク・ミッションはこうして、成立した。シェパードソン夫妻が、製材所やその他の重要な設備機材を船に積み込み、アボリジニの3家族と一緒にエルコにやってきたときには、50人ほどのアボリジニがすでに集まっていたという[McKenzie 1976]。エルコでは移動の直後からアボリジニたちの協力を得て、住居、教会、製材所、プランテーション、学校などが次々と建設されていった。アボリジニたちもそのまわりに小屋をつくり住むようになった。

1950年代にはいるとエルコのミッションはますます発展していった。スタッフの人数が増え、スタッフ会議が開始され、語学クラスも始まった。飛行機での移動は日常化し、機動力によって物資の輸送も容易に活発になった。初めてのアボリジニのカップルが教会で結婚式を挙げ、1954年にエルコで開かれた教会会議には、アボリジニの代表団が出席した。学校も規模

が拡大し、生徒は 90 人ほどに、白人の教員が二人に増え、新しい校舎も建設された。新しく漁業会社も設立された。ここからは二週間に一度 200 から 300 ポンドの魚がダーウィンに空輸されるようになった。1959 年末の段階で、エルコには約 20 人のミッション・スタッフがいた [McKenzie 1976]。東アーネムランドではいずれのミッションでも、周辺地域にいたアボリジニの多くは比較的早くミッションで暮らすようになっていったといわれる。ミッションで働いたアボリジニには小麦粉やタバコで給料が支払われ、そのことがミッションへの好奇心をかきたてるとともに、多くのアボリジニの人々をミッションに惹きつける要因になった。しかし、全く問題がなかったわけではない。例えばミリングンビでは初期の伝道師が一夫多妻をやめさせようとして、アボリジニをムチ打ったために、アボリジニが憤慨し、伝道師を殺そうとする、という事件が記録されている。そのほかにも異部族間での紛争による流血の騒ぎはいずれのミッションでも数多くおきている。しかし、全体的な流れとしてみると、アーネムランドのメソジストミッションは、アボリジニの文化に理解を示し、彼らに歩み寄る姿勢をはっきり示し、アボリジニ側のミッションの受け入れも良好だったといっていよう。メソジストのミッションのこのような特徴を、より明確に示すため、CMS と比較しながら見ていくことにしよう。

### 3) メソジストと CMS

戦争に先立ち、メソジスト派は 1935 年にミリングンビに続いて、イルカラにミッションを設立した。このミッションの設立のきっかけには、ある大きな事件があった。アーネムランドの東海岸部はそもそもは CMS に割り振られた土地であり、東海岸南部のローパーリバーには先に述べたように、20 世紀初頭にすでに CMS のミッションが設立されていた。イルカラ設立の背景には両ミッションをめぐる事件との関係があったのである。

1932 年に東アーネムランドのカレドン湾で、5 人の日本人が殺された。このころ、日本人の漁船が数多くアーネムランドの海域を訪れ、白蝶貝やナマコをとっていた。このような日本人はアボリジニの労働力を利用し、水や食料を得るために彼らとの交流を持っていた。この時の殺人は、日本人がアボリジニの女性を性的に暴行したことを原因とすると一般にいわれている [Harris 1992]。しかし、Dewar によると、本当の理由は日本人がア

ポリジニ労働者にひどい扱いをし、約束した報酬を与えない、ナマコの内臓をなげつける、などしたこと怒ったアポリジニが槍を持ち出し、それを恐れた日本人が発砲し、これに対してアポリジニが槍で日本人の殺害するにいたったという[Dewar 1992]。原因はいずれが正しいにせよ、グループの内一人の日本人が逃れ、この事件が明るみになる。これをうけて、白人の警官が4人、武装してこのアーネムランド東海岸地域に遠征する。そして彼らの内の一人、マッコール巡査がカレドン湾に到着後、アポリジニに槍で殺されるという事態にいたって、オーストラリア中から感情的な反応が巻き起こることとなる。危険で野蛮なアポリジニに教訓を与えるべきで、そのためには機動力のある武装した、懲罰のための遠征隊が組織されるべきである、という南部を中心とする世論である[Harris 1990, Dewar 1992]。

こうした中で、それぞれのミッションも行動を起こすが、メソジストとCMSではその対応に大きな違いがあった。ミリンギンビの監督長官のウエップは、アポリジニとの平和的關係のためには永続的なミッションの設立が必要で、カレドン湾地域にミッションをつくることで、アポリジニたちは定住生活の有利な点を理解するようになり、白人と平和的な関係をもつようになる、とメソジストミッションの名において進言した。一方、CMSは平和遠征隊(Peace expedition)の計画を連邦政府に直接進言する。これは武力を伴う懲罰的な遠征隊を保留し、かわりに伝道師が武装せずに、カレドン湾地域に赴き、調査をおこない、殺害者に自発的な出頭を促すことで、事態の收拾を図ろうという案であった。しかしウエップは、信頼関係を築くには最低2年は必要だとして、基本的にはこの計画に反対しており、この遠征に加わろうとはしなかった[Harris 1990]。

連邦政府は結局CMSの進言をうけいれ、同年CMSは、タスマニアにいたワレン牧師(Warren, H)を隊長とし、オーエンペリの伝道師であるダイヤー(Dyer, A.)、無線操作のフォウアー(Fowler, D.)の二人がボランティアとして参加する遠征隊を組織し、送り出すことになった。彼らは、無事カレドン湾に到着し、そこに2週間とどまり、アポリジニたちにインタビューをおこない、日本人を殺した者たち、マッコール巡査を殺した者を探しだし、殺害の経緯の聞き取りに成功した。そして、彼らを説得して同意を得、船でダーウィンへむかった。しかし、ダーウィンにつくと同時にアポリジニ

たちは逮捕され、手錠をかけられ、収監され、何がおきているのか理解していなかったアボリジニたちはパニックに陥る。そのまま彼らは4か月のあいだ、言葉もほとんど通じない状態で収監さつづけ、裁判に臨まさせられることになった。

アボリジニの逮捕にいたったこうした一連の状況が広く一般の知るところとなるにつれて、CMSの伝道師への批判が集中した。そもそも伝道師に対しては、保護区であるため他の人々が自由に使えないアーネムランドの富を、アボリジニを奴隷のような無料の労働力として酷使し、私している、という批判がその背景にはあった。それに加えて、今回の事件は、伝道師が警察の手先の役割を果たし、しかも信頼させたアボリジニを欺いたという点に非難が集中したのである。

このような状況の中で、CMSもミッション建設の希望を持っていたのではあるが、カレドン湾地域の新しいミッションを建設する許可はメソジストの方に出された。この地域は本来はCMSに割り当てられていたにもかかわらず、上記のような事情がメソジストに味方することになったのである。こうして、1935年、カレドン湾をカバーし、必要な地理的特性を備えた場所としてイルカラ(Yirrkala)が選択され、メソジストのミッションが設立された。

Dewarは、この事件に対する二つのミッションの対応の違いを分析し、CMSのワレンとダイヤーは懲罰的な19世紀型の伝道師であり、一方のメソジストのウェップは、同化主義的かつアボリジニを尊重する20世紀型の伝道師であるとしている。一概にこのあまりに単純化した分析はうなずけないものの、全体的な傾向としてメソジストの伝道師にはには、アボリジニ文化に親和的な傾向がより顕著に認められることは確かである。そして、このことが、東アーネムランドのアボリジニに与えた影響は大きいと考えられるのである。

#### 4 伝道師とヨルングの対応

##### 1) メソジスト派の伝道師たち

当時メソジストの伝道師たちは、北東アーネムランドのミリンギンビ、エルコ(ガリウィンク)、イルカラの三箇所にミッション・ステーションを運営していた。メソジストの伝道師たちの発言には共通する特徴がみられる。

詳しくみることは紙幅上、難しいので、三つのステーションの長官たちの言動を選んで、彼らの行動や考え方を概観しておくことにしたい。

ミリングンビの責任者は、1926年にウェブ(T. Webb)にかわる。かれはそれまでの伝道師と異なり、一夫多妻でさえも彼らの社会の重要な部分であるとし、西洋文化の圧倒的な押しつけを反省する意見を述べている[Dewar 1992]。彼は最終的にはアボリジニたちは白人的な生活様式を選ばなくてはならないと信じていたものの、それを選ぶかどうかを決めるのはアボリジニであることを強調した。彼はアボリジニの知性を理解し、自分たちの仕事は白人の生活様式を強制することではなく、説明によって彼らにとってもっともよい変化であることを、古いやり方よりも新しいやり方が優れていることを理解し、納得させることであると考えていたのである。ミリングンビでは、アボリジニに農業や家畜をかうこと概念を教え、生活の基本的なことを教えていったが、強制的な教育は行われず、たとえば、服装についてもむしろアボリジニの要求が主導であり、複婚も禁止したことはなかったという。また、前章で述べた通り、彼はアボリジニを鎮圧しろ、という世論に対して、彼等を安定した定住生活を行わせることで平和化させることができるという意見を貫いている。

また、当初からエルコの責任者であったシェパードソンは、ヨルングの人たちをとりまく状況の変化が早すぎることを憂いており、十分に準備の時間が与えられるべきであると主張している[McKenzie 1976]。エルコのミッションでは、当時クラン間の争いがたえないことも、彼の悩みの一つであり、ヨルングの伝統的な生活単位である小さなグループで、各々のグループの土地で、ミッションとの関係を強く持ちながら暮らすことが彼らに適していると考えられるようになった。彼は積極的にこういったアウトステーションと呼ばれるムラの建設を1950年代に進めた。そして、そこでの彼らの生活をサポートするために、いち早く飛行機を導入した。現在のアーネムランドでは、アウトステーションを自分達のクランの土地に建設し、数家族単位で暮らすという居住形態が広く一般的に見られるようになっており、アボリジニの人々のアイデンティティのよりどころにもなっている。しかし、当時の同化主義の考え方の中で、シェパードソンがアボリジニたちがブッシュに帰ることを奨めるという態度を明確にしていることは意義深く、非常にはやい時期に彼らの文化的独自性を重視する態度を持っていたこと

が伺われるのである。

イルカラの管理長官ウエルズ(E. Wells)は、ゴープ訴訟に強くかかわりを持った人で、アボリジニの側に立ち、鉱山開発に反対をした[Wells 1982]。1951年、イルカラ地域でボーキサイトが発見された。連邦政府、メソジスト・ミッション上層部、鉱山会社の三者間で協議が行われ、1958年には鉱山開発について、内々の合意にいたっていた。ウエルズは、1962年に監督長官としてイルカラに赴任しているが、1958年になってはじめて彼らの耳に届いたニュースに抗議活動を展開してゆく。そしてこのなかで彼は繰り返し、イルカラのアボリジニたちから、土地についての彼らの概念についての聞き取りをおこなった。彼が一番主張した点は、開発の決定を下すに当たって、アボリジニを蚊帳の外におき、彼らの代理として話し合いをし、その結果だけを伝えるのではなく、彼らも対等なパートナーとして話し合いの席につかせるべきであるという主張であった。彼はインタビューを通じて、アボリジニと土地とのつながり、トーテムについての深い理解を示すようになっていった。彼は、ミッションの本部と対立することになってゆくが、それでもアボリジニの立場にたった抗議行動を貫いた。一連のウエルズの動きはミッションの上層部と対立し、結局彼は1963年に管理長官の職を辞し、イルカラを去った。

## 2) 適応化運動-Adjustment Movement

それではアボリジニたちはこうしたミッションナリーにどう対応していたのか。この地域のミッションに対するアボリジニ側の態度を伺うことのできる出来事を二つとりあげることとする。1957年、エルコでは、適応化運動(Adjustment movement)と呼ばれる事件が起こる。これは、アボリジニたちの自発的な側からの動きであった。この地域の中心となる父系出自集団の代表者があつまり、それぞれのランガと呼ばれる秘密の聖なる彫刻を、夜のうちににミッションの教会の近くにコンクリートで固めた土台の上に建立し、全ての人々の前に白日にさらす、というものであった。これを彼らは「契約」と呼び、ランガを公開し、自分たちの秘密の知識を公開することによって、キリスト教を受け入れ、古い伝統的なやり方を捨てる、と宣言する意味あいを持っていた。これらはこれまで成人男性のみが参加できる秘密の儀礼でのみ公開されていたもので、女性や子供たち、または外部

者が見るものではなかった。朝、全ての出自集団のランガがミッションに一斉に公開されたのを見て、女性たちはパニックを起こし、大騒ぎになったという。この動きを中心的に動かした男の一人バタンガ (Batangga) は驚き嘆く女たちに、これまで秘密にしてあった知識があったから各集団間での争いが耐えなかったのだ、古いやり方は正しくない、神が我々を導いてくれる、白日もとに秘密をさらすことで、神はわれわれを祝福してくれる、と説明した。このときに、伝統儀礼をエルコから排除するという決定もあわせて行われている。

この動きは、1930年代から伝導師たちと接触し、積極的にエルコ・ミッションの建設に携わってきた数人の男たちが中心となっておこされたものである。バーントによれば、こうした人々は、キリスト教的な価値観と伝統的な価値観のメディエーターとして板挟みになる状況におかれていたという。また、この事件に先立って、米豪探検隊がこの地を訪れ、秘密の儀礼を撮影し、そのフィルムがエルコで上映され、人々がすでに秘密は明かされてしまったと、ショックを受けたという事件があった。バーントはこのことが直接の契機になっていると指摘している [Berndt 1962]。一方、ハリスは戦争の与えた影響をその背景として指摘する。ミリングンビの空軍キャンプやダーウィンでミッション以外の大量の白人と初めて接し、大量で圧倒的な最新の戦闘用機器とそれを操る白人を目にし、機銃掃射や爆弾を経験したことで、白人たちの力の強さを認識することとなったという [Harris 1992]。そして、秘密のものであったランガを公開することで白人のもたらす財を獲得しようとした動きだったと杉藤は分析している [杉藤 1990]。いずれにせよ、この事件は、当時のエルコのアボリジニたちが、ミッションを非常に好意的に受けとめており、両者の間に良好な関係があったゆえに積極的にキリスト教文化に近づこうとした動きであったとみることが妥当だろう。

### 3) イルカラでの土地訴訟

一方、イルカラでは管理長官ウエルズがとった行動に関連して述べたように、1968年に後の先住民の土地権成立につながるゴープ訴訟がおきる。アボリジニたちはウエルズらのサポートを得ながら福祉局などに抗議の手紙を書き、鉱山開発の差し止めを求めた。中央の政治家もイルカラを訪れ、

アボリジニたちは彼らに自分たちの土地とのつながりの強さと、それを象徴する樹皮画のことを説明した。そして、ウエルズや政治家達の進言に応ずる形で、アボリジニ達は彼等の土地についての伝統的な神話を描く樹皮画を陳情書とすることになる。つまり主な出自集団の神話をあらかず絵を縁取りとして、まん中にタイプ打ちした陳情書を張り付けた樹皮を下院におくったのである。そして、1968年、イルカラのアボリジニたちは、連邦政府のボーキサイト採掘許可に対して採掘差し止めを求めた訴訟を起こした。ウエルズだけではなく、ミッションのスタッフたちは積極的にこの訴訟に関わった[Griffiths 1995]。彼らの訴訟は、敗訴に終わるものの、この裁判をきっかけとして調査委員会が組織され、その報告がアボリジニ土地権法案（北部特別州）の成立につながったのである。「たくさんの伝道師が入れ替わり、立ち替わりやってきたけれど、ウエルズは本当に私たちのために働いてくれた。彼にはもっとイルカラにいてほしかった。」とイルカラのアボリジニはかれについて語っている[Yunupingu 1997]。このようにイルカラでおきた初めての土地訴訟は、ミッションのスタッフの協力のもと、可能になったものであることが指摘できるのである。

## 5 おわりに

4章で簡単に紹介したメソジスト派の3つのミッションの管理長官たちの言動は、それまでの伝道師たちと比較して、独自なものであり、三者には明確な共通性が見られる。それは、アボリジニ文化を理解しようという積極的な姿勢ある。どの伝道師も白人的な価値観を強圧的に押しつけることをよしとしておらず、おこなってもいない。それどころか、彼らはアボリジニの言語、慣習などの文化を熱心に学び、理解しようとしている。例えば、ウエップは、複婚というキリスト教的考え方では受け入れがたいはずの慣習にさえ理解を示している。また、シェパードソンは、同化とはむしろ反対の方向のベクトルと思われる、ブッシュでの居住というアウトステーションの建築に尽力し、押し進めた。

もちろん、こうした伝道師たちの対応はメソジスト派において独自にうまれたものというよりも、全体的な対アボリジニ政策の流れにのったものとみることが妥当だろう。2章で述べたように、このころになるとCMSの方針にも共通したアボリジニ文化を尊重する考え方がみられ、1940年代には

アボリジニの価値観を認めようとする相対主義的な理解が次第にオーストラリア社会の広い範囲で受け入れられるようになる兆しがみえるからである。このことは、同じメソジスト派でも、3章でもふれたように、1916年に最初に建設されたゴルバーン島のミッションでは、寄宿舎に混血のアボリジニの子供を親から隔離して収容し、同化、教育することを主な目的としていた事や、1925年にミリングンビでも複婚の禁止をめぐる、伝道師の殺人騒ぎがあったことなどを見ても、戦前には決してアボリジニ文化に親和的な方向だけで活動を展開していたのではないことがわかる。大きな流れとしては、ミッションの宗派をこえた時代による変化があったことは間違いない。

しかし、本論でみてきたように具体的なアボリジニの人々の経験は多様であり、その記憶は個別であった。各宗派のミッションの方針というこれまでの枠組みをこえたところに彼らの日常経験はあったといえるだろう。つまり、具体的なアボリジニに対する日常実践に大きく影響していたのは、個々の伝道師の考え方や態度であったのである。戦争前後、メソジスト派ではアボリジニ文化に親和的な伝道師たちの存在が目立つようになっていったことはみてきたとおりであった。ヨルング地域のミッションの設立がいずれも1930年以降であることの意味は大きく、ヨルングへのミッションはその設立の時代によって、より明確に、白人文化を強圧的に押しつけない、アボリジニ文化に親和性の高い、人類学者のアドバイスの影響を受けた、文化相対的価値観が強く反映された方針を体現したものになった。ヨルング地域の人々の植民地経験は、それまでのアボリジニへの入植のステレオタイプからは大きくへだたったものとなった。そして、このような歴史的背景が適応化運動や土地訴訟をめぐる一連の動きにみられるようなかれらの反応を引き起こしたといえることができる。彼らの記憶するミッションは個別具体的であり、多様である。ヨルングの人々が生きるポストコロニアル的現在の理解には、これらの考察が不可欠であるといえるだろう。

## 文献

Altman, Jon. 1987 *Hunters and Gatherers today*. Australian Institute

of Aboriginal Studies.

Berndt, Ronald 1962 An Adjustment Movement in Arnhem Land, Cahiers de L'Homme, Mouton & Co.

Clifford, James 1988 The predicament of culture - Twentieth-century ethnography, literature, and art. Harvard University Press.

Cole, Keith 1985 From Mission to Church, Keith Cole Publications.

Commonwealth of Australia 1997 Bringing them home : Report of the National Inquiry into the Separation of Aboriginal and Torres Strait Islander Children from Their Families, Human Rights and Equal Opportunity Commission.

クリフォード、J. & G. マーカス編 1996『文化を書く』春日直樹他訳。紀伊国屋書店。

Dewar, Mickey 1995 The 'Black War' in Arnhem Land - Missionaries and the Yolngu 1908-1940, The Australian National University, North Australia Research Unit.

Griffiths, Max 1995 Aboriginal Affairs - A Short History. Kangaroo Press.

Harris, John 1990 One Blood: 200 years of Aboriginal Encounter with Christianity, Albatross Books.

窪田幸子 1993「多文化主義とアボリジニ」清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア3 近代に生きる』pp. 99-113, 東京大学出版会。

McKenzie, Maisie 1976 Mission to Arnhem Land, Rigby Limited.

Shepardson, Ella 1882 Half a Century in Arnhem Land, PanPrint.

杉藤重信 1990「1パーセントの人々＝アボリジニ：長老ブルマラの世界」中野不二男編『もっと知りたいオーストラリア』pp. 82-94, 弘文堂

Thomas, Nicholas 1992 The Inversion of tradition, American Ethnologist 19(2):213-232.

Wells, Edgar 1982 Reward and Punishment in Arnhem Land 1962-1963, Australian Institute of Aboriginal Studies.

Yunupingu, G. (ed.) 1997 Our land is our life - Land rights ' Past, Present and Future, University of Queensland Press

1 1991年に和解委員会(The Council for Aboriginal Reconciliation)が組織された。2001年の連邦成立100年までに、先住民の文化遺産を正に評価し、正義と平等を獲得することをめざして活動を行っている。詳しくは和解委員会ホームページ <http://www.austlii.edu.au/au/orgs/car/>参照のこと。

2 本論では、「ミッション」とは、キリスト教伝導団の意味で用いる。

3 「白人」とは、一般にオーストラリアで用いられる white Australians の意味で用いる。主流社会側のイギリス系住民を指す。

4 エルキン教授に積極的に助言を求めたのは、1937年から39年まで内務大臣(Minister for Interior)を勤めたマックイーウエン(McEwen, J.)であった[Harris 1990]。

## ポストコロニアル状況にみるキリスト教

### 1. はじめに

1985年、はじめてのオーストラリア・アーネムランドで、私はまず町に暮らすアボリジニの人々の日常のサイクルを押さえようとしていた。調査にはいつて最初の日曜日の朝、私は教会へと向かった。キリスト教ミッションがつくったキャンプから発展してきた町であるから、きっと多くのアボリジニが教会に通うのだろうと考えたのである。ここは積極的にキリスト教を受け入れることを表明した地域であり、6年ほど前には大きなキリスト教リバイバル運動がおきた場所である。多くの住民にとって教会は生活の一つの重要な拠点になっているのではないかと考えられた。

ところが、教会には数家族のアボリジニがいただけで、あとはこの町で働く白人の家族の人々だった。この最初の調査期間に、その後も何回か日曜礼拝の行われている教会をのぞいたが、集まっているアボリジニはいつも20人をこえることはなかった。このコミュニティの大多数の人にとってはキリスト教は重要な位置を占めていないのだ、と納得し、おそらくリバイバル運動などは、一部の先鋭的な、つまり例外的な人々の動きだったのだろうと解釈した。そして、その後は教会へ足を運ぶことは、ほとんどなくなっていた。

あれから10年以上の調査を経て、当初の私の判断はあまりにも早計であったといわざるをえない。当初、表面的にはみえたこなかったものの、日常生活の端々や彼らの世界観や概念、そして伝統儀礼のなかにキリスト教的な影響が存在することを、現在実感しているからである。私の早計な判断は、無意識にせよ、キリスト教的な外部の白人社会の影響を排除して、「伝統的」な社会を見たいという本質主義的な視点によるものであったのだろうか。そのことをはっきりと否定する根拠をもたないものの、拙いながらありのままの社会を見ようとしていた当時の情熱は強く、間違いのないものであったという自負は今もある。そんな筆者にみえてこなかったキリスト教は、おそらく、そのあらわれが直接具体的ではなく、ある意味で習合され、彼らのもともとのありようのなかに埋め込まれた形で存在して

いたからであろう。この小論では、キリスト教がどのような形で彼らの伝統文化のなかに存在しているのかをあきらかにし、そしてそのような現在を生むことになったのは、歴史的経緯の特殊性であることを指摘したい。

## 2. ミッションの歴史的経緯と調査地

調査地は、オーストラリア大陸北部の熱帯に位置するアーネムランド、約 10 万平方キロメートルのひろさのアボリジニの土地の北東海岸部に位置する。アーネムランドは 1931 年に保護区に指定され、1968 年の国民投票をへて、1972 年にアボリジニの土地となった。北東アーネムランドはヨルング (Yolung; 人間の意味。自称でもある。) とよばれるアボリジニの人々の領域であり、この地域にはメソジスト・ミッションによって、1931 年、35 年、42 年にそれぞれ 3 つの伝導のためのキャンプが建設された。これらを基礎として発展してきた町が現在もこの地域のセンターとして機能している。筆者の調査の中心地であるエルコ島のガリウィンクは、こうしてできた町の一つである。

この地域は、その他のオーストラリアのアボリジニ地域と歴史が異なり、暴力的な入植は経験されず、ミッションとアボリジニの関係は友好的であった [窪田 1999b]。戦後、特にアボリジニに対して同化政策がとられるようになってからは、経済状態もよくなり、ミッション経営は好調であった。1960 年代から 70 年代にかけて、ガリウィンクでは、ミッションナリーたちの指導のもと、学校、診療所、材木用樹木のプランテーション、製材所、農場、水産工場、商店、美術工芸品取引所、発電所、上下水道管理組織、建築組織、縫製所などが運営され、アボリジニたちも積極的に協力するという教会を中心に調和のとれた生活が送られていた。子どもたちは学校に通い、女たちはミッションナリーの家で手伝いをしながら家事を学び、男たちは農園や製材所でミッションナリーたちとともに働いた。そして毎週日曜には、多くの人々が晴れ着に着替えて教会に通うという日常を過ごしていた [Fidock 1981]。

1970 年代に入って、アボリジニへの政策が同化政策から自立自営政策へと変化する。ミッションは次第に町の経営から手を引き、アボリジニによる自営が試みられるようになっていった。1976 年には先住民土地権法

(北部準州) (Aboriginal Land Rights (NT) Act) が成立し、それまで保護区であったアーネムランドはアボリジニの土地と認められた。これは、先住民の譲渡不能な自由保有権を認めたものであった。この法律によって地域の土地の権利を持つものたちがコミュニティの行政に権威を持つようになったという [McKintosh]。その結果、筆者が最初に調査にはいった 1985 年の段階には、町の運営はアボリジニが決定権をもち、白人の援助を受けながらヨルングの人々自身による自治が行われていた。学校は北部準州の教育局の管轄となっており、病院も北部準州の厚生省の管轄であり、店は北部オーストラリアにいくつかの店をもつ生協の運営になっており、ミッションによる運営が続いている機関はなくなっていた。かつてあった縫製所や製材所、水産会社などはなくなっていた。町に居住し、働いている白人も多くが政府によって雇われた者たちであり、ミッション関係者は、MAF (Mission Aviation Fellowship) という軽飛行機会社の社員たちと、メソジスト教会の援助を受けて聖書翻訳をおこなっている女性一人だけであった。冒頭で述べたように、当時のガリウインクには、キリスト教的な盛り上がりはみられず、熱心なキリスト教徒の町というものはほどかったのである。

### 3 ガリウインクにみるキリスト教

#### 1) 伝統儀礼にみられるキリスト教的要素

ガリウインクでの生活の中では、いわゆる伝統的な儀礼が現在も活発に行われている。基本的に女性は儀礼の秘密とされる部分からは排除され、儀礼に参加することはもちろん、儀礼場に近付くことも許されない。筆者は調査の当初から、こうした彼等が秘密にしている部分に踏み込もうとはしなかった。ただ、女性達が儀礼とどのように関わっているのかに注目してきた。以下に紹介する儀礼は、したがって、いずれも公開性の高いものである。

葬式儀礼は、死者の魂をその死後の地に送り届けるために、彼らの神話的世界観に基づいて、踊りと歌が、少なくとも 3 日間、長い場合は 2 週間にわたってつづけられる。広場には喪がり屋が建てられ、棺に収められた遺体がベットの上に安置される。棺にはクランの絵が描かれるか、絵を描い

た布がおさめられる。棺には布をかけ、その上にクランの神聖な儀礼用の装飾を施したカゴがおかれる。人々は身体装飾を施し、クランの神話をあらわす踊りを繰り返し踊り続ける。こうした葬儀を指揮する者がだれであるのか、どのクランの者がどんな役割を果たすのか、遺体を扱うのは誰か・・・などは死者との親族関係によってあらかじめ細かに決められている。このような儀礼の手順は基本的には、かつての民族誌に記録されたものと大きく変化していない。

キリスト教的な要素は、夜になってあらわれる。夕刻になるとそれまでの踊りと歌が終息する。人々は儀礼場をかたづけ、箒などを使ってきれいに整える。そして、電気が灯され、ギターとその他の楽器を持ち出し、賛美歌を歌い始める。そして、夜も深まったころ、キリスト教的集會がもたれる。人々は口々に死者のための祈りを捧げ、魂が神の国へ到れるようにとつぶやく。このように昼間は彼らの神話に基づく歌と踊り、そして夜はギターにあわせての賛美歌と祈りというパターンが毎日繰り返されるのである。

そして1週間近い葬儀が終わると、遺体は町はずれにある墓地に運ばれる。現在は車を使うものの、このパレードは決まった道筋を通り、車は身体装飾をほどこし、踊りをおどる男たちの一段に引き連れられて、ゆっくりと進む。こうして墓地に到着するまでは、いわゆる伝統的なスタイルが維持される。墓地には、あらかじめ墓穴がほられており、人々がその回りで待ち受ける中、車の荷台から棺がおろされ、男たちの踊りの先導によって、棺が墓穴の横におかれる。ここにいたって突然、おもむろに聖書を手にした牧師が前に進み出て、キリスト教式祈りをささげ、女性たちのグループが賛美歌を歌う。これが終わって、棺は穴のなかにいれられ、土をかぶせ、葬儀は終了するのである。

このパターンは、筆者が観察した4回の葬儀に共通しており、故人が特にキリスト教に熱心であったどうかはあまり影響しないように思われた。

1990年に筆者は、もう一つの公開性の高い伝統儀礼である成人儀礼に参加する機会を得た。これは、少年が6才から10才になった頃に行われる儀礼で、割礼をおこなう。準備の段階から男性による歌と踊りが続き、その中で、儀礼を受ける少年の胸にクランの文様が描かれる。全ての準備

が整うと、親族の男性たちも身体装飾をし、少年を囲んで、踊りながら儀礼場に進む。儀礼場には砂でクランのデザインがつけられ、その中央で少年は割礼を受ける。少年が儀礼上に進む前に少年の母親が儀礼上の中央にシートをかぶって横たわる。男性たちがこのシートをはずし、女性は立ち去り、そこに少年を横たえて割礼がおこなわれる。割礼がおわると、親族関係によってあらかじめ決められた男性が少年を女性の目の届かないブッシュに運び、手当が施される。準備の段階からの歌と踊り、身体装飾、儀礼場、そして踊りと歌、儀礼の段階・・・これらはほとんど全て葬儀と同様、民族誌に見られる手順が維持されている。

この成人儀礼においても、キリスト教的要素が夜になって現れる。割礼がおこなわれた儀礼場には電線がひかれ、明かりがともされる。そして儀礼場の中央に祭壇に見立てた箱がおかれ、クランベリージュースと、ちぎったパンがおかれる。儀礼を受けた少年とその両親がにわか仕立ての祭壇の前に跪き、神父役割の男性が彼らの頭に手をおき、集まった人と共に祈りを捧げる。そしてパンとジュースを全員が共有し、説教がおこなわれ、賛美歌がうたわれ、キリスト教的集會がおこなわれる。

ガラ儀礼？

## 2) キリスト教的集會

反対に、ラリーと呼ばれる新たな集會の形も現れた。これはキリスト教的集まりなのだが、そこでは聖書の出来事を、デジャリドゥーやクラップスティックをもちいてアボリジニ音楽の節回しで、アボリジニのエンブレムを用いて踊ることもしばしばおこなわれる。西洋流の音楽でアボリジニ的理解の聖書のストーリーが演じられることも多く見られる。新生児の洗礼もおこなわれるが、子供は伝統的なペイントをほどこされる。ある時は、土地を洗礼することもおこなわ。この計画にはその場にいた白人ミッシヨナリーから抗議がおきた。それはキリスト教徒として正しくないことである、という主張だった。しかし、それは却下され、人々が十字架の形に並び、そのまわりを長老が地面に水を落としながら回る、という形で洗礼がおこなわれた。

聖書勉強会

### 3) 神話とキリスト教

儀礼以外の場面でも、彼らの神話のストーリーの中に聖書の話が入っている場面にもである。例えばガリ（リヤガウミル・クラン）は、自分の樹皮画をさしながらこんな話をした。

これは、3賢者の話。ジャンカウ神話（この地域の重要な創世神話。3人が船で東方の島から明けの明星に導かれてやってくる）と同じ。星に導かれてやってくる。人数も3人。星はリヤガウミルのトーテムである。だからこの話を樹皮画に描くことができる。形が少し変わっているだけで、同じこと。

また、グルワナウイ（ジャンバルピュイング・クラン）は、集会のために自分がつくった歌詞について次のように説明した。バベルの塔のはなしは、私たちの話。昔、人々は一つの言葉で話していて、みんなで大きな塔をつくり、神をこえようとした。しかし、神は塔を壊し、人々の言葉をばらばらにした。ジャンカウは、旅を続けるなかで、言葉をかえてもともと一つの言葉であったこの地域にたくさんの言葉をさずけた。彼が言葉をバラバラにした。キリスト教の話と私たちのワンガルはつながっている。聖書のなかで私たちの神話が語られている。

ウンバヤ（ジャンバルピュイング・クラン）は、ヌンガリニャ・カレッジで考えたこと、として次の話を語った。ゴルゴダの丘の話を知っているか。イエスが張り付けにされた丘。そこから全てのことが始まった。ジャンバルピュイングのサメはたびをしてガラタまでゆき、そこでヤリで刺されて殺される。殺したのはグパピュイングの男で、裏切り者。サメはそれを知っていて逃げたが、丘の上で槍に刺されてしまう。だからこの聖地には今もサメの岩がある。サメは死んでその身体を残し、その肉から全てのものをつくった。私たちの部族のワンガルはここから生まれた。同じストーリー。キリスト教の話は我々を語っているのだとわかった。

以上のように、現在のガリウィンクでは、アボリジニ神学ともよべるような彼ら独自のキリスト教理解があることが伺われる。そしてこうした伝統的世界観の中にキリスト教的なものが矛盾なく存在しているような状況

は、リバイバルによって生まれた状況と考えることができる。

## 2 エルコ・リバイバル

1979年、オーストラリアでは全国的にも有名なキリスト教リバイバル運動がガリウインクで起こった。これはアボリジニのクリスチャン・リーダーによっておこされたものであり、ミッションの主導によるものではなかった。その後各地に飛び火し、全国的なリバイバル運動となって行く。どのような経緯でこの運動はおきたのだろうか。

### 1) リバイバル 1979年

1970年代にはいると、コミュニティで、あり得ないような出来事が起き始めた。特に目立ったのは、奇跡的な病気の治癒という出来事が多発したことであった。例えば1974年、町の中心人物の一人ジョージが病気になり、息もできないほどになり、肺気腫と診断され、ガリウインクの診療所で危篤の状態になった。家族や友人がベットの周りに集まり、祈り、ジョージを殺そうとしているものがある、それをジョージが述べて捨て去らなくてはならない、と進言し、彼は英語で自分の罪を告白した。「ブッシュの神をあがめた、浜辺の神をあがめた、私は自分の罪を告白します」そうすると、彼は息ができるようになり、元気になったという。このことがあった数週間後、ジョージは儀礼に参加した。すると再び息が苦しくなり、彼は神が秘密の儀礼に参加することを望まないのだと解釈し、その後秘密の儀礼には参加しないと宣言したという。これ以外にも、祈ることで病気が治ったという不思議な出来事や、夢のなかで神があらわれ、その存在をつよく感じたという者や、夜に不思議な特殊な光を目撃し、奇跡の予兆をみた、という者など、超常的な現象がこのころガリウインクで続いていた。

1979年3月13日に、ある男がガリウインクのある島の北部から大きな火がおこり、ガリウインクに向かって全てを焼いてしまう夢を見る。その夢の中で彼は神の存在を感じ、自分自身も神によって焼かれてしまう。そして焼け跡は新たに緑と花にあふれ、エデンの園のようになる。これは神がやってきて全てをかえるという予兆だとその男は考えた。ところが、彼

だけではなく全く同じ日に神の存在を夢のなかで多くの人が感じたという (Blacket 1997)。

そしてそのことがあった数週間後、牧師ジニイニの家で人々が集まっていたときに神が現れる。「人々が集まり、手をつないで祈っていた。聖なる精神(Holy Spirit)を与え、治癒と再新(renewal)を神に祈っていた。突然、人々は神の魂が心に入ってくるのを感じた。祈りの雰囲気は急に変わり、人々は心から調和して祈り始めた。部屋には大きな音が続く、みんな何がおきているのかわからずおびえはじめた。集まっていた人の一人が、神は今我々を訪れ、我々のところに神の王国をつくろうとしているのだ、といって再びみんなで祈った。みんながこの不思議な体験を共有し、呆然とし、この経験が町中に広がっていった。」 (Blacket 1997)

この3月ごろを境として、祈りのための集まりの回数が増え、参加人数も増えていったという。集会はほぼ毎晩行われ、それまで教会のミサには20人も集まれば良いところだったが、数百人が毎晩のように集まるようになった。町の人々の日常生活全体にも変化がみられ、それまで殺伐としていたゴミだらけの町は一掃され、喧嘩ばかりが続いていた各家からは歌と笑い声が聞こえるようになった。

そのころガリウイックに暮らしていた数少ないミSSIONナリーであったダイアンはちょうどこの3月、留守にしていた、4月にガリウイックに戻った。彼女の日記には驚きが記録されている。

4月6日 ヨルングの信徒集会に参加。信じられない。人々からの抱擁。これは本当のこと？

4月10日 教会での集会。椅子を取り去って広く多くの人が座れるようにする。ジニイニの2人のこともが Holy spirit に満たされる。神に子供達がまとわりついていくヴィジョンを見る。そうなりますように。

5月には、Rev Dan Armstrong がキャンベラから呼ばれ、踊り、歌などで人々とのフェローシップを持った。このMISSIONまでの6週間で200人、さらにこのMISSIONの期間中に200人が神に帰依したといわれる。リバイバルの影響はアーネムランドはいうに及ばず、オーストラリア中に広がって行く。1980、1981年には再びサンクスギビングがおこなわれ、他地域の1000人をこえるアボリジニがガリウイックに集まったという。ジニイニが1983年にガリウイックを離れ、リバイバルそのも

ののは下火になっていった。

## 2) リバイバルの分析

1967年の国民投票により、アボリジニはオーストラリアでの市民権をえる。それに伴い、ミッションは徐々に町の経営から手を引いていった。ミッションナリーが町を離れる一方で、アボリジニは、最低賃金法、社会福祉などにより現金収入を得るようになり、大きな社会変化がアボリジニ社会をおそうこととなった。それまでにはなかった規模での経済的変化をアボリジニたちは経験することになった。

1972-1975年のウイトラム労働党政権のなかで、自立自営政策 (self-determination) が具体化してゆく。たとえば、職業訓練補助金や失業保険などの形で現金がアボリジニの手にはいるようになった。土地権についての議論が最初に起きたのもこの時期である。1973年には、メソジスト、プレスビテリアン、イギリス国教会が連合する。彼らは共同プロジェクトとして、アボリジニたちへのインタビューから「自由決定 (FREE TO DECIDE)」とよばれる書類をまとめた (Blacket 1997)。こうした中で、自立自営政策は徐々に形を取って行くのである。

この時期はアボリジニの権利を拡大し、彼らの尊厳を認める施策が次々ととられていった時代であるが、一方で、その変化は早すぎるとさえ感じられていたようである。当時残っていたミッションナリーがアボリジニについて記録を残している。多くが目標をうしなった状態で、教会を離れ、混乱の中に生きており、お金を手にし、酒が手にはいるようになり喧嘩が続く状況が述べられている。

リバイバルは、1967年の国民投票、アボリジニたちの社会経済的地位の変化、1970年代にはいり、ミッションのスタッフの引退、土地権・・・などの社会状況を受けておきたものと考えられる。この後、リバイバルは西オーストラリア、中央砂漠、クイーンズランドへと飛び火し、全国的動きになるが、このことは、エルコがおかれていた状況と共通するものが各地にあったことを示している。

それは、ひとつには1960年まで続いた白人の価値中心的な同化主義というイデオロギーから解放されたアボリジニの状況であっただろう。差別的

であったとはいえ、一つの強力なイデオロギーにアボリジニの人々は適応を繰り返してきた。それはキリスト教的価値に支配されたイデオロギーであったといえる。しかし、それは突然去り、新たな自己選択を迫られる状況が生まれた。その中で、アボリジニの人々は新たなイデオロギーを必要としたと考えられるだろう。

二つ目にはアボリジニの人々のおかれた社会経済状況がある。このころ、アボリジニの人々はおしなべてそれまでと比べものにならないほどの経済力を手にするようになり、社会的にも注目を集める存在となった。自分で決定することができ、それが社会的にも求められることであったわけである。そして、それまでのミッションの指導の中で、ある程度の指導力のあるアボリジニが育っていたことも重要である。各地に飛び火したリバイバルが一時的な流行に終わらないでいるのは、それだけの指導者が各地にいることを意味している。それは男性の場合も女性の場合もあるが、自信を持って自分たちの社会を動かして行こうとする意欲と実力を備えた者たちが現れる時期になっていたといえる。

以上の各ポイントは、オーストラリア北部の多くの地域に共通していたのだが、では特になぜガリウイックで、リバイバルは始まったのであろうか。これは、戦後から1960年代初頭までのミッションとアボリジニとの非常に良好な関係にその源が求められるのではないかと筆者は考えている。ガリウイックの彼らにとってミッションは、単に宗教的イデオロギーの問題だけではなく、生活の諸側面にかかわる全てであった。多数のミッションナリーが彼らとともに働き、生活していた。しかも園両者の関係は非常に親和的かつ良好であった。そのようなミッションナリーが生活の一部として存在し、イデオロギーも確固としていた世界から彼らは突然、自己決定を求められる世界に放り出された。そこで、彼らは実感を伴うような新たなイデオロギーを必要とした。そこで求められたのは、それまで自分たちがなじんできた、最も日常実感にあうものがキリスト教的世界観であったのだらう。ただし、そこではそれまで白人の描いてきたイデオロギーよりも、さらにアボリジニにとって実感を伴うものが求められた。それが神秘主義であり、奇跡的治癒や光による神の力の具現化であったのだらう。そしてそれまでのミッションの西洋的キリスト教世界と、アボリジニが生活実感と

して受け入れることのできる新たなイデオロギーのギャップを埋めることを可能にしたのが、リバイバルであったのだろう。

現地語での説教による彼ら独自のキリスト教解釈、Holy spirit の体験に象徴されるような神秘主義とのつながり、Rev. Aremstrong によるハレルヤ・コーラスと福音主義的 (evangelical) な説教、ディジャリドゥーとクラップスティックの教会での使用は現在ではガリウインクに定着している。これらにより彼らの生活、日常の中にそれまでにはなかった程度にキリスト教的なるものが受け入れられることとなっていくといえるだろう。神話や儀礼の中で、キリスト教的なものや伝統的なものが問題なくいれこになっている現状、そして、個人のなかでもこの二つの共存が相克なく共存している状況はこうしたリバイバルを経て可能になったのである。

これらは、しかし、ミッションが求めたことであつたことをここで改めて指摘しておきたい。戦後設立されたミッションは特に、彼らの概念を押しつけることなく、アボリジニ文化的伝統の上に神の王国を作り上げることを求めてきた。その意味ではリバイバルはキリスト教ミッションナリーの生み出したものと見ることさえ可能だろう。

ミッションはその政策に従いつつ、自分たちの理想の王国をきづこうとした。それは、北部のアボリジニはその自然さ、無垢さゆえに、理想により近づくことができるとする価値観をもととした植民であつた。理想世界を築くため、彼らがとつたのは非常に穏やかな、彼らの文化的基礎を否定することのない、強制のない植民であつた。それは、新たなアボリジニ流キリスト教の創出を促そうとする意図さえ、読みとることができるようなものであつたといえるだろう。

#### 4 おわりに

このころ、ガリウインクの町で暮らしていた白人たちは、教育者や看護婦や運転手や技術者であると同時に、ミッションナリーであつた。彼らは神の福音をアボリジニに伝えることを使命としていたのである。こうした彼らと日常をともにしていたヨルングの人々にとって、外部の文化とはキリスト教の文化を意味した。当時のメソジスト・ミッションの方針、そしてヨ

ルング地域にいたミSSIONナリーたちの態度は、決してキリスト教的価値観を一方向的に押しつけず、アボリジニ文化をみとめようとするものであった[窪田 1999b]。

そうしたMISSIONの白人たちの態度は、ヨルング地域に建てられた教会にもあらわれている。ミリンギンビに1960年代に建てられた教会の正面には、ステンドグラスがはめられている。それは十字架を中心として、そのまわりにこの地域のヨルングの主だったクランのトーテムの動物を配したものであった。また、ガリウインクの教会の入り口には、町から少し離れたあるクランの海岸の聖地から持ってきた岩がすえられた。イルカラの教会には、女性と子供には公開しないクランの秘密の神話の絵が半族ごとに描かれたパネルが正面に飾られた。そして、どの町でもヨルングの礼拝は教会外でも行われることがしばしばで、そこで歌われる賛美歌にはデジャリドゥと拍子木がつかわれるようになっていた[Fidock 1981]。このことは、アボリジニ側がキリスト教を受け入れていたということだけではなく、教会側もアボリジニ的な宗教要素がキリスト教に取り込まれることを容認し、むしろ積極的に押し進めていたことをしめしている。

また、メソジストMISSIONでは、アボリジニのクリスチャン・リーダーを積極的に育てようとしていた。そための機関のひとつがブリスベンにある聖書カレッジ(Brisbane Bible College and Training School)であり、もう一つが1973年に設立されたダーウィンにあるヌンガリナ・カレッジ(Nungalinya College)である。いずれの機関もアボリジニの人々にクリスチャンのリーダーとしての訓練と聖書教育をおこなった。70年代には、こうしたところで教育を受けたヨルングが、MISSIONの様々な仕事を行うようになっていた。現在、40代以上のものの中には、ヌンガリナ・カレッジで学んだ経験を持つものは多く、なかでもガリウインクに住むD. ジニニ(D. Djiniini)は1976年に、ニューギニアでさらに高度な訓練を受け、この地域最初のアボリジニ牧師としてガリウインクにもどった(Shepherdson 1981)。このように、MISSIONのこの地域のアボリジニとの良好な関係を背景として、こうしたことがすでに1960年代から70年代に起こっていたことがわかる。

文献

Berndt, Ronald 1962 An Adjustment Movement in Arnhem Land

- Cahiers de L'Homme, Mouton & Co.
- Blacket, John 1997 Fire in the Outback, Albatross Books.
- Cole, Keith 1985 From Mission to Church, Keith Cole publications.
- Dewar, Mickey 1995 The 'Black War'
- Berndt, Ronald 1962 An Adjustment Movement in Arnhem Land  
Cahiers de L'Homme, Mouton & Co.
- Blacket, John 1997 Fire in the Outback, Albatross Books.
- Cole, Keith 1985 From Mission to Church, Keith Cole publications.
- Dewar, Mickey 1995 The 'Black War' in Arnhem Land, North Australia  
Resarch Unit, The  
. , 0Australian National University
- Harris, John 1990 One Blood: 200 years of Aboriginal Encounter with  
Christianity, Albatross Books.
- McKenzie, Maisie 1976 Mission to Arnhem Land, Rigby Limited.
- Shepherdson, Ella 1981 Half a Century in Arnhem Land, PanPrint.

## ジェンダー関係とミッションの影響

### 1 植民地化とジェンダー

エルコを中心とする地域における非先住民社会との接触は、他のオーストラリアの地域と比べても非常に穏やかなものであった。しかし、そうではあっても植民地化をきっかけとしてアボリジニの社会では、貨幣経済化、近代化、グローバリゼーションなど、急激な変化を経験し、現在もその影響が継続している。植民地化は世界システムの流れの中にあり、必然的に当該社会に近代化をもたらした。特にエルコにおいては、その接触の中心は、ミッションであった。オーストラリア全土のアボリジニの植民化に目を転ずると、各地でアボリジニの近代化の先鞭をつける役割をはたしたもののひとつが、キリスト教のミッション活動であったことがわかる。ミッションが積極的に入り込んだ地域では、近代化とミッション経験は重なって経験された。オーストラリア植民地の先住民と接触をするのは、圧倒的に男性であったのだが、キリスト教ミッションでは例外であった。平和的に先住民を扱い、先住民の生活を変え、キリスト教の福音をもたらそうとしたミッションナリーが、他の植民者と大きく異なっていたのは、同じ目的を共有した家族の単位で、またはコミュニティを成立させて、先住民とともに暮らした点にある。そこには、ミッションナリーの妻として、または福音をもたらす主体としての女性が存在した。オーストラリアにおいて先住民のアボリジニと直接に接触する入植者としての女性は、そのほとんどがミッションという場所に存在したと言えるだろう。ミッションナリーの目的は、「野蛮」とされた先住民のキリスト教化にあった。キリスト教と近代化は同義とされた[Woolington 1986]。

当時、「野蛮な」狩猟採集民のアボリジニに、定住、農業労働、勤労観、衛生観などの概念を教え、近代化することは教化の前提であり、近代化とキリスト教化は同時進行すべきことと考えられていた。ミッションナリーはこの目的にそ

って、アボリジニの教化教育に力を注いだ。女性ミッショナリーもそれは同様であった。ミッショナリーたちは、福音という使命をおびていた。このことが、彼らが他の入植者と明白に異なっていた点であろう。そのために彼らは密接にアボリジニの日常生活にかかわることになったのである。ミッショナリーの女性やミッショナリーの妻たちは、アボリジニの女性たちと日常的に直接ふれ合った。彼女らはアボリジニ女性に家事、料理をはじめ生活に関わる細部について教え、それらは、女性同士の親密な人間関係のなかで行われたのである。

もちろん、ミッションの女性たち以前にも、アボリジニの人々と直接にかかわった白人女性たちはいた。それは、牧場を開拓し、自分の家を建て、アボリジニを使用した牧場主の妻たちであった。初期の白人入植者の妻として、奥地で暮らした女性たちの苦勞、アボリジニとのかかわりなどの記録も数多くのこされている[例えば Isaacs 1990]。しかし牧場主の妻が、アボリジニとかわるのは、使用人としてであり、それ以上の関係は「気まぐれ」にすぎず、必須のことではなかった。こうした女性たちには、なんらアボリジニに対する使命はなかったのである。これに対して、ミッションの女性たちは、彼らに福音を与えるために仕事としてアボリジニたちに接するという明確な目的意識があった。それゆえに接触も密接であり、社会的な影響も大きかったと考えられる。彼らが先住民の人々に福音を授けることを通じて、与えようとした「近代的文明」には、ミッションの理想とする男女のあり方が含まれていた。

このように、ミッションによる植民地経験に注目すると、彼らがもちこんだジェンダー規範という視点が浮かび上がってくる。ミッションのもつ、女性の役割、地位、美德など女性をめぐる理念は、植民地化された社会の人々のジェンダー概念に大きな影響を与えずにはおこななかった。ミッションに注目することによって、植民者側のジェンダー概念の影響による女性の地位、役割の変化をあきらかにすることができ、これまで見えてこなかったアボリジニ女性の植民地経験のミクロな側面にせまることができると考えられる。

これまでの、植民地化された社会における女性への影響についての研究は、

大きく二つに分けることが出来る[Brettell & Sargent 1997, Blythe & McGuire 1996]。一つは、近代化によって、女性の地位は向上した、として植民地化を肯定的に見る立場である[Tillp & Scott 1978]。この立場は、植民地化によって、近代化がもたらされ、女性の市場参加が増加することによって、女性の経済的、社会的立場が向上したとするものである。これは、植民地化以前には、男性が圧倒的優位であって、女性が搾取され、奴隷的な扱いを受ける社会があったことを前提とし、そこから女性が近代化によって解放される、とする立場である。もう一つは、反対に、近代化によって、女性の地位は低下する、とする見方である[Leacock 1981, Ackerman 1987]。この立場は、植民地化によってもたらされた近代化によって、労働市場が生まれるとともに、「公」と「わたし」の空間の区別がされ、女性は「わたし」の空間におしこまれ、消費枠組みに飲み込まれ、それによって女性の地位が低下すると説くものである。この立場が前提とする植民地化以前の社会においては、女性は大地に同一化されるような重要な存在で、そこには平等なジェンダー関係があったとする。そこに、近代の男性優位というイデオロギーが導入され、女性が周縁化され、経済的・政治的決定権を失ったとする立場である[James 1996, Wolf 1996]。このように、これまでの研究には、二つの対極的な立場があり、前提とする社会の男女関係のイメージも両極にわかれていることがわかる。

アボリジニ研究においても同様に両極の立場が見られる。多くの研究は、狩猟採集という生業において優位にある男性が、社会でも優位に立ち、女性を隷属させ、女性の労働力を搾取し、社会の中核を担っていたと説いている。そのあらわれが女性の神話や儀礼からの排除であり、一夫多妻制による女性の従属化である。女性は主体性を奪われた存在であり、男性に依存してしか生きることができない、とする。そしてこうした社会的劣位の地位からキリスト教化によって女性が解放される、という立場をとる[Warner 1969]。それに対して、ごく少数ではあるが、植民地化以前にも女性は主体的な存在であったとする立場がある。ベルに代表されるこれらの研究では女性の神話や儀礼への関わりの大

きを認め、生業における生産量を再評価し、女性が男性に隷属するのみの存在ではなかったことを確認し、そのうえでミッションをはじめとする植民地化により近代的な経済関係にはいることによって女性の社会的立場は低下したと主張する[Bell 1988]。またハミルトンは、エルコ島に近いアーネムランドの海岸部のコミュニティの事例を用い、接触以前にはアボリジニ女性は、社会的意味付けとしては男性よりも下位に置かれていたものの、経済的には男性に依存する存在ではなかったという。そして、白人社会と接触し、貨幣経済を基礎とする生活になることによって、女性はその経済的自律性をうしない、教育、医療の導入、伝統的婚姻システムの崩壊によって、彼女らは第二市民の階級におとしめられたとしている[Hamilton 1975]。

女性と男性の適正役割についての西洋的ジェンダー概念を押しつけることが、植民地化の一つの側面であったことは間違いなく[Bretiell & Sargent 1997]、キリスト教ミッションの活動はその流れの先端にあった。二つの立場の論者が指摘するような事実は、確かにそれぞれに認められるのだが、いずれの立場も一面的にしか状況をとらえていないと言わざるを得ない。女性の地位は向上した、とする者たちは、植民地化を女性の解放ととらえているが、ことはそう簡単ではない。たとえば、女性が労働市場に参入することによって新たな権力構造に組み込まれる場合が多いことはこれまでの事例が示すとおりで、もう一方の女性の地位は低下した、とする近代抑圧論者たちも、与えられた規範からはみ出してゆくような女性たちの動きを見落としている。

ミッションがもたらした近代化によって、アボリジニ社会は変化し、それに伴って女性たちの社会内の立場も変わってきた。したがって近代化によって女性が労働市場のなかに入り込むことになった側面も真実であり、ミッションという特定世界のなかで、女性たちが自立性を発揮するようになってきた側面もまた真実である。女性たちは、ミッションナリーたちの考えのもと、ジェンダー規範を付与され、コントロールされてきた。それは公の部分だけではなく、具体的な家庭生活の細事、わたし的な部分を含めての干渉であった。それがミッ

シヨンの植民地状況の特徴であったといえるだろう。しかし、彼女らは、ただ外からの影響を受ける一方の受動的な存在であったのではなく、親しみ、謙遜し、ごまかし、さぼり、笑い、泣き、柔軟に、自らを適応させ、自律性を維持していたのである。それゆえに、現在見られる彼らの社会のジェンダー規範には、植民側、ミッション側の意図したものとは大きなずれが生じ、女性たちの植民地化への従順な対応と抵抗との複雑な諸相がみられる。この論文では特に、オーストラリアの先住民の経験したキリスト教ミッションによる植民地状況をつうじて、彼女らがどのように与えられたジェンダー役割に抵抗し、同化し、それがどのようにジェンダー規範と意識を変えてきたのかを中心に考察を試みることにしたい。

## 2 キリスト教のミッション活動に内在化されたジェンダー

### (1) ミッションの方針にみるジェンダー役割

ミッションナリーがとった、先住民に対する対策を概観すると、宗派の違いにかかわらず、いくつかのはっきりとした共通する方針が浮かび上がってくる。それは、定住化させること、農業労働の重要性を教えること、女性の地位の向上、そしてキリスト教の教義にそった魂の救済をめざすことである。平和的で秩序のある近代的な生活を先住民の間に定着させるために、ミッションという空間をつくり、そのなかで具体的な施策がとられ、こうしてその方針は教化教育活動のなかに生かされた。その多くはオーストラリアに必ずしも独自のものではないにしても、ミッションの活動方針の目標について、共通してみられる点はどのように整理できるだろうか。

まず、第一にミッションナリーたちは家庭を最重要視した。家族生活は近代化された生活の普遍的な前提と考え、それを先住民の人々の社会のなかに見いだそうとした。かれらの前提とした家族のイメージは、一夫一婦の、核家族の家庭であった。そして、核家族的家庭が欠如している社会には、それを強要した。

具体的なイメージとしては、夫が外で労働をし、家族をささえ、女性が家内労働を受けもち、清潔で快適な家庭生活を提供し、洗礼を受けた子供がその家庭で立派なキリスト教者に育つ、という理想的な聖家族であった。

第二は、労働概念である。ミSSIONナリーたちにとって労働とは農業労働であり、それは男性の仕事であった。男性は主な収入獲得者であることを期待された。つまりそこでは、男性中心主義、男性優位を前提としての労働のイメージがあったのである [Fiske 1996, Grimshaw 1997]。そのために、それまでにはなかった、男性が稼ぎ手で、外で働き、女性は家事労働で、家にいるという役割分業が強調された。MISSIONにおける教育はこの男女別役割の考え方を反映し、成人教育にも男女差がみられた [Grimshaw 1997]。女性は雇用されることがあっても白人の家のお手伝いとして、洗濯、掃除、料理、子供の世話などを行うか、縫製工場や病院での労働など、「女性的な」仕事が割り振られた。それに対し、男性は機械を扱い、農場で働くなどの「真の仕事」が与えられたのである。

第三番目に、女性の美德についての強調がある。MISSIONの女性やMISSIONナリーの妻たちは、「真の女性らしさ」を従順、奉仕、純潔、清潔感、家内性などにあるとし、これを強調した [Fiske 1996, Grimshaw 1997]。例えば、19世紀のハワイのMISSIONナリーの妻たちは、ハワイの女性たちに「女性の慎み」という価値観を与えようと試みた。それは、裸体をさらさない、誘惑的なしぐさをしない、夜出歩かないなどの性的な貞淑さを強調するビクトリア朝的美徳であり、当時のMISSIONナリーの妻たちに共有されていた価値観であった。その美德の名の下に、女性の家庭内役割は強調され、家庭内を整えること、子育て、子供の教育は女性の責任とされたのである [Fiske 1996]。

以上のようなMISSIONナリーの強調した価値観は、かなりの程度、地域にかかわらずに共通性が見られるが、歴史、社会的状況によってミクロな経験は異なることは当然である。オーストラリアでは、どのようにジェンダー概念が与えられ、どのような特徴がみられたのであろうか。

## (2) 初期のミッションの失敗とその背景

オーストラリアの入植は一七八八年、シドニーの近郊から始まる。しかし、ミッションが先住民であるアボリジニの人々への教化活動を本格的に始めたのは、19世紀にはいつてからのことであった。このころ、ミッションナリーは「野蛮で」「粗野な」アボリジニを教化すれば、彼らは救われる、と単純に考えていたといわれる。オーストラリアにおける19世紀初期のミッションの多くは失敗であったといわれ、計画半ばで放棄されたり閉鎖されたミッションも多い。このような失敗の理由は、次のような点に求められる[Ferrp 1979]。

まず、政府（植民地政府）によるミッションへの経済援助がほとんどなかった。ミッションは政府の後ろ盾を持っていないため、権威がなく、他の入植者からその活動は、許容され、評価されていなかったことを意味する。つぎに、基本的なアボリジニへの態度がある。当時は、アボリジニは「野蛮で進化の段階の遅れた、下等な人種」と考えられていた[Kuper 1988]。例えば、クイーンズランドにおける当時のミッションナリーたちは、以下のように発言している[Loos 1988]。

「インディアン、エスキモー、アフリカ人、南太平洋諸島民にくらべてアボリジニでは（キリス

ト教化の) 成功が少ない」「アボリジニは宗教的な感受性がすくないのか、ニューギニアの方がや

りやすい」「(アボリジニは)野性的で下品であり、完全な制限されない自由をもっていた。男は強

さも意欲もなく、一日中遊んで暮らしている。」「アボリジニの能力と文化は限定されたものであ

り、ポリネシア人の方が人種の段階として高いところにあり、それは農耕と定住によってしめさ

れる。」

こうした発言からは、当時のミSSIONナリーたちは、アボリジニの後進性をあらかじめ前提としていたことがうかがえる。アボリジニを遅れた民族とみなし、キリスト教化が難しいと嘆いている。彼らは、当然の前提として、アボリジニを原始的にとらえていた。しかし、これは当時の教養ある主流社会のイギリス系オーストラリア人にとっては常識とされていたことで、アボリジニは「野蛮」すぎて「文明」を受け入れることが出来ず、「野蛮」ゆえに神の福音の精神の届かないところにあると考えられていた。

また、アボリジニ社会の非定住の移動の多い生活、社会単位のまとまりの弱さ、外から見て「核家族」の見えにくさ、そして労働観の違いといった社会的特質もMISSIONにとってには問題だった。まず、MISSIONが前提とした「定住」という考え方がアボリジニには受け入れられなかった。アボリジニに対しては、特に狩猟採集という移動性の多い生業から定住へ、計画性をともなった農業労働へということが強調されたが、これまで移動を基本としていた彼らにとって、何故一カ所に留まる必要があるのか、さえが理解されなかった。農業労働はMISSIONが「真の」労働と考えるところであったが、アボリジニにとってはすぐに食料が手に入らない労働を繰り返すことは、苦痛にほかならなかった。それよりも移動し、食料を手に入れることがずっと意味があると考えた。それ以上に、アボリジニの人々にとって移動は、それまでの生活の価値の中心であったことに注意しなければならない。移動によって自分たちの部族の土地の環境を知り、神話的世界と直接につながることができた。生活環境や物質文化、精神文化すべてが移動を中心として営まれていたのである。そうした彼らを定住させるということは、アボリジニの価値の全否定ともいえることであった。

またアボリジニ社会の単位は、MISSIONの側からすると大変にとらえにくかった。居住集団、出自集団、部族などいくつもの水準での集団が存在し、基本単位とMISSIONが考えた核家族は、重要な社会的機能をもつ単位ではなかった。アボリジニは多数の小さな部族に分かれており、部族間で言語が異なり、

敵対関係にあることもしばしばあったため、多くのミッションが、複数の部族をひとつのミッションに受け入れることが困難であるという問題も抱えていた。すでに述べたクイーンズランドのミッションナリーたちは、アボリジニの定住性のなさを嘆きながらも、安定した家庭を持たせ、勤勉に労働するように導こうと努力していた[Loos 1988]。

「ミッションナリーにとっての最初の仕事は、安定した家庭という概念を教えることである」

「アボリジニはノマッドである。彼等をリザーブに定住させないことにはなにもできない。彼等

は激しい労働に慣れておらず、それまでのやり方や慣習から離れるのに非常に時間がかかる。彼

等には衣服を与えなくてはならず、毎日食事をほしがり、自分たち自身ではほとんど何もできな

い。病人や年寄りを養い、子供たちを教育し訓練するには多くの時間の忍耐が必要である。成功

はけっしてすばやくはおとずれず、約束されたものでもない」

また、アボリジニが裸族であったこと、一夫多妻であったことから、アボリジニ女性は本来淫乱であるとして、ミッションはミッション内部のアボリジニを外部との関係を持たせないことに心を砕いていた。基本的に、ミッションナリーは教化されていないアボリジニを「危険な獣性をもつ野蛮人」として見ており、アボリジニの女性を男性の暴力の奴隷とみなし、教化しなければならない「淫乱な存在」というステレオ・タイプでとらえていたのである。

こうした数々の困難な状況に加えて、オーストラリアの19世紀初期的現象である入植者社会の問題があった。ミッションにとって、入植者たちは、アボリジニに悪影響を与える存在でしかなかった。当時の入植者の大多数は、解放流刑囚などを中心としたアウトローの男性たちであった。こうした入植者とアボリジニとの接触の結果として、ミッションは梅毒と混血児の問題に悩まされ

ることになった。

このような状況を背景として、19世紀初期のミッションの多くが失敗した。この失敗はまた一方で、アボリジニは「教化できない野蛮人」であるというイメージを強化した。つまり、ミッションの活動が結果としてアボリジニのイメージを低下させるという悪循環がおこったことも重要な点である [Harris 1990]。

### (3) ラマウック・ミッションとそのジェンダー

19世紀の後半になると、ミッションの活動への世論の理解も広まっていった。成功するミッションも少数であるが現れるようになる。その一つがビクトリア州東部に設立されたラマウック・ミッションである。1860年代にキリスト教、モラビアン派が設立したミッションで、1870年代のなかばには最も成功したミッションとして有名になっていた [Attwood 1989]。

このミッションが成功した背景には、いくつかの点が考えられる。まず、この地域ではほとんどの土地がすでに入植者に取り上げられてしまっていた。ミッションが対象としたのは、それでもここに残りたいとしたアボリジニたちであり、彼らがミッションに住むことを選択したのだった。このミッションもその初期にはアボリジニをミッションに引き付けることはできなかったのだが、1860年代にはミッションはしだいに政府からアボリジニの管理母体としてその地位を認められるようになり、アボリジニの保護者としての地位を世論のなかでも確立していった。なによりも影響を持ったと思われるのは、このミッションのリーダーであり、この地域のアボリジニの主任監督官 (superintendent) であったハーゲンナウワー (Friedrich Hagenauer) 氏とその妻の、影響力の強い性格と指導力である。以下にみるように、このミッションでは明確な生活の枠組みや規則を与えた。当時、長く混乱した状況にあったこの地域にアボリジニにとって、規律のしっかりとしたミッションが避難所的な場を与えたことになった。

このミッションでは、その立地、建物の配置、柵や門など、空間計画そのものが、アボリジニの空間認識を文明化することを意図して作られたという。アボリジニに社会的序列の認識をもたせる教育を意図して作られた生活空間とは、以下のようなものだった。まず、農場と果樹園の広大な敷地を背景に、中央の小高い丘の上に、ミッションナリーたちの住む大きな家が建てられた。その右側には教会、学校、子供たちの寄宿舎、左側には学校教員の家と倉庫が配置された。そして、ミッションナリーたちの家の前には、緩やかに下る広大な中央芝生が配置されていた。この芝生の両側に、アボリジニの住む柵で一軒ずつ囲まれたコテージが、並んで建てられた。アボリジニのコテージが並ぶ地域と、ミッションナリーたちの大きな家が建てられている地域は柵で隔てられ、中央にドアが付けられていた [Attwood 1989]。そして、人々は、こうした空間のなかで、厳密に定められたタイムテーブルに従い、規則正しく、祈りと農業労働と食事を繰り返す日常を送ることを強要された。大人も子供も空間概念とともに、時間の概念も押し付けられたのである。

こうしたミッションでの暮らしのなかで、アボリジニのもつ「個人」という概念も近代化しようとしていた。たとえば、公とわたしの区分を厳格にするため、それぞれの小屋は柵で囲われ、小さな家族単位の生活が強調されたし、親族関係に依拠して自分を定位する習慣を改変する目的で、個人名を使わせるという試みも行われた。ミッションナリーたちは、特に、文明化されたキリスト教的コミュニティを作るために子供に期待をかけた。子供たちは、年長者の悪影響から遠ざけるために、寄宿舎に入れられ、カーテンで仕切られた個人の空間、個人用のベッドなどが与えられた。また、寄宿舎では厳格に男女が分けられ、運動場さえも男女別に作られていた。

時間と空間の改変とともに、支配のシステムとしての父子主義(paternalism)も厳格に適用された。ミッションナリーはアボリジニたちの親であり、正しいこととはなんであるのかを教える存在であるとし、指導者であり保護者として君臨する明確なヒエラルキーを確立した。この価値観はアボリジニに内在化され

ることになる。ラマウックではほとんどのアボリジニがハーゲンナウワー夫妻をそれぞれ、父と母として愛情を込めて慕っており、ミッションを自分たちの家庭だとしていたという。ハーゲンナウワー夫妻は、個人的に魅力的な性格、熱意、権力、経済的資源というミッションナリーの力のすべてを持っていた。それを背景として、彼らが強制した様々な概念が、アボリジニに選択的に、きわめてランダムに残存してゆくことにつながっていったのである。

ラマウック・ミッションにおいて、ミッション側が押し付けようとしたジェンダー規範は、当時のヨーロッパ人中産階級社会の価値観にもとづくものであった。男性は生産を請け負う畑仕事を割り当てられ、女性は屋内のこと、装飾的なことに関わるべきとされ、家の前庭のお花畑は女性の領分とされた。女性には、特に謙遜、質素、節制、禁欲という美德が求められ、性関係についての罪の意識、その抑制、清潔さの強調などの概念が付与された。こうしたミッションの考えるジェンダー概念の全体を、1850年代の初めに生まれ、ラマウックで長く暮らすことになったベッツィー・フラワーというアボリジニ女性の事例をアトウッドに従い、見ることにしよう[Attwood 1989]。

ベッツィーは、西オーストラリア州のアルバニーで生まれた。彼女が生まれた頃にはすでに、この地域のアボリジニたちは白人の町に住むようになっていた。1852年にこの地域にアングリカンのミッションが設立され、小学校が併設された。ベッツィーはこの学校の責任者であるミッションナリー夫婦に預けられ、学校に通い、洗礼を受け、英語名を付けられ、白人の子供と同様に育てられた。ベッツィーは、まわりのミッションナリーの期待に添う、たいへん聡明な子供で、勤勉で、本を読むのを好み、音楽を愛した。彼女は親がわりであったミッションナリーのアンを敬愛して、ミッシー (Missie) と呼び、彼女を喜ばせることを自分の喜びとした。政府の資格試験にも簡単に合格した彼女は、13歳でシドニーの学校に進み、さらに教育を受け、特に文学と音楽の分野で才能を発揮した。その後アルバニーに戻り、小学校の補助教員そして教会のオルガニストとして働くようになった。ベッツィーは、植民者側の中産階級の社会的価値観を

基礎とした自己像を持つように育ったのである。

1867年、ベッツィーは、ラマウックに教員として採用されることになった。彼女はここでハーゲンナウワー夫人の厳しい指導のもとに、家事と育児の訓練を受けた。学校では、教育者として才能を発揮し、ラマウックの重要な存在となっていた。彼女はしだいに、ハーゲンナウワー夫妻を尊敬し、慕うようになり、特にルイーザ・ハーゲンナウワーをすばらしい女性だとして深く敬愛し、母と呼んだ。そして、女性は妻であり、母であり、家庭のなかで働くということに期待するミSSIONナリーの価値観の影響によって、ベッツィーもそのような未来を夢みるようになっていった。1868年、ハーゲンナウワー氏らの勧めに従い、MISSIONの混血のアボリジニ男性、ドナルドと結婚する。二人は寄宿舎の責任者となり、熱心な仕事ぶりを見せた。

ところが、しだいに自分たちが決してある程度以上の責任を持たせてもらえないことに気付くことになる。あくまでも彼らはアボリジニであり、主任監督官としてのハーゲンナウワーが権力を握る階級制の下位に位置づけられていた。特にベッツィーは、夫がハーゲンナウワーの信頼を得てゆくのと対照的に、結婚の翌年、寮母に左遷され、仕事が退屈で面白くなく感じるようになってゆく。結婚して以来、彼女の個人的アイデンティティは、夫と一くくりに扱われるようになり、女性の仕事として、評価されない、家のなかの家事と子育てに活動を限定されるようになった。自己の欲求を満たすような仕事を与えられず、個人的な移動の自由が制限され、MISSIONが与える妻と母親という役割に、強制されていると感じるようになる。依存的な存在に限定され、過少化された自己の地位に不満を持つようになっていった。また、かつての子供の時のようにMISSIONナリーの期待に答え、彼らを喜ばせることが難しくなっていることにも気づく。その結果、彼女は自分への自信を失ない、精神的に落ち込んでいった。

こうしてベッツィーは、自分の世界に引きこもり、MISSIONナリーの命令に従わなくなる。その行動は他者に献身的であるべき女性としては、ふさわしく

ないと見られ、ハーゲンナウワーの不興をかう。一方、夫のドナルドはハーゲンナウワーの重要な片腕となっていた。その二年後、夫は未亡人のアボリジニ女性と性的関係をむすぶ。ハーゲンナウワーは、ベッツィーが間接的責任があるとして批判する。性的行動までが疑われた結果、1869年にはミッションを追われた。当時、アボリジニにとってミッションに依存せずに暮らすことは困難で、貧困に苦しみ、精神的にも追い詰められた10年間をすごした。こうした厳しい生活状況と、結婚以来絶え間なく続いた妊娠と出産そして流産の結果、彼女の身体は衰弱する。1886年に、許されてラマウックに戻り、ハーゲンナウワーとの関係も一応修復するのだが、1895年、40歳をいくらかすぎて、彼女は世を去るのである。

ベッツィー・フラワーの人生を見ると、ミッションによって押しつけられた女性イメージの強さとその矛盾が分かる。彼女の場合、白人社会の中流知識家庭の教育を受け、強い自己意識を持ち、教養ある、「文明化された」人間に育った結果、女性は家庭人たるべきこと、という当時のミッション女性の理想とする価値観を自己のものとしていた。彼女の苦悩は、彼女はアボリジニであり、アボリジニは白人より劣位であり、さらにアボリジニの女性はアボリジニ男性より劣位であるという、見えないヒエラルキーが当時の状況としてあったことを背景としている。ヒエラルキーのもっとも下位にあった一般的なアボリジニ女性には、彼女がもった自己意識は、まったく不必要なものであったのだ。つまり、ミッションがアボリジニに与えたジェンダー概念は、自分たちの白人主流社会のジェンダー概念を基礎としたものであった。彼らは気づいていなかったのかもしれないが、白人女性とアボリジニ女性にもとめられるジェンダー概念には、明白な差があったといえるだろう。ミッションの女性に期待されるジェンダー役割は、母であり、妻であり、家庭の責任者であり、自己犠牲のもとに献身的であることではあることと同時に、神の使命を担う主体として、活躍する自律性が期待されていた。ところが、アボリジニ女性に対しては、あくまでも管理されるアボリジニ、のしかも女性として家庭内での従属的な立場で生

きることのみが期待されていた。そこには明確な差があった。ベッツィーの人生には、ミッション女性との親密な関係が大きな影響を与えたことが分かる。彼女は、信頼し敬愛するミッシーやルイーズを役割目標として、白人社会で期待される女性のあり方を受け入れ、自分のものとした。そのため、かえって彼女は、アボリジニ女性としてミッションによって期待されるジェンダーを生きることが困難になってしまったのである。

#### (4) 20世紀のミッションとジェンダー

20世紀になると、ミッションはオーストラリア北部へと展開して行く。この時期、ミッションのアボリジニへの態度や施策にも変化が見られた。それまでのように救いようのない、死にゆく民族としてではなく、現存する大きな社会問題の当事者としてアボリジニを位置づけ、教育によってオーストラリア社会に同化してゆこうとする動きが顕在化したのである。こうした流れのなかでミッションをとりまく状況も大きく変化した。当初のアボリジニ政策は保護・隔離主義であったのが、1930年代には同化主義となり、しだいにミッションへの経済的援助を拡大させていった。その結果、北部では多くのミッションが設立され、アボリジニのミッションへの集住がスムーズに行われた。このような新しいミッションにおいては、どのようなジェンダー規範が与えられていったのであろうか。

ミッションは20世紀に入って、福祉的色合いを強め、食料配給などをさかんに行った。それによって多くのアボリジニがミッションに惹きつけられた。こうしたなかでアボリジニ女性はミッションの女性によって、家庭という概念を与えられ、その管理方法などに介入される一方で、配給のためミッションへの依存の程度を高めることになった。このことが一夫一婦制への移行の鍵であったとベルは指摘している。つまり、女性が生産にかかわる仕事を止め、男性に依存することによって、夫が妻を養うというキリスト教が考える夫婦関係が成立する。ここで、一夫一婦制をささえる経済関係の変化が起きたとしている。

ミッションは、重労働を背負わされているように見えた女性を解放し、文明化しようとした。そのために彼等を定住させ、近代的な家庭生活をおくらせようとした。それまでの儀礼的な親族の關係に支配されていた結婚から女性を解放するために、女性の仕事をミッションナリー女性が監督し、妻としての義務という概念を彼女らにも共有させようと努力した。それは同時に男性が世帯の中心であり、主要な稼ぎ手であるという概念を植え付けることでもあった。こうして、アボリジニ社会の男女の關係が変化し、婚姻の性質も変わってきた。狩猟採集による生活からミッションでの配給に頼る生活になることによって、夫を食べさせる妻たちから、夫に食べさせてもらう妻へという、生活基盤の經濟構造の変化も起きたとしている[Bell 1988]。

植民地で植民者側のジェンダー概念が、実際に当該社会に大きく影響を与えるようになるのは、植民する側の女性が直接にかかわるようになってからだといわれている。牧場の場合を例にとると、入植当初、アボリジニの女性は自分たちの世界を維持し、そのコントロールを自分たちで行っていた。それが失われていったのは、先に述べたように、牧場地のリースが始まり、牧場主の妻たちが、アボリジニの女性に直接接触するようになってからであるといわれる。つまりアボリジニ女性の生活は、日常の白人女性による細かい指示のもとに、はじめて変化していったのである。そして、それはミッションにおいてさらに大きく変化したことになる。アボリジニ女性は、ミッションの女性による日常的な密着した監督のもとに置かれ、その活動が制限されるようになる。その監視は、子供の世話、道德観、衛生観、家庭生活など、女性の仕事とされた家庭全般に細かく及ぶ。ラマウックのミッションでの女性のミッションナリーによる指導も教育も同様である。しかもこうした教育や指導の背景には、ミッションの女性とアボリジニ女性の間築かれた、親密で愛情に基づいた人間關係がある。そして、その人間關係が親密なものであることによってアボリジニ女性たちは、白人女性の理想とするジェンダー役割を内在化することにもなっていたのである。

### 3 エルコ島ミッション

#### (1) ミッションでの経験

これまでののべたようにわたしの調査地であるアーネムランド北東部のヨルング地域のミッション活動は特にうまくいっていたといわれる。ミッションのアボリジニへの対応も他地域、他時代とくらべて殊に親和的であった。キリスト教の受け入れもよく、成功したミッションといわれる[Berndt 1962, Dewar 1995]。しかし、アボリジニへの教育や社会生活の概念、ジェンダー概念の強制などの点から見ると、実はミッションナリーたちは、意識として19世紀的な部分をひきずっていたと言える。むしろ、調査地ではその両者の間に良好な関係ゆえに、ミッションナリーへの影響は19世紀のミッションよりも大きかったという可能性も考えられる。これが現在のアボリジニ社会のジェンダーの有り様にどのように影響しているのであろうか。

エルコ島ミッション(のちのガリウインク)は1942年、アーネムランドの北東海岸部にメソジスト派によって建設された。北東アーネムランドはヨルング(Yolngu)の人々が暮らす地域で、この地域にメソジスト派は1922年、エルコの西側の対岸にミリングンビ・ミッションを建設していた。ところが、第二次世界大戦がおきたため、当時ミッションナリーとしてミリングンビにいたシェパードソン夫妻は、数家族のアボリジニとともにエルコに移動し、ミッションを設立した。そのためアボリジニとの間には、すでにある程度の関係が成立しており、この地域では特に順調にアボリジニがミッションに集住していったといわれる[Keen 1994]。シェパードソン夫妻はエルコ島ミッションを発展させ、この地で50年間にわたって暮らした[Sheperdson 1981]。

当初、ミッション内での問題のひとつは、クラン間の戦いであった。いざこざやけが人が出る争いが頻発していたことが記録されている。このため、シェパードソンは初期の頃から積極的に、アウトステーションとよばれるブッシュ

の中の小規模な村の建設をすすめていった。これはアボリジニを集め、定住させ、教化、同化させてゆくというミッションの一般的な方針とは逆の動きと言える。寄宿舎制をとらず、儀礼を完全に禁止することもなかった。ミッションナリーはむしろ積極的にアボリジニの言語や文化を理解しようと努めたのである。これらに象徴されるように、エルコのミッションは、アボリジニ文化に対して親和的な政策をとることが多かった[Austin 1998]。

しかし、当時の記録をみると、家族や労働の概念については、ミッションナリーは、キリスト教的な価値観をアボリジニに強制していたことは確かである。とくに婚姻について、アボリジニの一夫多妻婚には否定的だった。別の章で詳述するが、この地域のもともとの結婚は、夫婦間の年齢差の大きい、一夫多妻婚であった。婚姻規則にのっとった結婚のために、若い少女と男のあいだで、ふたりを義理の母と義理の息子とするという約束がかわされる慣行があった。この慣行は一夫多妻の妻の数を保証する一方で、少女が成熟し、産んだ子供が成熟するまで時間がかかるので、夫婦間の年齢差が結果として大きくなった。シェパードソンをはじめとするミッションナリーは、特に、すでに複数の妻がいる年長の男が、若い少女を何番目かの妻として手に入れることに、不快感を示していた。シェパードソンの批判に対して、ある男性が、クラン関係上仕方のないことで、それをしなかったら死ぬしかない、と答えると、彼はそれなら、いつでも自分の鉄砲を貸してやろう、といったという話が記録されている[McKenzie 1976]。

一夫多妻を厳禁する行動はとらなかったものの、ミッションでは家族概念が一夫一婦の核家族を理想としてそれを実現しようとしていたことは、他の点からもうかがうことができる。例えば、診療所に残されていた家族台帳は、家族ごとに記載されていたのだが、それぞれが家父長、妻、その子供たち、という順に記録されていた。ここの社会では日常生活の中で基礎とはなっていない「核家族」という枠を、ミッション側があらかじめ想定していることが分かる。複数の妻がいる場合は、やはり夫の名前の下に、二番目の妻、子供たち、三番目

の妻、子供たち・・・と記載されていた。彼らの言語には、「第一夫人」「第二夫人」に当たる言葉はなく、権利の大きさももともとはかわらなかった。それがこうして台帳に記録されることによって、彼らは英語で一番目、二番目という言い方をするようになったと言われる。

ミッションは製材所を建設、アボリジニのための住居を建てた。その家の構造は二部屋または三部屋で、台所、居間つきの核家族を想定した建物であった。これも彼らが生活が核家族単位で営まれることを想定していたことをあらわしている。

また、アボリジニにそれまでになかった姓を使うように指導した。アボリジニたちは、それぞれのリネージの祖先の個人名を姓として採用した。一部の地域では、これが定着し、女性は婚姻によって、父親の姓から夫の姓にかえるというスタイルさえ定着した。このように、強圧的ではなかったものの、ミッションが当然の前提としてイメージしていたのは、核家族単位の家庭であったことは確かである。

労働については、どうであっただろうか。エルコでは働かない者には配給を与えないというモットーで、労働に応じた食料の配給を行っていた。当時を知るミッションナリーは、あのころのアボリジニは、まるで子供のようで、何も知らず、すべてを一つずつ、教えてあげなくてはならず、配給システムも労働の重要性を教えるための手段であったと語った。こうした労働にも、ミッションのイメージにもとづくジェンダーの区別があった。男性の仕事は、農園や製材所での肉体労働であり、飛行機やボートの操縦、自動車の整備/操縦、そして家の建築の仕事であり、女性は、裁縫所や食堂での仕事、そして家事手伝い、病院や学校の補助、掃除婦などであった。これは、19世紀のオーストラリアでも、また世界各地のミッションでも共通して見られることで、植民者側の労働にかかわるジェンダー概念の基本であった。

エルコ・ミッションの設立、運営に大きな役割を果たしたシェパードソン夫妻は、アボリジニ文化に親和的であり、アボリジニにも慕われていた。特に妻

のエラは、戦時中ミッションの女性が南部へ避難した時にもエルコに留まり、アボリジニ女性たちとブッシュで避難生活を送った。彼女は看護婦の資格を持ち、診療所を開設し、小学校を始めた。彼女は「ンガンディ (Ngaandi, お母さん)」と呼ばれ、深く敬愛された。シェパードソン夫妻についての愛情を込めた語りは現在でもこの町で頻繁に聞くことができる。

エルコ・ミッションは、戦後の運営が好調で、多い時には20人近くのミッションナリーが働いていたという。そのなかには既婚者も独身の女性もいた。多くのアボリジニの女性たちは、彼らの家で働き、子供の面倒を見たり、家事を手伝った経験を持つ。ただし給料は現在のように多額でなく、ほんのちよつとだったと彼女らは語る。しかし、多くの女性たちは、ミッションの女性たちと親密な友人関係を持つようになっていた。彼女らが、当時の自分が働いていたミッションの家族のことをよく覚えており、子ども一人一人の名前まで、思い出すことができるほどであることがそのことを示している。例えば、現在54歳の女性であるバンダカは、パースに住む、元ミッションナリーの女性と連絡を取り合っており、休暇にパースに遊びに行くこともある。最近亡くなった彼女の娘の葬儀には、パースから花束が届けられた。アボリジニ女性たちは皆、当時のミッションの人々を個人的によく記憶しており、非常によい思い出として語っていることに気が付く。ミッションの女性たちは、親切で、優しく、わたしたちのためを考えて生活していたのだ、と彼女らは語るのである。

エラ・シェパードソンの著作からは、当時のミッションの女性たちが抱いていた自己理想像をうかがうことができる [Shepherdson 1981]。それは、夫を信頼し、敬愛し、自分たちの努めは神の意志を果たすことであるとし、信仰深い日常を勤勉に過ごし、厳しい環境のなかでも極力居心地のよい、暖かい家庭を作ることであった。こうした献身的で、自己犠牲を伴う女性の態度は、親密になったアボリジニ女性の世界観に影響を与えずにおこなったであろう。その結果、彼女らの生活や労働観、家庭観、人間観は、アボリジニ女性の理想のイメージとなって定着していったのである。

## (2) 家庭生活にみるミッションの影響

見てきたように、ミッション主導によるアボリジニの意識変化の結果、伝統的結婚が後退していった。現在のガリウインクでは、一夫多妻婚が減少し、複数の妻をもつ場合も、その数が減少しており、年齢差も減少している。ミッションは一夫多妻を禁止はしなかったものの、一夫一婦制を奨励した。かつて一般的だった、女性出生前に男性との婚約が結ばれるという結婚の取り決めにも緩みが現れ、女性が生まれてから結婚相手を約束する形になり、それさえも今では強制力が弱まっている。一夫一婦が望ましいとする言説は今日、一般的に流布している。理想的な結婚としてアボリジニたちが語るのは、男性も女性も一夫一婦である。当事者の男女両方の合意がそろっていない結婚の約束はよくないとし、恋愛による関係がよいとする意見も若い世代を中心に多い。若い女性たちのなかには、クラン間の取り決めによって決定される結婚を忌避しつつ、自己の恋愛の相手が慣習にそう結婚相手ではないために、シングル・マザーになることを選択する者も増加している。これは、とりもなおさず、クランの婚姻への縛りが現在もまだ根強く残っていることを示している。また、二人以上の妻を持つものも現在もあり、男性が中年を過ぎてから、二人目三人目の妻をめとることは珍しくはない。しかし、このような一夫多妻婚が以前のように問題なく受け入れられるのではなく、妻同士の仲違いや、争いなどの混乱をひきおこしているのである。

このように、ミッションが押し進めた年齢差の近い、一夫一婦という婚姻の観念が、一夫多妻婚を完全に駆逐して定着したとはいいがたい。現在ガリウインクのアボリジニの人々は、聞かれればキリスト教者だとほとんど全員が答えるが、実際に熱心な信者はほんの少数である。興味深いのは、比較的若い世代でも複数の妻を持つ者がいる一方で、ミッションの時代、ミッションナリーとともに働いた、現在50才代から60才代の者のなかに一夫一婦婚を堅持する者が何例かみられる点である。かれらはミッションがいた時代に成長した人々であ

り、ミッションのイデオロギーに強く影響を受けた世代ということができる。

現在の家ごとの居住人数は、平均10人をこえる。一般的な住居のつくりは、三部屋の個室および居間と台所、という核家族を想定したものである。しかし、次章で詳しく述べるように、その単位はいわゆる核家族ではなく、その構成はかつての居住集団の構成を踏襲している。かつての集落では、夫婦と幼い子供、未婚の男たち、未婚の女と寡婦たちというまとまりでそれぞれの小屋が構成されていた。それと同じように、各部屋がそれぞれのまとまりになっているのである。そして、食事、洗濯などの日常生活は、複数の女性たちによって営まれているが、それぞれの女性の活動の領分は、その居住集団の外まで広がっていることが一般的である。つまり、居住単位は日常活動をになう集団とは必ずしも重ならないのである。若い夫婦が家を持つような場合は、父系の核家族的構成がとられる。しかし時間がたつと母方やその他の親族のつながりにより、一軒の居住単位のなかに複雑な結合がおこり、家族の機能がひとつにおさまらない拡大家族のような居住集団が増加する。夫が他の妻の家に移り住んだり、子供が母方の伯父の家に住むなど、居住集団をまたぐケースが増える。新しい動きとして、女性を中心とした居住集団の構成も注目される。これは、家の単位のまとまりが母と娘、という女性の系統の軸を中心として成りたっている居住集団で、一夫多妻婚の大家族とも、ミッションが与えようとした核家族とも異なる構成である。

家庭生活におけるジェンダー・イデオロギーをみると、ミッションの影響によると考えられるものには、どのようなものがあるのだろうか。まず、目立つのは家内の仕事は全て女性がおこなうことである。男性が行う料理は、屋外での、カンガルーやウミガメなどのブッシュの食べ物についての料理に限られている。屋内やキッチンでレンジを使って、店で購入した食材の料理は、女性のみが行う。男性は、いわゆる白人の「料理」を知らず、できるはずはないと了解されている。

掃除も全く同様である。儀礼場を整えるための広場の掃除や、屋外の農場の

手入れなどは男性も行うが、家屋内のほうきや洗剤とモップを使って掃除するのは、女性だけである。屋内は決して清潔に整頓されているとは言えないが、時に、全く何の理由もなく、夜中であっても、家中を掃き、モップをかけてゆくことすらある。

洗濯、縫い物なども、男性が行うことはない。シーツや服を買い、それを維持する役割は女性のものである。現在は洗濯機を使うが、女性は毎日のように大量の夫や子供たち全員の服を洗い、ロープに干し、それを畳んで収納する。自分の服装にも大変気を使い、仕事に出かける朝などはシャワーのあと、アイロンをかけた服を身に着ける。このように、屋内で仕事は、すべて女性の仕事とされている。

ここにはまた、活動面における単なる男女分業だけでなく、家庭内において「世話をする」女性／「かしづかれる」男性というイメージが定着していることがわかる。このように食事を含めた日常の世話はすべて女性が行い、男性はただ座っているだけである。女性であるわたしには、しばしば、時には夜中さえも男性成員のために料理を依頼されることがある。こうした状況を見て、白人たちは、アボリジニ社会では女は奴隷のように使われている、とコメントしがちである。しかし、実際には、アボリジニの男性の家族内での発言力は弱く、専制的でもない。日常生活における様々なことからの決定は女性によって行われる場面の方が、むしろ多いのである。

現代の家屋は、アボリジニにとってなじみの薄いものであることは明らかである。1985年、最初に調査に訪れた頃、ほとんどの家はひどい状態であった。水道や台所、トイレが機能していないのは当たり前で、窓はこわれ、ドアのベニヤが剥がされ、壁には落書きがあり、まるで廃虚のような家が多かった。その後、政府の援助によって多くの家が新築されたが、それもかつてほどではないものの、急速に荒れてゆくのを見てきた。彼らにとって定住する家とその管理の概念は、受け入れられていないようだと思い知らされる。

このようにアボリジニは、家を清潔に保ち、居心地よくすることに決してた

けているとはいえない。ところが、庭づくりだけは熱心に行う。芝生を植え、花を植えるという、ほとんどみかけを飾るための庭づくりである。それは、家の中に食料がろくにない、室内も荒れ放題のアボリジニの家にとっては大変アンバランスに見える行為である。離島のエルコでは、高額の種や苗を取り寄せなくてはならない。おまけに、熱心に芝生や花を植えても、乾季のこの地では、こまめに手入れをしなくてはすぐに枯れてしまうのにもかかわらず、である。

それと類似したものに、カーテンがある。美しい鮮やかな色合いを好む彼らは、大きな花柄の布を購入し、ミッションの教育によって身につけているミッションの技術をつかって、カーテンを縫い、窓にかける。いかに家がひどい状態でも、ガラスの割れた窓にカーテンだけはかけられる。しかもその際には必ず表地を外側に向けてかける。一度、わたしが部屋からは裏地しか見えないカーテンに、かけかたを間違っているのではないかと聞いたところ、彼らは何を言っているのか分からない、という顔をし、「外からきれいに見えなくては意味がない」と答えた。この庭づくりとカーテンは、清潔さ、整頓の程度、食事の内容など彼らの生活のその他の要素と比べて、わたしたちの目にバランスを欠き、異様に映る。

移動を価値の中心としたアボリジニの人々にとっての家屋の意味を、この二つの事象は象徴的に現している。季節がよければ外で寝て、外で過ごすことを好む彼らにとって家は居住の場所というよりも、物を置いておくところである。自分たちの家を飾るのは外に対してのことで、かれらが常に外部を意識していることを示している。新しい家が与えられた時、その責任者は女性とされた。そのためアボリジニの女性たちは現在も家の仕事を自分たちのもの、としている。しかし、その実践のなかで特にカーテンと庭づくりという象徴的な二つのアンバランスな行為は、移動民という彼らの背景を示していると言えそうである。

婚姻や居住単位のありようからは、現代のアボリジニには、一夫一婦制の核家族的な家庭という、ミッションの時代に与えられた概念としての核家族的なイ

メージが、共有されていることがうかがわれる。それは決して強固なイデオロギーではなく、現実の生活の必要と利便性によって、容易に変わりうるものである。それゆえ、現実には親族関係の多様なつながりによって、核家族を越えてより大きな日常生活単位が構成され、それが生活実践の場になっているといえるだろう。ミッションがなくなった現在、彼らの居住集団の構成や婚姻はクランの論理によって、ふたたび親族関係を中心としたものに移ってきた。そのなかで、これまでになかった女性同士のつながりを中心とした新しい形の居住集団も現れていることはすでに指摘した通りである。

しかし、彼女らの間には、核家族的な生活を理想とするイメージは共有されていることが、家庭内の行動や飾りからみとれる。家庭のなかの飾り方や整え方のイメージは、現実の生活との整合性から外れてはいるが、選択による彼女たち自身の自発的な営みによって維持されている。それは、アボリジニの女性たちの理想的な家庭イメージの表出であり、主体的な実践といえるものである。

### (3) 労働に見るミッションの影響

現在のガリウインクでは、ある一定の雇用機会がある。表1のように、性別によって就いている仕事に違いが見られ、それにはミッション時代のジェンダー概念が反映されていることがわかる。つまり、男性は飛行機や車などを使ったり、機械や重機にかかわる仕事、農場労働、政治的な仕事に就くのに対して、女性は掃除や補助の仕事が多いのである。しかし、ミッションの時代と大きく異なるのは女性の活躍である。表1でもわかるとおり、被雇用者の数は女性の方が多く、しかも安定雇用の職の者の数は女性の方が圧倒的に多い。とくに、教員、看護婦、経理など高等資格を必要とする職の多くが女性によって占められていることは注目してよいだろう。

女性の活躍の背景には様々な理由があるが、こうした旧植民地社会における女性の社会適応の相対的なよさは、オーストラリア以外でもしばしば報告され

ている[Blythe & McGuire 1996]。もちろん、ミッションは男は労働、女は家庭というジェンダー役割を与えてきたのであって、教育においても女性を社会的に有効な労働力にしようとする意図はなかった。しかし、実際には女性が教育の成果をもとに、社会に参加していった事例が多い。たとえば、カナダのカリエール・インディアンの事例では、ミッションによるジェンダー・イデオロギーを強制するような教育のなかでも、女性が女性ミッションナリーと友好的関係を結ぶことによって、罰をのがれたり、日常を過ごしやすくするなど、ソフト・レジスタンス[松田 1999]とよぶべき関係をつくり、結果として男子よりも手厚い学校教育を受け、そおれがその後の社会的進出に繋がったということが報告されている[Fiske 1996]。

ガリウインクでも、学校で成功をおさめている学生には女性が多い[Fidock 1982]。男子は儀礼に対する責任や親族関係のしがらみのなかに年齢とともにまきこまれ、その多くが小学校高学年になると学校へ行かなくなってしまう。この傾向は、ミッションの時代にはさらに強かったことが想像される。さらに、男性にとっての大きな問題は、教員が女性であることである。ミッションの時代、最初に小学校を始めたのはシェパードソン夫人であった。それ以降も現在に至るまで、学校の教員は圧倒的に女性が多い。こうした環境のなかで女性は、学校教育に順調に適応していった。ところがアボリジニ男性は、成人儀礼を終えて男性の世界に入る十歳ぐらいになると、女性の指示のもとに行動することはありえない。そのため女性が主導する教育に反抗的になり、学校教育のラインからはずれ、新しい技術や態度を習得できないという図式ができあがった。

現在、学校と診療所、そして託児所の長になっているのはすべてアボリジニ女性である。彼女たちはミッションで学んだ世代であり、ミッションのサポートのもとに高等教育を受けた女性たちの中でもいわばエリートたちである。彼女ら以外にも小学校の先生や准看護婦になっている女性が多い。彼女らは、学校教育に適応した結果、ミッションで身につけた識字能力や計算力を身につけた。そして、ミッションの女性たちが働いていた分野で職に就いた。彼女たち

は、ミッションからジェンダー役割を学び、それを踏襲しているといえる。しかし、それは、ミッションが意図したジェンダー役割である家庭内の女性という範疇からは、はみ出たものであったといえるだろう。

#### 4 アボリジニが取り入れたジェンダー・イデオロギー

この節では、植民地時代のミッションの活動がどのようなジェンダー・イデオロギーをアボリジニ社会に付与したか、それはどのように受け入れられ、社会に影響を与えたのかを検討してきた。ミッションとアボリジニとの関係性は入植の時期によって異なっていた。まず第一の時期は、植民地初期のミッション活動である。オーストラリアにおける初期のミッション活動は、保護主義的なものであったが、アボリジニに対する理解のなさ、政府による経済的援助の欠如と差別的見方、アボリジニたちの遊動志向などによって、その多くが失敗に終わった。

第二の時期は、19世紀後半以降からである。第一期に比べてこの頃は、同化主義的な方針を政府が採るようになったために、ミッションは政府からの経済的援助を得て、福祉の役割をにない、かくして成功するミッションも現れた。本論で見てきたように、19世紀後半のミッションは、アボリジニと親和的な関係を持ち、かつ圧倒的なコントロールを発揮するという関係を築いた。そしてその関係の上に、植民地時代の白人のジェンダー規範がアボリジニに強制された。しかし、そこで白人女性とアボリジニ女性に期待されるジェンダー像には、暗黙の、しかし、はっきりとした違いがあった。その結果、ベッツィーのエピソードに見られるように、人間として破綻してしまうという構図があった。

第三番目は20世紀のミッション活動である。アボリジニ文化に親和的なミッションナリーが増加してゆくなかで、アボリジニはミッションを積極的に利用するようになった。このような変化は、オーストラリアという国自体の変化を背景として起こったものであった。1901年、連邦が成立し、「オーストラリア」

という意識が共有される一方、国外からのアボリジニに対する扱いへの批判も増加し、人々の目はフロンティアである北へと向かった。その結果、キリスト教各宗派のミッションは、北部での活動を増大していった。オーストラリアのミッションはこの三番目の時期である20世紀に、大きく変貌したといえる。

アーネムランドのエルコ島で展開されたミッション活動は、すぐれて20世紀的なものであるといえる。この章の第一節で明らかにしたように、オーストラリアにおける一般的な入植イメージに比べて、この地域の入植経験は特殊である。この地域のミッションは、福祉的、親和的に、順調に運営されていた。つまり、暴力的な入植によって一方的に文化をはく奪されたアボリジニという、イメージだけでは捉えられない歴史があったのである。

「19世紀初頭ミッション」は、多くが破綻し、「19世紀後半的ミッション」は、政府や世論の後ろ盾を得て、多くが成功をおさめたことは、ラマウックに象徴されるとおりである。しかし、成功を基礎としてジェンダー概念を含めた植民者側の価値観が強圧的に与えられ、それが破綻を生んだ。そして「20世紀的ミッション」においては、アボリジニ文化に親和的なミッションナリーとアボリジニとの密接な関係を通して、ミッションナリーの価値観がアボリジニ社会に付与されていったのである。

このように、三つの時代的な関係性の違いはあるものの、ミッションによってジェンダー概念がいかにもたらされたかという視点から検討し直してみると、20世紀のミッション活動は決して19世紀と不連続ではないということが指摘できる。19世紀においても、20世紀においても、そしてオーストラリア国外においても、時代や地域、宗派による若干の違いはあっても、キリスト教ミッションがおしなべて強調してきたことは定住し、男性が外で労働し稼ぎ手となり主導し、女性は家庭内を整えて貞淑に子育てを行うという、一夫一婦制の家庭生活であった。20世紀のミッションにおいては、こうしたミッション・イデオロギーと呼べるような家庭についてのイデオロギーは、必ずしも正式の

教育で教えられることはなく、強制の形をとることもなかったが、押しつけられなかっただけで、ミッショナリー自身の意識のなかでは強く保持され「正しいもの」として内在していた。エルコのミッションにおいても、ミッショナリーたちの美德だったし、アボリジニに影響を与えていた。そして、ミッショナリーと友好的に継続的な関係を維持していたアボリジニは、その友好な関係ゆえに、その影響を強く受けることになった。

20世紀的な特徴が顕著なエルコのミッションにおいては、友好的な関係を基礎として、キリスト教的概念、近代のイメージがアボリジニに受け入れられた[McIntosh 1999]。確かに、核家族や女性の役割についての概念は、行動を規制するような強い論理として押しつけられることはなかった。しかし、ミッションの時代を直接に経験した世代が一夫一婦制を堅持していることにもあらわれているように、ミッション運営が順調であった当時は、核家族のイデオロギーはある程度受容され、維持されていたと考えてよいだろう。現在のガリウイंकでは、一夫一婦制を含めた核家族イデオロギーを、当該社会の主流としては見いだすことができず、現在も婚姻規則をはじめとする親族関係にもとづくクランのイデオロギーが彼らの行動の拠り所となっている。このことは、ミッションが去り、その直接的影響がなくなり、後ろ楯がなくなった時、イデオロギーの実践はアボリジニ自身の選択にまかされたわけだが、彼らはミッション・イデオロギーをそのまま選択することはなかった。核家族イデオロギーはそれほどまでには、アボリジニたちに内在化されてはいなかったといえるだろう。

しかし、イデオロギーと呼ぶことはできないものの、彼らのなかに、安定した暖かな、男性主導の一夫一婦制の核家族、美しく整頓され、飾り付けられた家、花にあふれる庭などの姿が、理想として現在も共有されていることはうかがわれる。そのもっとも象徴的な表れが、乱雑した家の庭で繰り返される芝生と花の苗植えであり、バランスの悪いカーテンであった。

アボリジニ女性は、付与されたジェンダー役割に従い、家庭での役割を担っ

てきた。ミッションにおいて、白人女性とアボリジニ女性は友好関係を築いた。女性同士の友好関係の親密さは、男性同士のものと比して、その接触の程度が密であることは、植民地状況に限らず、しばしば指摘されるところである。共有される事柄は、家屋内の整え方、飾り方、子どもの扱い、着衣、身体の手入れなど、細かな雑事を含むあくまで日常的で、微細で、具体的なわたしの事柄である。こうした関係のなかで、ミッションの女性たちは、アボリジニ女性が理想とする家庭像に影響を与えた。エルコにおいて、ミッションの女性たちは、自らの日常生活を通じて、アボリジニの女性が共有することになった家庭像を示した。現在のアボリジニの婚姻や家族、住居の状況などに見られる日常性は、クランの論理を中心とした日常性から、ミッションという植民地的状況に置かれ、その影響を経験した後、権威が失われ脱コンテクスト化したのちの姿である。アボリジニの女性たちはミッションによってそれまでの日常を見直す契機を与えられた。しかし、今日も保持し続けている日常生活に関わる実践は決して、ミッションが意図したそのままではなく、選択的なものである。彼女らの選択は一見ランダムに、ミッションナリーの女性たちとの交流の結果として行われたものである。

アボリジニ女性の労働市場への展開にも、ミッションの意図からはみだした女性たちの選択の結果が見られる。ミッション女性との関係によって、女性が学校教育に適応し、結果として女性たちが労働市場に有利な技術を得ることになったことは先に指摘した通りである。また、アボリジニの場合、女性の採集活動が、男性の狩猟の投機的な様相と相反する地道な労働観にもとづいていたことも重要であると考えられる。そのことによって、賃金労働という地道な繰り返しの多い仕事に適応することが容易であったといえる。ミッションの白人女性の労働観が、能動的で、着実に、奉仕の精神に基づく、地道な営みというものであったことの意味も大きいだろう。彼女らは、居心地のよい家を整えるだけではなく、社会的な使命をにない、能動的に働く存在であった。アボリジニの女性たちは、ミッションの女性たちとの親密な関係を通じて彼女らのジェ

ンダー概念を理想として受け取った。そのなかには、ミッションの女性の自律的な生き方も含まれていた。つまり、ミッションの女性が示していたジェンダー像は、ただ受動的な家内労働のみを行う女性というものではなかった。そして、白人女性たちとの全体的なかかわりを体験した20世紀のアボリジニの女性は、ミッションナリー女性の姿を自己の理想像としていった。しかし、そうすることが、19世紀のベッツイーのような破綻をもたらすこともなく、ミッションの意図せざる結果として、アボリジニ女性たちは比較的スムーズに社会進出を果たすことになったといえる。

アボリジニ女性は、ミッションの与えた近代という枠組みを自らのものとした。その後ミッションは彼女らのもとから去った。そして現在、ミッションの権威からも、白人／アボリジニ／女性という階層性からも自由になったアボリジニの女性たちがいる。彼女たちは、みずからのミッション経験を通じて、家や労働にかかわるジェンダー規範のなかから、きわめて選択的に特定の要素を受け入れ、日常生活のなかで実践としている。これはミッションの白人女性との間での、わたし的な事柄も含んだ密接な接触の結果であり、それゆえに微細な経験のなかから得た理想を彼女らは選択的に実践しているといえる。その意味でアボリジニ社会が経験したジェンダー規範の影響は植民地的ななかでもミッション的と特筆できる。現在のガリウインクのアボリジニ女性たちの実践の一見ちぐはぐな様態は、ポスト・ミッションナリー的な現在なのであり、彼女らのこまかな具体的な記憶にもとづいた、現在の生活世界に関わる主体的な選択の結果なのである。

# Christian ideals and gender

## 1 Women and Modernization

Most anthropologists have combed out research in areas that have experienced colonization. In a narrow sense colonization refers to the domination imposed on various areas of the world by the Western Powers and Japan from the latter half of 19th century to the middle of 20th century. But in a wider sense, it continues even today. Colonization as a part of a capitalist project has introduced modernization and the cash economy to many societies. In those records, subjects have been predominantly men. It is partly because the people colonized are mostly men, such as explorers, police officers, administrators dorovers, and army troops.

Especially in Australia which started its white history as a penal settlement, this tendency is evident. The sex ratio of early Australia was extremely disproportionate. Another uniqueness of Australian experience concerning colonization was the lack of the exercise of military power. It is a common procedure elsewhere prior to colonization, but especially in the Australian north in 20th century, the main subject of the colonization was Christian missionaries.

When you focused on experiences of the mission, you will find the women as an important subject of colonization. Missionaries tried to change the life of Aboriginal people and give them the gospel of the god. Compare to their colonizing subjects, missionaries were unique as they reside among the aboriginal populations as a family, or as an community who share the common aim of gospel of the indigenous people. Among these, there were white women, female missionaries and wives of missionaries. Before them, there were women among aboriginal people such as the wives of homestead owners. But women in the mission were quite different from them because they had a clear aim, and for that purpose, they dealt with aboriginal women on the daily bases and intimately. The mission women educated aboriginal women about the

detailed house works such as cooking, washing, cleaning, child-rearing, and those were done on the friendly relationships. Upon these intimate relationships, missionaries' notion of gender also influenced Aboriginal people. In this paper, I will focus on colonization and missionarization influenced women, their role, status, and how missionaries' ideas about gender influenced and changed women's role in society.

The earlier studies on the effects on women of colonization can be classified into two opposing views [Brettell & Sargemt 1997, Blythe & McGuire 1996]. One view sees colonization as improving women's status [Tilly & Scott 1978]. Proponents of this view argue that through the accompanying process of modernization, women gain access to the labor market, which improve their economic and social situation of modernization. Previously such women were seen as subordinated to their menfolk and exploited by them. The other is view sees colonization as down grading women's status [Leacok 1981, Ackerman 1987]. Proponents of this view agree that modernization introduces a division between public and domestic and that women are integrated into the wider economy as domestic consumers rather than as produces and thus their status is lowered. They argue that before colonization women were the important as those identified with good production, and gender relationships were more equal. With modernization male domination is introduced and women are subordinated and marginalized, especially in the economic and political decision making process [James 1996, Wolf 1996].

In Australian Aboriginal studies, similar two views are found. Most studies sees women as subordinate to men. Men is the central figure in the society, and exploit them. The exclusion of women from the myth and ceremony sopeher, and custom of polygamy symbolizes the lower status of woman. On the other hand, there are views see women as autonomous subjects. These proponents argue that women have important role in their spiritual world, such as ceremony, have value their production role. And they say that because of the colonization and modern economy, womens status has lowered[Bell 1988].

Without doubt, western notions of gender roles were often thrust on to the people of colonized societies[Brettell & Sargetn 1997]. These were enforced by the activities of Christian missions. As a result changes are found in those societies, but it is a too simple analysis to argue that the status of women is either improved or lowered, rather it has been changed in complex ways. The viewers of "women's status has improved" sees colonization as the liberation, but the things are not that simple. For example, there are many cases of women included as the lower status among the new power structure as a result of the participation in the labour market. At the same time, the viewers of "women's status has lowered" omitted to see the women's reactions.

The modernization which was brought by missions has changed the Aboriginal society, and the women's role and status in the society changed accordingly. It is true that women have more access to the labour market by modernization, and women to exercise more autonomy. Aboriginal women had been imposed the gender notion of the missionaries. It includes the detailed everyday matters upon the intimate relationships between mission women and the aboriginal women. This is the most unique part of colonization by the missions. Aboriginal women were not only the passive subject of the mission, but react flexibly and obtained its subjectivity. As a result, we can see the difference of the modern exercise of gender in aboriginal society and that of imposed onto them. I will seek and demonstrate this through an analysis of the impact of missionaries of Australia.

## 2 Gender practices in north Australia

### 1) Modern situation

The researched area is the northeast Arnhem Land, where Methodist church established Elcho mission in 1942. The Aboriginal group, Yolngu, occupies this area. Methodist church had started their missionary in the area from 1930s. Elcho mission was the originally a refuge camp of Milingimbi mission. During the World War II, airforce base was built there, so they moved to Elcho. Because of the history, the relationship between missionaries and Aborigines are already been set up to some extent.

Besides that, this area is known that people are migrated to mission quite smoothly and quickly [Keen 1994]. How the gender concept of the missionaries effect modern Aboriginal people there ?

The biggest problem of the mission in the early days is the harsh relationships between the local groups. Many quarrels are recorded. In a very early stage, a missionary in Elcho started to plan to build small villages (called outstations) where people can live in a small number in the local group land, which is similar to their traditional residential pattern. This mission where I conveyed my research has developed to be Galiwinku Township populated about 1000 with full town facilities. Most of the Aboriginal people in the area now keep a house in the town and have a place in one of the outstation at the same time. It symbolizes the missionary's understanding attitude to Aboriginal people as I pointed out elsewhere [Kubota 1999]. Generally saying, missionaries in Elcho and Yolngu area showed affinity to Aboriginal culture. Although there are some rejection of Aboriginal culture such as polygamy and secret ceremonies, but compare to other areas, relatively saying,

the domestic labor, and to produce clean and comfortable domestic life where baptized children will be reared to be good Christian; ideal holy family.

Second is labor. Missionaries see labor as agricultural labor, which is seen as the men's job. Men are expected to be a breadwinner. Male dominance or male centrism any forced policy to them, such as dormitory system, prohibition of traditional rituals or hunting activities. On the contrary, many of the missionaries are enthusiastic about learning the Aboriginal culture and language to understand them.

Though, when you analyze the records concerning the notion of family and work, you will be realized that missionaries were imposing Christian ideology onto Aboriginal people even if unconsciously. For example, the exceptional opposing attitudes to Yolngu marriage system are recorded. The original marriage system in the area is known as polygamy with many wives, and the age difference between the couple is big. It was a common practice to bestow a young girl to a man as his future mother in

law. This arrangement guaranteed a man of his proper wives in the context of local marriage rule. Besides, as he will have a proper right to obtain all the female children of the bestowed women as wives, this system secure a polygamous marriage. As the promise is made when the girl is very young and the man is in his adulthood, the actual marriage end up to be the one between young woman and old men [Kubota 1997]. When missionaries saw the old men who already have several wives to acquire a very young girl as next wife, they showed a strong resentment. On the missionaries' objection, one Aboriginal man replied saying that it cannot be helped in the relationships with other local groups, if he does not acquire new wives, he will have to kill himself. Missionary replied to him "you can come to my place anytime to borrow a gun that is in my drawers".

The missionaries of Elcho did not prohibit polygamy, but it is clear from the various sources that they see the monogamous nuclear family as the ideal family. For example, the family ledger started from the mission days has stored in the health center, which are recorded according to the individual nuclear units. Name and birth date of the family head as a father, then his wife, and her children are record chronologically. It shows that the mission foresee the clear outline of family which is not so clear in actual Aboriginal society. Another example is a housing design. There was a saw milling factory and timber plantation in Elcho, and they built houses using local timber. They built houses for Yolngu as well as for mission staff. But the ones for Aborigines are two or three room's houses, which show that nuclear family size, were supposed.

How about the labor? They used to give rations according to their work. If they are idle, rations won't be given. A missionary who remembers those days told me "Aboriginal people in those days were like small children who do not know anything. They are to be taught every single step one by one. The system of rations was meant to teach them the importance of consistent labor."

The labor and employment in the mission showed clear distinction by sex which is base upon the missionaries' image of gender. Men are employed in the garden, the sawmill, as drivers of boat and car, for maintenance of machines, and for construction and etc. Women on the other hand, are employed in sawing factory and dining room, as the

domestic servant in the missionaries' houses, as nurse-aides or teacher-aides. These practices are universal in worldwide as we have seen, and also common in 19th century, and result in fixing the rather classical image of gender roles. Upon that, missionaries, even unconsciously, have expected Aborigines to be obedient manual laborers or house servants only, in the name of assimilation.

One of the characteristics of the 20th century mission in Australia is the increased participation of women that is clearly shown in the above three cases. With the existence of women, Aboriginal women's daily activities came to be placed under the direct supervision of those women. Aboriginal women's movements and activities are restricted, their supervision covers whole family matter which is regarded as the women's job, such as a way of domestic life, child care, a sense of morality, cleanness etc.

The other characteristic of this period is that welfare function of the mission. Missions are supported by the government to assimilate Aborigines. Financial support made mission possible to give stable ration to Aborigines, to start various new projects at the mission, which is attractive for Aborigines. By the ration, in many missions, women became free from gathering activities, but on the other hand, women is now

## 2) The remaining influence of the mission in Elcho

As a result of the ideal image of marriage provided by mission, today in Elcho, the number of polygamous marriages declined. And even when they acquire plural wives, the numbers of them are declined. Also, the age differences of the couple are become shorter. As I mentioned earlier, mission did not prohibit polygamy, but they urge monogamy. As a result of that, the discourse that monogamous marriage is desirable is widely shared by both men and women generally. The once common practice of bestowal of mother in law has ceased and changed into the promise of marriage between future husband and wife, and even this arrangement is getting to lose its binding force. All these changes end in the decrease in number of wives and age difference. It is interesting to point out that whereas some of the younger generation get into the polygamous marriage, distinguished number of couples in their 50s or 60s,

who were active workers in the mission days, remain in monogamous relationships.

Now in Elcho, average number of the people in one household is about 10. The composition of each household is not the nuclear family. Daily activities such as cooking, eating, washing are done by the units, which does not overlap with the actual household. On the one hand, some household can be divided into several units; on the other hand, those units extend to other households. In other words, it is more common actual household is not the conclude body of daily activities. You will never see communal dinnertime by the households or happy family relaxing time. The image of nuclear family does not fit to this area.

As shown in Table 2, in the town of Elcho in 1996, there are 18 households, which has male head out of 32 household. Nearly 80 percent of them are nuclear family. The households with female head tend to be extended family with matrilineal dependents. They can be assumed that each started off with nuclear family gradually added new members, and upon death or move of the male head, it turned out to be extended form of household.

In outstations, similar patterns can be seen. Although available data is about only two cases, Case A is established in 1970s and B in 1990s. It is clear that Case B is formed according to the patrilineal ideology, whereas it is difficult to find the nuclear family in Case A, and matrilineal connection is very strong.

Both households and outstations were structured according to the nuclear family group image, which was imposed by the mission at the beginning. But after some time, it is assumed that the other ideology such as matriline or other complex relationships are came in, and the style of the each household or outstations are more similar to the extended big family.

In other words, the notion of nuclear family forced upon them during the mission day is barely accepted and shared as the image. But it is not the strong ideology but an image so that the actual daily behavior can be flexibly changed according to the need and benefit of daily life. Sometimes, for example, they form daily groupings beyond the nuclear family size through matrilineal kinship relationships.

The Missionary's ideal image of the nuclear family lead by male head cast a shadow on their everyday life today, as their images of domesticity. For example, in their daily life, women do all the domestic jobs. Cooking of most of the game animals are done by men in outside, but cooking of purchased market foodstuff in the kitchen is exclusively women's job. As a woman I am often asked to cook in the kitchen especially for men. Cleaning of the rooms of the house is also regarded as women's job. Although men do clean up the ceremonial ground or garden, blooming and mopping using detergent is never done by men. Women regards it is their responsibility to keep the house clean. The house I stay at Elcho is not necessarily very clean, and the people are not so enthusiastic about cleaning as others clean clean. It often happens that, all in sudden, without reasons, sometimes even in the middle of night, one of the female member of the family abruptly started to mop the whole house. Besides these, washing, sawing is also exclusively women's job. These are not only the division of labor by sex, but upon on that, the idea of `men to be served` is now widely shared.

## 2 Activities of the Mission - in general-

The overview of the activities of the mission against the indigenous people under the colonization shows us that there were the policies of management, which shared by most of the missionaries. Which are; to sedentarize them, to teach the value of labor (agriculture), to improve the women's status, and to relief their spirits and bodies under the Christian doctrine. What kind of concrete activities did those missions applied?

First, they put an emphasis on family life. Family life is the universal premise, which is the nuclear family based on monogamous marriage. Women were expected to do it as their premise [Fiske 1996, Grimshaw 1997]. Division of labor which men work in public sphere as breadwinner, women work in domestic sphere, is emphasized. Education in the mission reflects this idea of sex role [Grimshaw 1997]. Even when women are employed, they are allocated to the housemaid or sewing factory.

Third, has strong connection to the points first and second, is the virtue of woman. Women of the mission and wife of the missionaries symbolized true womanhood as piety, purity, submissiveness, and domesticity, and put an strong emphasis on them [Fiske 1996, Grimshaw 1997]. For example in Hawaii in 19th century, wives of missionaries tried to force Hawaiian women their internalized idea of modesty which is; sexual purity, not to be show the body in public, not to go out at night, to be submissive and etc. These are the kind of Victorian virtue of womanhood, which were shared by the wives of the missionaries in those days that again emphasize the domestic role of women.

### 3 Mission in 19th century in Australia

In Australia, most of the missions in 19th century are regarded as failure. Many mission stations are closed or abandoned halfway. The failure of the missions produced the vicious circle to enforce the general image of Aborigines in Australia in those days that the Aborigines are too savage to civilize. The failure of the mission can be attributed to these following reasons. First, they have scant financial support from the government. Second, missionaries as well as general public see the Aborigines as 'backward savage people' from the evolutionist point of view, and regard them as the people who cannot conceive the civilized. Third, Aborigines are nomads and difficult to settle them down. Their basic component of the daily life is very different from the general idea of the

western family. Forth, there are many hostile relationships between aboriginal tribes. It was often the case that when different tribe comes into one mission conflict will happen and one of the tribe ends up leaving the mission. Which makes it difficult to keep the stable members.

The last, the existence of settlers. In 19th century, the Australian white society was colonial situation, which characterized by the predominant rough male members. As a result, there are many mix dissent aboriginal children and Syphilis was spread. Both of them are difficult problem for missionaries. The first and second period of the history of Australian mission (Table 1) shows that in 19th century, basic attitude of mission was that they see aboriginal people as the dying race, and let them to die as Christian.

dependent on mission ration.

In the 20th century mission, Aboriginal women were forced the notion of family by mission women, placed under their superintend. At the same time, they became dependent on mission. Bell points out that these two are the key factors for the shift to monogamous marriage [Bell 1988]. According to her, ideal Christian marriage, which husband support wife and wife depend on husband, became reality by this economical shift.

Whereas the central aim of the mission in 19th century was to rescue the soul and body of Savage Aborigines, that of 20th century was placed on the welfare faction. Especially, they placed an emphasis on the liberation and civilization of women who seems to be exploited and forced to have heavy burden by their menfolks. For that purpose, missionaries tried to sedentarize them, and nature of marriage. The change form nomadic gathering life to the sedentary life at the mission depending on ration, meant that the shift of the basic economical structure for the women, that is from one of wives who supported husband, to the wife dependant on husband. let them to lead a modernized family life. To emancipate them from the marriage that is controlled by the savage ritual relationships, Aboriginal women's work is supervised and effort was made to let them to share the common notion of the obligation as wives. It was,

at the same time, to impress the idea that the man is the center of the family. Thus, gender relationships in Aboriginal society is altered, and so as the

#### 4 Elcho Mission

##### 1) Experience of the mission

Methodist church established Elcho mission in 1942 at the very top of the continent. The Aboriginal tribe Yolngu occupies this northeastern Arnhem Land area. Methodist church h started their missionary in the area from 1930s. Elcho mission was the originally a refuge camp of Milingimbi mission where airforce base was built during the war. So, the relationship between missionaries and Aborigines are already been involved to some extent. Besides that, this area is known that people are migrated to mission quite smoothly and quickly [Keen 1994].

The biggest problem of the mission is the harsh relationships between the local groups. Many quarrels are recorded. In a very early stage, a missionary in Elcho started to plan to build small villages (called outstation) where people can live in a small number in the local group land, which is similar to their traditional residential pattern. This mission where I conveyed my research has developed to be Galiwinku Township populated about 1000 with full town facilities. Most of the Aboriginal people in the area now keep a house in the town and have a place in one of the outstation at the same time. It symbolizes the missionary's understanding attitude to Aboriginal people as I pointed out elsewhere [Kubota 1999]. Generally saying, missionaries in Elcho and Yolngu area showed clear affinity to Aboriginal culture and did not put he domestic labor, and to produce clean and comfortable domestic life where baptized children will be reared to be good Christian; ideal holy family.

Second is labor. Missionaries see labor as agricultural labor, which is seen as the men's job. Men are expected to be a breadwinner. Male dominance or male centrism any forced policy to them, such as dormitory system, prohibition of traditional rituals or hunting activities. On the contrary, many of the missionaries are enthusiastic about learning the Aboriginal culture and language to understand them.

Though, when you analyze the records concerning the notion of family and work, you will be realized that missionaries were imposing Christian ideology onto Aboriginal people even if unconsciously. For example, the exceptional opposing attitudes to Yolngu marriage system are recorded. The original marriage system in the area is known as polygamy with many wives, and the age difference between the couple is big. It was a common practice to bestow a young girl to a man as his future mother in law. This arrangement guaranteed a man of his proper wives in the context of local marriage rule. Besides, as he will have a proper right to obtain all the female children of the bestowed women as wives, this system secure a polygamous marriage. As the promise is made when the girl is very young and the man is in his adulthood, the actual marriage end up to be the one between young woman and old men [Kubota 1997]. When missionaries saw the old men who already have several wives to acquire a very young girl as next wife, they showed a strong resentment. On the missionaries' objection, one Aboriginal man replied saying that it cannot be helped in the relationships with other local groups, if he does not acquire new wives, he will have to kill himself. Missionary replied to him "you can come to my place anytime to borrow a gun that is in my drawers".

The missionaries of Elcho did not prohibit polygamy, but it is clear from the various sources that they see the monogamous nuclear family as the ideal family. For example, the family ledger started from the mission days has stored in the health center, which are recorded according to the individual nuclear units. Name and birth date of the family head as a father, then his wife, and her children are record chronologically. It shows that the mission foresee the clear outline of family which is not so clear in actual Aboriginal society. Another example is a housing design. There was a saw milling factory and timber plantation in Elcho, and they built houses using local timber. They built houses for Yolngu as well as for mission staff. But the ones for Aborigines are two or three room's houses, which show that nuclear family size, were supposed.

How about the labor? They used to give rations according to their work. If they are idle, rations won't be given. A missionary who remembers those days told me "Aboriginal people in those days were like small children who do not know anything. They are to be taught every single step

one by one. The system of rations was meant to teach them the importance of consistent labor."

The labor and employment in the mission showed clear distinction by sex which is based upon the missionaries' image of gender. Men are employed in the garden, the sawmill, as drivers of boat and car, for maintenance of machines, and for construction and etc. Women on the other hand, are employed in sawing factory and dining room, as the domestic servant in the missionaries' houses, as nurse-aides or teacher-aides. These practices are universal in worldwide as we have seen, and also common in 19th century, and result in fixing the rather classical image of gender roles. Upon that, missionaries, even unconsciously, have expected Aborigines to be obedient manual laborers or house servants only, in the name of assimilation.

One of the characteristics of the 20th century mission in Australia is the increased participation of women that is clearly shown in the above three cases. With the existence of women, Aboriginal women's daily activities came to be placed under the direct supervision of those women. Aboriginal women's movements and activities are restricted, their supervision covers whole family matter which is regarded as the women's job, such as a way of domestic life, child care, a sense of morality, cleanness etc.

The other characteristic of this period is that welfare function of the mission. Missions are supported by the government to assimilate Aborigines. Financial support made mission possible to give stable ration to Aborigines, to start various new projects at the mission, which is attractive for Aborigines. By the ration, in many missions, women became free from gathering activities, but on the other hand, women is now

## 2) The remaining influence of the mission in Elcho

As a result of the ideal image of marriage provided by mission, today in Elcho, the number of polygamous marriages declined. And even when they acquire plural wives, the numbers of them are declined. Also, the age differences of the couple are become shorter. As I mentioned earlier, mission did not prohibit polygamy, but they urge monogamy. As a result of that, the discourse that monogamous marriage is desirable is

widely shared by both men and women generally. The once common practice of bestowal of mother in law has ceased and changed into the promise of marriage between future husband and wife, and even this arrangement is getting to lose its binding force. All these changes end in the decrease in number of wives and age difference. It is interesting to point out that whereas some of the younger generation get into the polygamous marriage, distinguished number of couples in their 50s or 60s, who were active workers in the mission days, remain in monogamous relationships.

Now in Elcho, average number of the people in one household is about 10. The composition of each household is not the nuclear family. Daily activities such as cooking, eating, washing are done by the units, which does not overlap with the actual household. On the one hand, some household can be divided into several units; on the other hand, those units extend to other households. In other words, it is more common actual household is not the conclude body of daily activities. You will never see communal dinnertime by the households or happy family relaxing time. The image of nuclear family does not fit to this area.

As shown in Table 2, in the town of Elcho in 1996, there are 18 households, which has male head out of 32 household. Nearly 80 percent of them are nuclear family. The households with female head tend to be extended family with matrilineal dependents. They can be assumed that each started off with nuclear family gradually added new members, and upon death or move of the male head, it turned out to be extended form of household.

In outstations, similar patterns can be seen. Although available data is about only two cases, Case A is established in 1970s and B in 1990s. It is clear that Case B is formed according to the patrilineal ideology, whereas it is difficult to find the nuclear family in Case A, and matrilineal connection is very strong.

Both households and outstations were structured according to the nuclear family group image, which was imposed by the mission at the beginning. But after some time, it is assumed that the other ideology such as matriline or other complex relationships are came in, and the style of the each household or outstations are more similar to the extended big

family.

In other words, the notion of nuclear family forced upon them during the mission day is barely accepted and shared as the image. But it is not the strong ideology but an image so that the actual daily behavior can be flexibly changed according to the need and benefit of daily life. Sometimes, for example, they form daily groupings beyond the nuclear family size through matrilineal kinship relationships.

The Missionary's ideal image of the nuclear family lead by male head cast a shadow on their everyday life today, as their images of domesticity. For example, in their daily life, women do all the domestic jobs. Cooking of most of the game animals are done by men in outside, but cooking of purchased market foodstuff in the kitchen is exclusively women's job. As a woman I am often asked to cook in the kitchen especially for men. Cleaning of the rooms of the house is also regarded as women's job. Although men do clean up the ceremonial ground or garden, blooming and mopping using detergent is never done by men. Women regards it is their responsibility to keep the house clean. The house I stay at Elcho is not necessarily very clean, and the people are not so enthusiastic about cleaning as others clean clean. It often happens that, all in sudden, without reasons, sometimes even in the middle of night, one of the female member of the family abruptly started to mop the whole house. Besides these, washing, sawing is also exclusively women's job. These are not only the division of labor by sex, but upon on that, the idea of `men to be served` is now widely shared.

### 3) Social enrolment of Women

Women's participation in the public is prominent in Modern Township of Elcho. For example in school, higher the grade, the more female students ca be found in the classroom. Boy tends to drop out from school earlier than the girls. Which end up more female children to acquire higher education. In the workforce, although most of the political position and legal position in the township council occupied by men, other positions are occupied overwhelmingly by women. And more importantly, they are very stable. Almost all the positions require special knowledge, such as teachers, nurses, and computer works etc are occupied by women

too. Women's active role in modern indigenous society is not uncommon. It is widely known phenomena and most of these areas; mission imposed the idea of division of labor, and placed women in the household under the supervision of man. And missionaries educated girls at school to provide good wives. Though, as a result of that, many women upon leaving school found themselves an efficient workforce. In Canada, Carrie Indian's case shows us one of such situation. Under the education by the mission forcing gender ideology in 20th century, girls make a good relationship with missionary women so that they can avoid strict punishment and can have little more freedom. It functioned as soft resistance as against missionaries' intention; the girls went into the workforce [Fishke 1996].

In Elcho, one of the reasons of boys to drop out from school is that almost all the teachers are female. Girls on the other hand can form intimate relationships to teachers, so they can more adaptable to school life. With education, women gain a power to be a useful workforce. In the mission days too, Aboriginal women had an intimate relationships with mission women, which they remember clearly. It is assumed that the situation at the school was similar to now, which produce many Aboriginal women teachers and nurses now. Besides, white women who are the wives of missionaries are consistent and diligent workers at the mission, who help her husband obediently and at the same time, do all the domestic work and keep the house clean and comfortable. It is also assumed that those women were functioned as role models to Aboriginal women in the mission days due to the intimate relationships between them. At the same time, probably it is important to point out that Aboriginal women had a traditional work ethic of gathering which is comparatively consistent and diligent.

## 5. Conclusion

In this paper, I have gone through some historical cases of mission activities both inside and outside Australia, in 19th and 20th century. And I tried to point how the gender ideology was forced upon the indigenous people by the activities of mission under the colonization. In 19th century in Australia, mission was a failure due to the lack of support by the

government and the prejudiced attitude to Aborigines. In 20th century, on the other hand, in the course of the change of government policy against Aborigines to Assimilation, they expand the financial support to Aborigines, and mission was taking the welfare role to them. Missionaries' attitude to Aboriginal culture were changing to be more tolerant, Aborigines also started to utilize facilities and benefits of the mission. Of course, these changes are under the general trend of Australia. Australian federal was established in 1901, which gave the people the idea of whole Australia. Besides, with the gradual increase of criticism from outside on the treatment of Aborigines, people started to see north where savage and pure aborigines still survive. It is symbolic that in the beginning of 20th century, various missions started their activities in north. Thus in Australia, there was a drastic political and social change between 19th and 20th century.

The mission activities in Elcho were one of the extreme cases with prominent 20th century character. I once pointed elsewhere about the unique historical characteristics of colonization of this area and its modern effect [Kubota 1999]. The close and intimate relationship between missionaries and Aborigines were formed without force nor arm, Aborigines were cooperative, and the management of the mission went relatively smoothly and peacefully. However, when you see the same process from the point of view of the introduction of gender ideology, it is now clear that the basic ideology of the mission was continuous with 19th century.

Both in 19th century and 20th century, and inside and outside Australia as well, granting some minor differences according to sects, area, and the time, the Christian persistence of stable and settled male headed monogamous family life are universal. Which also accompany the idea of sex division of labor that men to work for bread outside the family, and women do the domestic work to make comfortable family and rear children. This family ideology can be called as mission ideal, were internalized in minds of missioners themselves. So even if there were not many formal education or enforcement of the family ides, it is natural consequences for the people who have close relationships for a long period with them to be influence by the idea. Especially, in Elcho where the

relationships of missionaries and Aborigines are so intimate as I noted, it is assumed that their image of family life was influenced.

The situations in Elcho that we saw in this paper shows that nuclear family and its life style which mission had in mind is not functions as the strong ideology. But it is quite obvious that people value of domestic life and the role of woman according to the ideology given by the mission, which can be called as domestic image. In Elcho, the ideology of nuclear family life was not enforced nor educated formally, thus it is not functions as the ideology of family to restrict their daily behavior. In other words, Aborigines in Elcho do not share nuclear family ideology, and their mode of daily activities is placed on clans and kin. However, the image of 'stable, male headed monogamous nuclear family' is shared amongst them. The influence of the mission I Elcho, gave the image of family which was not existed before.

The change in the gender relationships in Elcho, as a consequence, is neither the improvement nor the deterioration of women. Also, it is not the case in Echo that the welfare role of mission made women dependent, which provide the base for male-headed nuclear family with dependent wives. Women have an active role in the society on the basis of education by mission now. It is probable that in the mission days, which continues in Elcho until 1970s, women's autonomy was lowered due to the ration system and domestic labor assigned on them. But Before the mission and after then, women keep their autonomous daily activities which is not restricted by the ideology of nuclear family. However, the nuclear family ideology exists in Aboriginal people's mind as their ideal image of the domestic life. Notion of the modern family and gender ideology of the mission has at least cast a shadow on individual minds of Aboriginal women today.

Reference:

Ackerman, L. □@1987 The Effect of Missionary Ideals on Family Structure and Women's roles in Plateau Indian Culture, Idaho Yesterdays, 31:64-73.

Bell, D. 1988 Choose Your Mission Wisely: Christian Colonials and

Aboriginal Marital Arrangements on the Northern Frontier, in Swain, T. & D. Rose eds. Aboriginal Australians and Christian Missions. The Australian Association for the Study of Religions.

Blythe J. & McGuire P. 1996 The Changing Employment of Cree Women in Moosonee and Moose Factory, in Miller C & Chuchryk P eds. Women of the First Nations, The University of Manitoba Press

Brettell, C. B. & C.F. Sargent (eds.) 1997 Gender in Cross-Cultural Perspective, Prentice Hall

Chase, A. 1988 Lazarus at Australia's Gateway: The Christian Mission Enterprise in Eastern Cape York Peninsula, in Swain, T. & D. Rose eds. Aboriginal Australians and Christian Missions. The Australian Association for the Study of Religions.

Fiske, J. 1996 Gender and the Paradox of Residential Education in Carrier Society, in Miller C & Chuchryk P eds. Women of the First Nations, The University of Manitoba Press

Grimshaw, P. 1997 New England Missionary Wives, Hawaiian Women and the cult of true womanhood, in Brettell & Sargent eds. Gender in Cross-Cultural Perspective, Prentice Hall.

Harris, J. One Blood

Hamilton, A. 1989 Band-Slaves of Satan, Jolly & Macintyre eds. Family & Gender in the Pacific : Domestic contradictions and the colonial impact, Cambridge University Press.

James, C. 1996 Nez Perce Women in Transition 1877-1990, University of Idaho Press.

Jacobs, J, Laurence, C. and Thomas, F. 1988 'Pearls from the Deep' :

Re-evaluating the Early history of Colebrook Home for Aboriginal Children, in Swain, T. & D. Rose eds. *Aboriginal Australians and Christian Missions*. The Australian Association for the Study of Religions.

Keen, I. 1994 *Knowledge and Secrecy in an Aboriginal Religion*, Clarendon Press, Oxford.

Loos, N. 1988 *Concern and Contempt: Church and Missionary Attitudes towards Aborigines in North Queensland in the Nineteenth Century*, in Swain, T. & D. Rose eds. *Aboriginal Australians and Christian Missions*. The Australian Association for the Study of Religions.

Wolf, B. 1996 *Life in Harmony with Nature*, in Miller C & Chuchryk P eds. *Women of the First Nations*, The University of Manitoba Press

平成12年度～平成15年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)  
研究成果報告書 (課題番号 12610310)

ポスト・コロニアル状況における先住民社会の変容の研究  
—オーストラリアとカナダの比較の視点から—

平成16年3月31日発行

研究代表者 窪田幸子(広島大学総合科学部)

発行 広島大学総合科学部広域文化研究講座

東広島市鏡山1-7-1

印刷 広島大学生協